國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵　城一本『平家物語』翻刻 巻七～九

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター 公開日: 2025-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野中, 哲照 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001490

國學院大學図書館所蔵
城一本『平家物語』翻刻　巻七～九

野中哲照

八坂板平家物語　共十二冊（手書き）　」表紙裏

（遊紙）　」一オ

（遊紙）　」一ウ

平家物語巻第七目録

しみづのくはんじや　ひうちかつせん
つねまさちくぶしままうで　木曾のくわんじよ
くりからおとし
しのはら合戦
さねもりさいご
げんばう
木曾山門へのてうじやう
山門へんてう
れんじよのぐはんじよ　」二オ

上主の都落
これもりのみやこ落
せいしゆりんかう
たゞのりの都落
つねまさのみやこおち
一門のみやこおち
福原おち

」二ウ

平家物語巻第七

清水のくはんじや

しゆゑい二年三月上じゆんに兵衛の佐と木曾のくわんしや義仲ふくわいの事ありけり兵衛の佐木曾ついたうのためにそのせい十万余騎にてしなのゝ国へはつかうす木曾はよ田の城に有けるが是を聞てよたの城を出てしなのと越後とのさかひ熊坂山にぢんをとり兵衛の佐は同き国善光寺につき給ひぬ木曾めのと子の今井の四郎かねひらを使者にて兵衛のすけのもとへ云つかはすやういかなる子細あれば義仲をうたんとはのたまふなるそ御へんは東八ケ国をうちしたかへてとうかいだう」三オ

よりせめ上り平家をおいおとさんとし給ふ也よしなかはとうせんほくろく両道をしたかへて今一日もさきに平家をせめ落さんとする事にてこそあれ何ゆへに御へんとよしなかと中をたかふて平家にわらはれんとは思ふべき十郎蔵人殿こそ御へんをうらむる事ありとてよし仲かもとへおはしたるをよしなかさへすげなふもてなし申さん事いかんぞやさ候へはうちつれ申たりまつたふよしなかにおゐては御へんにいしゆ思ひならすといひつかはす兵衛のすけの返事には今こそさやうにのたまひ候とも終はかたきとおほえ候たしかに頼朝うつべきよしのむほんのくはたて有と申もの」三ウ

ありたゝしそれにはよるべからすとて土肥梶原をさきとしてすでにうつ手をさしむけらるゝよし

聞えしかば木曾しんじついしゆなきよしをあらはさんがためにちやくし清水のくはんじやよししげとて生年十一歳になるせうくはんにうんのもろつきすわふぢさわなといふきこゆる兵共をつけて兵衛の佐のもとへつかはす兵衛の佐このうへはまことにいしゆなかりけるそ頼朝いまだせいじんの子をもたずよし〳〵さらば子にし申さんとてしみつのくはんしやをあひぐして鎌倉へこそ帰られけれ其後木曾越後の国へうつて出城の四郎と合戦す城の四郎又いくさにまけて出羽のかたへそ　」四オ

落行けるさる程に木曾東山ほくろく両道をしたかへて五万余騎のせいにてすてに都へせめのほらんとす平家は去年のふゆのころよりして明年は馬のくさかひにつゐて軍有へしとひろうせられたりけれはせんおんせんやうなんかいさいかいのつはもの共うんかのごとくにはせ参る東山道は近江みのひだの兵ともまいりたりけれともとうかい道とうたうみよりひがしは参らすほくろく道はわかさより北の兵共は一人もまいらす伊豆の国の住人伊藤の九郎すけうちさかみの国の住人また野の五郎かげひさ武蔵の国の住人長井のさいとうべつたうさねもりは平家のかたへそ参りける平家まつ　」四ウ

木曾のくはんじや義仲をつゐはつして其後兵衛の佐をうたんとてほくろくだうへうつ手をつかはさる大将軍には小松の三位の中将これもり越前の三位みちもりふく将軍には但馬のかみつねまささつまのかみたゞのり三河のかみとものりあわぢのかみきよふさ侍大将には越中のせんじもりとしかつさの大夫判官たゞつなひだの大夫判官かげ高たかはしの判官ながつな河内の判官ひでくに武蔵の三郎左衛門有国ゑつ中の次郎兵衛盛次かつさの五郎兵衛忠光あく七兵衛かげ清をさきとして以上大将軍六人しかるべきさふらひ三百四十余人都合そのせい十万余騎じゆゑい二年四月十七日の　」五オ

たつの一天にみやこをたつて北国へこそおもむき
けれかたみちをたまはつてけれは相坂のせきより
はじめて路次にもてあふけんもん勢家のしやう
さいくわんもつをもおそれす一々にみなうばひ取
しかゝらさき三つかわしかまの高島しほつかいづ
のみちのほとりを次第についふくしてとをりけれ
はにんみんこらへすして山野にみなでうさんす

つねまさちくぶ島まうで

大将軍これもりみちもりはすゝみ給へともふく
将軍つねまさとものりきよふさなとは未近江の
国しほつかいつにひかへられたり其中につねまさ
はしい歌くはんげんにちやうし給へる人なれは

」五ウ

かゝるみたれのなかにもこゝろをすましみつうみ
のはたにうち出てはるかにおきなる島を見渡し
ともにぐせられたる藤兵衛ありのりをめしてあれ
はいつくといふそとゝはれけれはあれこそ聞え候
竹生島にて候へと申すさる事ありいさやまい
らんとてさふらひ安衛門の尉もりのり藤兵衛の
ぜうありのりをはじめ五六人めしぐして小舟に乗
ちくぶ島へそわたられけるころは卯月中の八日
の事なれはみどりに見ゆる木すゑには春の心を
残すかとかんこくのわうせつこゑおゐてはつねゆ
かしきほとゝきすおりしりかほにつげわたり松に
ふちなみさきかかつてまことにおもしろかりけれは

」六オ

いそきふねよりおりきしにあかつて此しまの気色
をみ給ふに心もことはもをよはれす彼しんくわう
かんぶあるひはとうなんくはん女をつかはしあるひ
は方士をしてふしのくすりをたつねしにほう
らいを見すはいなや帰らじと云ていたづらに舟の
中にておいてんすいばう〳〵としてもとむる
事をえざりけんほうらいとうのありさまもかくや
ありけんとそみえしあるきやうの文にいわく
ゑんふたいのうちにみつうみありその中にこん
りんさいよりおい出たるすいしやうりんの山あり
天女住所といへりすなはち此島の事也つねまさ

明神の御まへについゐ給ひつゝそれ大べんくどく　」六ウ
天はわうごの如来法身の大士也べんざいめうおん
二天の名はかくべつ成といへとも本地一体にして
しゆじやうをさいどし給へり一度参けいのともがら
はしよぐはんじやうじゆゑんまんすとうけたまは
るたのもしうこそ候へとてしばらくほつせまいらせ
給ふにやう〳〵日暮ゐまちの月さし出てこしやう
もてりわたりしやだんもかゝやきまことことにおもしろ
かりけれはしやうぢうの僧是はきこゆる御事なり
とて御びわをまいらせたりつねまさ是をひき給ふ
にしやうげんせきしやうのひきよくには宮の内も
すみわたり明神かんおうにたえすしてつねまさの
袖のうへにびやくりうげんしてみえ給へり忝なふ　」七オ
うれしさのあまりになく〳〵かうぞ思ひつゝけ給ふ
　ちはやふる神にいのりのかなへはや
　しるくも色のあらはれにけり

さればおんできを目のまへにたいらけけうとを
只今せめ落さん事何のうたがひあるべきとよろ
こふて又舟に取乗て竹生島をそ出られけり
　火うちかつせん
さる程に木曾は越後のこうにありながら越前の
国火打か城をそかまへける城のうちに籠るせい
とがしの入道ぶつせいはやしの六郎光明へいせん
寺のちやうりさいめいいぎしにうぜんみやさき
いし黒内田のものども都合そのせい六千余騎とそ　」七ウ
聞えし平家十万余騎ひうちがじやうにおしよせて
せめんとす所もとよりくつきやうのじやうくわく
なりばんじやくそはだちめぐつて四方にみねを
つらねたり山をうしろにして山をまへにあつ
じやうくわくの前にはのうみ川新道河とてなかれ
たり二の川のおちあひに大木を切てしからみに
かき大せきをたゝみあげたりけれは水東西の山の
ねをひたしてひとへにみつうみにのそむがごとし

かげ南山をひたしてあをふしてくはうようたり波
西日をしつめてくれなゐにしていんりんたり彼こん
めいちのありさまもこれには過しとそみえし舟
ならではたやすくわたすへしともみえさりけれは　」八オ

平家の大せいむかひの山にぢんとつてむなしく
日数をそ送られけるかゝりけるところに城のうち
に候ひけるへいせん寺のちやうりさいめいいきし
平家に心さしありけれは夜に入て山のねをまはり
文を書てひきめにいれ平家のぢんへぞ射入たる
平家のつはもの是をみて爰なるひきめのならぬ事
こそふしぎなれとてとつて見けるになかにふみそ
ありける大将軍に見せ奉るひらひて見給へは此
川はわうごよりのふちにはあらす一たん山河をせ
きあけて候夜に入てあしかるともをつかはして
しがらみを切落させ給はゝ水は程なくおつべし馬
のあしきゝくつきやうの所にて候いそぎよせさせ　」八ウ

給へうしろ矢におゐては仕らんする候かう申は
へいせんじのちやうりさいめいいぎしにて候なり
とそ書たりける平家なのめならすよろこび給ひて
夜に入てあしかるどもをつかはしてしがらみを
きりおとさせられたりけれはけにも山川ではあり
水程なく落にけり平家しばしのちゝに及はす十万
余騎を大手からめて二手にわけてそよせられける
其時城のうちに候らひけるへいせん寺のちやうり
さいめいいきし手せい三百余騎を引わけて平家に
忠をそいたしけるとがしはやしにうぜんみやさき
いしくろ内田のものともふせきたゝかふといへど
も大せいにぶせいかなはねばさん〳〵にうち　」九オ

ちらされ加賀の国に引しりそき一のはしをひ
いてしら山河内にたて籠る平家つゝひてかゝの国
にみたれいりとがしはやし二ケ所のしやうくわく
をやきはらふ何おもてをむかふべしともみえざり
けり大将軍小松の三位の中将これもりひきやくを

もつて都へ此由を申されたりけれはおほいとのを
はじめて残りとゞまり給へる平家のゆかりの人々
いさみのゝしり給ふ事なのめならず去程に平家は
かがの国しのはらにてせいそろへあり十万余騎を
おう手からめて二てにわけてそむかはれけるおう
ての大将軍には小松の三位の中将これもり越前
の三位みちもり三河の守とものり都合其せい七万　」九ウ

余騎加賀越中のさかひなるとなみ山へそむかはれ
けるからめ手の大将軍にはさつまのかみたゞのり
但馬のかみつねまさわかさのかみつねとし都合其
せい三万余騎能登越中のさかいなるしおの山へそ
むかはれけるさる程にかゝの国の住人はやしの
六郎光明木曾殿へ使者を立てさりともと存候ひ
つる火打か城をばへいせん寺のちやうりさいめい
いぎしがかへりちうに依てやぶられ候ぬさ候へは
平家大せいにてむかはれ候となみ山を打こへゑつ
ちうのひろみへ出る程ならはゆゝしき御大事
にてそ候はんずらんいそぎよせさせ給へと申たり
けれは木曾は越後のこうにありけるがこれを聞て　」一〇オ

五万余騎にてはせむかふおなしき五月九日ゑつ
ちうの国六どう寺につくわかいくさのきちれい
なれはとて七手につくるまづおぢの十郎蔵人行
家一万余騎にてしおの手へそむけられけるにしな
たかなし山田の次郎七千よきにて北黒坂へからめ
手にさしつかはすひぐちの次郎兼光おちあひの
五郎兼行七千余騎にてみなみぐろさかへそ
つかはしける一万余騎をはとなみ山のくちくろ坂
のすそ松長のやなき原くみの木ばやしに引かくす
今ゐの四郎かね平六千よきにてわしのせをうち
渡し火の宮はやしにぢんをとる木曾我身は一万
余騎にておやべのわたりをしてとなみ山の北の　」一〇ウ

はつれはにうにぢんをそ取たりける

木のくはんじよ

木曾のたまひけるは平家さだめて大せいなれはとなみ山をうちこしてかけあひの軍にてそあらんすらんたゝしかけあひのいくさと云はせいのた少による事なり大せいをかさにかけてはあしかりなんまつはたさしをさきたてゝしらはたをさしあげたらは平家これを見てあわや源氏のせんぢんはむかふたるはさだめて大せいにてそ有らんさうなふひろみへいつるなかたきはあんない者我等はぶあんないなりとり籠られてかなふまじこの山は四方がんせきにてあんなれはからめ手へよもまは

」一一一オ

らじしばしおりゐて馬やすめんとて山中におりゐんずらん其時義仲しばらくあひしらふやうにもてなして日をまちくらし平家の大せいをくりからがたにへおいおとさうとおもふなりとてまつしらはた三十なかれさきたてらる同き十一日のみのこくばかりに黒坂のたうげにはせつゐてしらはた三十ながれ一度にはつとさしあげたりけれはあんのことく平家のかたにこれをみてあわや源氏の一ぢんこそむかふたれこゝは山もたかふ谷もふかふ四方かんせきなりからめ手さうなふよもまはさし馬の草かい水びん共によけなんめるそこゝにちんをとれやとてとなみ山の山なかさるがばゞと

」一一〇ウ

いふ所に平家七万余騎おりゐてぢんをぞとつたりける木曾は八幡のしやりやうはにうのもりにぢんとつて四はうをきつとみまはせは夏山のみねのみどんの木の間よりあけのたまかきほのみえてかたそぎ作りの社ありまへにとりゐそ立たりける木曾国のあんない者をめしてあれにみえさせ給ふをは何の社いかなる神をあかめ奉たるそとの給へはあれこそ八幡をうつし奉つてたう国の新やはた共申又ははにうの社とも申候なりとそ申ける木曾なのめならすよろこび給ひて手書にぐせられたりける大夫ばうがくめいをめして義仲こそ幸に氏神八まん大ぼさつの御宝前にちかつき奉て合戦を

」一二オ

とげんとすれさらんにとつてはかつうは後代の
ためかつうはたうしのきたうの為にくはんしよを一
筆まいらせばやと思ふはいかゞあるべきとのたまへ
ばかくめい此儀もつともゆゝしう候ひなんとて馬
よりおりてかかんとすかくめいがその日のしやう
ぞくにはかちのひたゝれにくろいとおとしの
よろひをき三じやく五寸のいか物作の太刀をはき
廿四さいたる大中黒の矢おひぬりこめとうのゆみ
わきにはさみつゝかぶとをはぬいてたかひほに
かけゑひらより小すゝりたたうかみをとりいだし
木曾殿の前についひさまついてくはん書をかく
す千の兵これを見てあつはれ文武とものたつしや　」一二ウ

かなとぞほめたりける此がくめいと申すはもとは
じゆけの者也蔵人光ひろとてくわんかくゐんに
候ひけるか出家して三じやうはうしんきうと名乗
てしばらく南都にそ候ひける一とせ高倉の宮三井寺
へ入御のとき山門南都へてうじやうつかはされし

そのへんてうをも此かくめいそ書たりけるそも〳〵
清盛入道は平氏のさうかう武家のちんかいなりと
書たりけれは入道大きにいかつてじやうかいをさ
様にぬかかすちりあくたとかくべき事はいかに
にくし其しんきう法師いけどりにしてしさいに
おこなへとのたまへはがくめい南都にはこらへえ
て北国に落くだり木曾につゐてかいみやうす　」

一三オ

其名を大夫はうかくめいとそ名乗けるかゝりし
さいじん也けれはなしかはかきもそんずべき心も
をよはすぞかいたりける其くはんしよにいはく
きみやうちやうらい八幡大ぼさつはじちいきてう
ていの本所るいせい明君のなうそたりほうそを守
らんが為さうせいをりせんがために三身のきん
ようをあらはし三所のけんひをおしひらき給へり
こゝこにしきりの年より以来平相国といふもの
あつて四かいをくはんれいしばんみんをなうらん
せしむこれすでに仏法のあた王法のてきたり義仲

いやしくも弓馬の家に生れてわづかにきけうのちりをつく彼ほあくを見るにしりよかへりみる」一三ウ

にあたはすうんを天道にまかせて身を国家になく心みにぎへいをおこしてけうきをしりそけんとす今とうせん両家のちんをあわすといへともしそついまだ一ちのいさみをえさるあひだまち〳〵の心おそれたる所に今一ぢんはたをあくせんちやうにしてたちまちに三所和光のしやだんをはいすきかんのじゆんしゆくあきらかなりけうとちうりくうたがひなしくはんぎなんだこほれてかつがうきもにそむぞうそぶ前のみちのくにのかみ源の義家の朝臣身をそうべうのしぞくにきふして名を八幡太郎とかうせしより以来そのもんようたる者ききやうせずといふ事なし義仲いやしくもその」一四オ

こういんとしてかうべをかたふけて年久しいま此たいこうをおこす事たとへはゑんじのかいをもつてこかいをはかりたうらうがおのを取てりうしやにむかふがごとし然といへ共家のため身の為にしてこれをおこさす国のため君のためにして是をおこす心ざしのいたりしんかんそらにあらんをやたのもしきかなよろこはしきかなふしてねがはくはみやうけんいをくわへれい神ちからを合て勝ことを一時にけつしあたを四方へしりそけ給へしからばすなはちたんきみやうりよに叶ひゆうけんかごを成べくんはまづ一つのすいさうを見せしめ給へ」一四ウ

じゆゑい二年五月十一日　源の義仲敬白

と書て我身をはじめ十三騎がうわ矢をぬきくはんじよに取そへて大ぼさつの御宝前にそおさめけるくりからおとし

たのもしきかな大ほさつしんじつの心さしふたつなきをやはるかにせうらんし給ひけん雲のなかより山ばと三つ飛来て源氏のしらはたのうへに

へんはんすむかしじんぐう皇后しんらをせめさせ
給ひしに御方のたゝかひよはくいこくの軍こは
くしてすでにかうとみえし時くはうこうてんに
御きせい有しかは雲の中よりれいきう三つとび
来たたてのおもてにあらはれていこくの軍やぶれ　」一五オ

にけり又此人々のせんぞらいぎの朝臣さだたう宗
たうをせめたまひしにも御方の戦よはくしてけう
との軍こはかりしかばらいきの朝臣かたきのちん
にむかつて是はまつたくわたくしの火にはあらず
神火なりとてひをはなつ風たちまちにいぞくの
かたへふきおほひさだたうがたちくりや川の城は
やけぬ其後いくさやぶれてさだたうむねたうほろ
ひにき木曾殿かやうのせんぜうをわすれ給はす
馬よりおりかぶとをぬきてうづうかひして今れい
きうをはいし給ひけん心の中こそたのもしけれ
去程に源平両方ぢんをあわすちんのあはひわづか
に三町はかりによせあはせたり源氏もすゝます　」一五ウ

平家もすゝます源氏のかたより勢兵十五騎たての
おもてにすゝませて十五騎かうは矢のかふらを
平氏のぢんへそ射入たる平家これをはかりこと共
しらす十五騎をいだして十五のかふらを射かへす
源氏三十きを出いて射さすれは平家も三十騎を出
いて三十のかふらをいかへす五十騎を出せは五十
騎を出し合百騎をいたせは百きをいたしあわせ両
方百騎つゝぢんのおもてにすすんたりせうぶを
せんとはやりけれともげんじのかたよりせいして
せうふをばせさせすげんじは加様にして日を暮し
平家の大せいをくりからが谷へおいおとさうとた
ばかりけるをすこしもさとらすしてともにあひし　」一六オ

らい日をくらすこそはかなけれ次第にくらふ
なりけれは北面よりまはしつるからめ手のせい一
万余騎くりからのだうのへんにまわりあひゑひら
のほうたて打たゝきときをとつとぞ作りける平家
うしろをかへり見ければしらはた雲のことくさし

あげたり此山は四方がんせきであんなれはからめ
手よもまはらじとおもひつるにこはいかにとて
さわぎあへりさる程に木曾殿おうてよりときの
こゑをあわせ給ふ松長のやなき原くみの木ばやし
に一万余騎ひかへたるせいも今井の四郎が六千余
きにてひの宮はやしにありけるもおなじくとき
をそつくりけるぜんご四万余騎がおめくこゑ山も　」一六ウ

川もたゞ一度にくつるゝかとそ聞えけるあんの
ごとく平家次第にくらふはなる前後よりかたきは
せめ来るきたなしやかへせやかへせといふやから
おほかりけれとも大せいのかたふき立ぬるは左右
なう取てかへす事かたけれはくりからがたにへ我
さきにとそおとしけるまつさきにすすんたる者の
みえねは此谷のそこにもみちの有にこそとておや
おとせは子もおとしあにおとせはおとゝともつゝく
主おとせは家の子郎等も落しけり馬には人ひと
には馬落重り〳〵さばかりふかきたに一を平家の
せい七万余騎てそうめたりけるがんせんちを流し
じがいおかをなせりされはそのたにのほとり岩の　」一七オ

はさまには矢のあなかたなのきず残ていまにあり
とそうけたまはる平家のかたにむねとたのまれ
たりけるかづさの大夫判官忠つなひだの大夫判官
かげたか河内の判官ひでくにもこのたにゝうつも
れてうせにけり入道相国の末子三河のかみとも
のりはあか地のにしきのひたゝれにむらさきすそ
ごのよろひをきくろかけなる馬にのりすいひやう
五十余騎あひくしてとつて返しこゑをあけて
かたきの中へかけ入給ふおか田のくはんじやちか
よし子息四郎重吉三百騎はかりて三河のかみを取
籠たり三河のかみ馬を射させかちだちになつて
太刀をぬきはしり懸ておか田のくはんじやちかよし　」一七ウ

がきたるかぶとのはちをはたとうたれけれはぬけ
て甲は落ぬ二の太刀でくびふつと打落すしげよし

父をうたせてやすからすやおもひけんおもてもふ
らす切てかゝる三河の守いまはかうとてはらかき
切てふし給ふ備中の国の住人せのおの太郎かね
やすと云聞ゆる大力もそこにて加賀の国の住人
くらみつの次郎なりすみが手にかかりいけどりに
こそせられけれ越前の国の火打が城にてかへり忠
したりけるへいせん寺のちやうりさいめいいきし
もとらはれぬ木曾殿あまりにくきに其法師まづ
切とてきられにけり大将軍これもりみちもりけう
にしてかがの国へそ引れける七万余騎か中より

」一八オ

わつかに二千余騎そのかれたる明る十二日おくの
ひでひらがもとより木曾殿へれうてい二ひき奉る
やがてこれにかゝみくらおいて白山の社へ神馬に
奉らる木曾のたまひけるはいまは思ふ事なし
たゞし十郎蔵人殿のしおのいくさこそおほつか
なけれいざゆいて見んとて四万余騎が中より馬や
人をすぐつて二万余騎はせむかふひみのみなとを
わたさんとするに折節しほみちてふかさ浅さを
しらざりければくらおき馬十ひきばかりおい入
たりくらつめひたるほどにてさういなくむかひの
きしへつきにけり浅かりけるそわたせやとて二
万余騎のせいうち入て渡しけりあんのことく十郎

」一八ウ

蔵人行家さん〳〵にかけなされ引しりそいて馬
のいきやすむるところに木曾さればこそとてあら
手二万余騎平家三万余騎が中へおめいてかけ入
もみにもうで火いつるほとにそせめたりける平家
のつはものともしばしさゝへてふせきけれ共こらへ
すしてそこをも終にせめおとさる侍ともおほく
ほろひにけり木曾しおのいくさにうちかつて能登
の小田中新王のつかのまへにぢんをとる

しのはらかつせん

木曾そこにて諸社へしんりやうをそよせられける
白山へはよこゐ宮丸すかうの社へはのみのしやう
多田の八幡へはてうやのしやうけゐの社へははむ

」一九オ

原のしやうをきしんす平せん寺へは藤島七がうを
よせらるさる程に平家は賀茂の国へひきしりそ
き阿高の川をまへにあてしの原にぢん取て人馬の
いきをそやすめられける去ぬるいしはし山の合戦
のとき兵衛の佐殿に矢射かけ奉りしものはまた
野の五郎かげひさ長井のさいとうへつたうさね
盛伊藤の九郎すけうぢうきすの三郎しげちかまし
をの四郎しげなうなり是等はしばらく軍の有らん
までやすまんとて日ことによりあひ〳〵しゅゑん
をしてそなくさみけるまつさねもりがもとにより
あひたりける時そいとうへつたう申けるはつら
〳〵此世の中のあり様を見るに源氏の御方はつ
よく平家の御方はまけいろにみえさせ給ふあひだ
いざをの〳〵木曾殿へ参らんと申けれはみなさん
候とそ同じける次の日又うきすの三郎がもとに
よりあひたりける時さいとうへつたうさても昨日
申せし事はいかにをの〳〵其中にまた野の五郎
すゝみ出て申けるは我等は東国ではみな人に
しられて名ある者にてこそあれ能に付てあなたへ
参りこなたへ参らふ事みくるしかるべし人をは知
まいらせずかけひさにおゐては平家の御かたにて
うち死仕候はんと申ければさいとうべつたう
あさわらつてまことにをの〳〵の御心共をかなひき
奉らんとてこそ申たれ其上さねもりは今度の軍」二〇オ
にうちしにせうとおもひて都へ参るましきよし
人々にも申おきたりおほいとのへもこのやうを
申上て候といひければみな此儀にそ同じける
同き五月廿一日たつの一天に木曾五万余騎あた
かの河を渡てときをとつとそ作りける平家のかた
には畠山のしやうじしげよし弟小山田のべつたう
有重宇都の宮の左衛門ともつなかれら三人は子共
みな兵衛の佐にしたかひつきたりしに依て去ぬる
治承より今までめし籠られたりしを大臣殿なんち
らはふるひ者とも也いくさのやうをもおきてよと

て北国へむけられたり是等兄弟五百余騎ありはた
三なかれうら風にふかせてぢんのおもてにすゝむ　」二〇ウ

木曾殿今井の四郎兼平をめしてあれにあるはた三
流さしあげたるはたれなるらんとゝはれければ
今井の四郎あれは武蔵の畠山とおほえ候木曾
の給ひけるは畠山は東国ではおほえのものそかし
たか見の王より八代のこうゐんむらおか五郎重門
より四代のはちようなりよいかたきそいくさよう
せよはせ合の合戦なるべし一手〳〵おしよせ〳〵
たゝかへ殿原とのたまへは今井の四郎五百余騎で
一ばんにこそおしよせたれはじめはたがひに
五騎十騎つゝ出しあはせてせうぶをせさせけるが
後には両方みたれあひてそたゝかひける畠山も今
井も家の子郎等おほくうたせてさつと引次に越　」二一オ

中のせんじもりとし一千余騎てすゝむ源氏の
かたよりたての六郎ちかたゞ五百余騎てむかふ
かごめばやふりやぶれはかこみさん〳〵にたゝ
かふて両方ひきしりぞく次に高はしの判官ながつ
な五百余騎てすゝむ源氏のかたよりひぐちの次郎
兼先おちあひの五郎かねゆき三百余騎てむかふ
しばしさゝへてたゝかひけるが高はしがせいは
国々のかり武者なれははか〳〵しうも戦はすわれ
さきにとぞ落行けるたかはし心はたけけれ共
力及はて引しりそきたゝ一騎落行し所に越中の
国の住人にうぜんの小太郎やすいゑよいかたきと
目をかけむちあふみを合てはせ来りおしならべ　」二一ウ

ひつくんで両馬があいへとうとおつにうせんは十
七歳たかはしはおよすけたる大力なればにうせん
をとつておさへくびをかかんとしけるか高はし
こしの刀をおといてなきあひだくびのほねをねち
きらふとするところにうせんがおぢ南条の次郎
家高落合てこしのかたなをぬきたかはしがよろひ
のくさすりをひきあげつゝけさまに三刀さいて

首を取さてこそ南条とにうせんと高はしがくひ
をはろんじけれ次に武蔵の三郎左衛門有国かつ
さのあく七兵衛かげきよ五百騎はかりておめいて
かく源氏のかたよりにしなたかなし山田の次郎五
百ばかりてはせむかふうつうたれつたゝかひ
」二二オ

けるか有国かげきよか方のせいおほくほろびぬ有
国は馬を射させかちだちに成てたゝかふ程に矢七
八いたてられ太刀をつえにつきかたきのかたを
にらまへてたちすくみにこそしたりけれかやうに
一手〳〵おしよせ〳〵たゝかひけるが後には源平
みたれあひてそたゝかひける五月廿一日むまの
こくはかりの事なれは草もゆるかすてらす日に
つはもの共我おとらしとたゝかふあひたへんしん
よりあせ出て水をながすにことならずまた野の
五郎かけひさはむかふかたきを十三騎うつとり今
はかうとてはらかき切てふしにけり伊藤の九郎
すけうぢうきすの三郎しげちかましをの四郎しげ
」二二ウ

なうみなうたれぬ平家そこをも終にせめ落され
てなく〳〵京へそのほられける

さねもりさいご

武蔵の国の住人長井のさいとうべつたうさねもり
味方はみな落行共たゞ一騎返し合〳〵ふせき
たゝかふ存するむねありけれはあか地のにしき
のひたゝれにもよきおとしのよろひきてくわがた
うつたるかぶとのおをしめ金作りの太刀をはき廿
四さいたるきりうの矢おい重藤の弓持てれんぜん
あしけなる馬にきんふくりんのくらおいてそ乗
たりける木曾殿のかたよりてつかの太郎光盛よい
かたきと目をかけむちあふみを合てはせ来りあな
」二三オ

やさしいかなる人にてましますそ味方の御せいは
みな落候にたゞ一騎残らせ給ひたるこそゆうなれ
名乗らせ給へとことはをかけけれはかう云はたそ
といふこれはしなのゝ国の住人てつかの太郎かな
さしの光盛とそ名乗たるさてはたがひによいかた

きなりたゝしわとのをさくるにはあらすぞんする
むねがあればなのるましいそよれくまふてつか
とておしならふるところにてづかが郎等おくれ
はせにはせ来て主をうたせしと中にへたゝり
さいとうへつたうにむずとくむあはれをのれは日
本一のかうの者ぐんてうずなうれとて引よせくら
のまへわにおしつけてくびかき切てすてゝけり　」二三ウ

てつか郎等がうたるゝをみて弓手かにまはりあひ
よろひの草すり引上て二刀さしよはる所をくんで
おつさいとうべつたう心はたけく思へ共軍にわ
しつかれぬいた手はおうつ其上老武者ではありて
つかか下に成にけり又てつかからうどうおくれば
せに出来るにくびとらせ木曾殿の御前にまいりて
光盛こそきいのくせものにくんでうつて候へ侍
かと見候へはにしきのひたゝれをきて候大将軍か
と見候へはつゝくせいも候はすなのれ〳〵とせめ
けれとも終に名乗候はすこゑははんどうこゑで候
つると申せは木曾殿あはれそれはさいとうへつ
たうさね盛にて有ごさんめれ但それならは義仲が　」二四オ

上野へ越たりし時おさな目にみしがしらがの
かすをなりしそいまはさだめてはくはつにこそ成
ぬらんにびんひげのくろいこそあやしけれひぐち
の次郎は年来なれあそんて見しつたるらんひくち
めせとてめされけりひぐちの次郎此くひを一め見
てあななむざんやさいとうべつたうにて候といひも
あらずなみだをはら〳〵とそながしける木曾殿ひん
ひけの黒いはいかにとゝはれけれはひくちなみた
をおさへて申けるはさ候へはこそ其様を申あ
げんと仕候かあまりにあはれにおほえてなみだの
こぼれ候弓矢取はいさゝかのところにても思ひ出の
ことばをは兼てつかひおくべきにて候ける物かな　」二四ウ

さいとうべつたう兼光にあふてつねに物語仕候し
は我六十にあまりていくさのぢんへむかわん時は

びんひげをくろふそめて若やかふと思ふなりそのゆへは若殿原にあらそひてさきをかけんもおとなげなし又老武者とて人のあなつらんもくちおしかるへしと申候しがまことにそめて候けるぞやあらはせて御らん候へと申けれは木曾殿さもあるらんとてなりあひのいけにてあらはせて見給へばはくはつにこそなりにけれにしきのひたゝれをきたる事はさいとうへつたうさいごのいとま申に大臣殿へまいりて申けるはさねもりが身一つの事にては候はねともせんねん東国へむかひ候し」二五オ

とき水鳥のはをとにおとろいて矢一たにも射すしてするがのかんはらよりにげのぼりて候し事老後のちしよくたゞ此事に候今度北国へむかひてはうち死仕候べしさあらんに取てはさねもりもとは越前の国のものにて候ひしかとも近年御りやうに付て武蔵の長井にきよぢうせしめ候き事のたとへ候古郷へはにしきをきてかへるといふ事の候にしきのひたゝれを御ゆるし候へと申ければ大臣殿やさしうも申たる物かなとてにしきのひたゝれを御ゆるし有けるとそ聞えしむかしのしゆはいじんはにしきのたもとをくわいけい山にひるがへし今のさいたうへつたうは其名を北国」二五ウ

のちまたにあくとかやくちもせぬその名ばかりをとゝめおきてかはねは越路のすゑのちりと成こそかなしけれ去ぬる四月十七日十万余騎にて都を立し事からは何おもてをむかふべしともみえざりしに今五月下しゆんにかへりのぼるにはそのせいわづかに三万余騎なかれをつくしてすなとる時はおほくのうををうといへとも明年にうをなしはやしをやいてかる時はおほくのけだものをうといへ共明年にけだものなし後を存じして少々は残さるべかりし物をと申人々もおほかりけり

げんばう

上総守忠ひ清だのかみかげいゑは去々年入道相国」二六オ

のこうせられし時出家したりしか今度北国にて子
ともみなうたれぬと聞てその思ひのつもりにや
いくほどなくて終にはかなくなりにけりこれを
はじめておやは子におくれ女はおつとにわかれ
をよそおん国近国もさこそありけめ京中には家々
にもんこをとぢてこゑ〳〵にねんぶつ申おめき
さけぶ事おひたゝし同き六月一日さいしゆ神
祇のごんのたゆう大中とみのちかとしを殿上の
下ぐちへめしてひやうがくしづまらは伊勢大神宮
へ行幸なるべきよし仰下さる大神宮は高間の
原よりあまくだらせ給ひしをすいにん天王二十五
年三月一日大和の国かさぬいの里より伊勢の国」二六ウ

わたらゑのこほりいすゝの川上したついわねに
大宮はしらをふとしきたていわひそめ奉てより
このかた日本六十よしう三千七百余社の大小の神
祇みやうだうの中にはぶさうの御神なりされ
とも代々の帝りんかうはなかりしに奈良の御門の

御時左大臣ふひらうのまごさんぎ式部卿うがうの
子左兵衛のごんの少将兼ださいの少弐藤原のひろ
つきといふ人ありけり天平十五年十月肥前の国
まつらのこほりにして数万のけうぞくをかたらひ
て国家をすでにあやぶめんとす是によつて大野の
あづま人を大将軍にてひろつきついたうせられし
時御いのりのためにはじめて大神宮へ行幸なり」

けるとかやそのれいとぞ聞えしかのひろつきはひ
ぜんのまつらよりみやこへ一日におりのぼる馬
を持たりけりついたうせられしときも味方のけう
そくおち行ほろひてのちくだんの馬にうちのつ
てかい中へはせ入けるとそ聞えし其ばうれい
あれておそろしき事共おほかりける中に天平十八
年六月十八日筑前の国みかさのこほりださい
ふのくはんぜおん寺くやうせられけるだうしには
法相宗のげんぱう僧正とそきこえし高座にのぼり
けいひやくのかね打ならすときにわかにそらかき

二七オ

くもりいかづちおびたゝしうなつてげんばうの上
に落かゝり其くびをとつて雲の中へそいりに　」　二七ウ

けるこれはげんばうひろつきをてうぶくしたり
ける故とそ聞えし彼僧正はむかし吉備の大臣につ
たうのときあひともなふてわたり法相宗わたし
たりし人也から人がげんばうといふ名をなんして
けんばうとはかへつてほろぶといふこゑありいか
さまにも此人帰朝の後事にあふべき人なりと
さうしたりけるとかや扨天平十九年六月十八日
しやれかうべにげんはうと云めいを書てこうふく
寺の庭におとしこくうに人ならば千人ばかりか
こゑにてどつとわらふ事ありけりこうふく寺は
ほつさうじうのてらたるによつてなりかの僧正の
弟子ともこれをとつてはかにつきそのくびをおさ　」二八オ

めてつはかと名つけて今にありこれすなはちひろ
つきかれいのいたすところなり是に依てかのばう

れいを神にあがめていまのまつらの宮かゝみと
かうすさがの皇帝の御とき平城のせんてい内侍の
かみのすゝめによつて世をみだり給ひしかは御
いのりのために御門第三のくはうぢよゆうち内
親王を賀茂のさいゐんにたてまいらつさせたまひ
けりこれさいゐんのはじめなりしゆしやくゐんの
御宇には将門すみともかひやうらんによつて八幡
のりんじのまつりをはじめらる今度もかやうのれ
いをもつて様々の御いのり共はしめられけり

木曾山門へのてうじやう　」二八ウ

木曾殿越前のこうについて家の子郎等めしあつ
めてひやうでうすそも〳〵義仲近江の国をへてこそ
都へは入候はんするにれいの山僧ともふせぐ事
もやあらんすらんかけやぶつてとをらん事はやす
けれとも平家こそ仏法ともいはす寺をほろほし僧
をうしなひあくぎやうをばいたせそれを守護のた
めにしやうらくせんものが平家と一つなれはとて

山門のしゆとにむかつて軍せん事すこしも
たかはぬ二のまひなるべしこれこそさすがやす大
事よいかゝせんとのたまへば手書にぐせられたる
たいぶはうかくめい申けるは山門の大衆は三千
人候かならず一み同心なる事は候はすみな思々
」二九オ

心々に候なりあるひは源氏につかんと云しゆと
も候らんあるひは又平家に同心せんといふ大衆も
候らんてうじやうをつかはして御らんし候へ事
のやうへんてうにみえ候はんすると申けれは此
儀もつともしかるべしさらはかけとてかくめいに
てうじやうをかゝせて山門へ送る其じやうにいわ
く源の義仲つら〳〵平家のあくきやくを見るに保
元平治より以来ながくじんしんのれいをうしなふ
然といへ共きせん手をつかねしそあしをいたゞく
ほしひまゝに帝位をしんたいしあくまでこくぐん
をろりやうすだうりひりをろんせずうさいむさい
をいはすけんもんせいけをついふくしけいしやう
」二九ウ

ししんをそんまうすそのしさいをうばひ取てみた
りがはしく郎従にあたへかのしやうゑんをもつ
しゆして悉しそんにはぶく就中去治承三年十一
月に法皇をせいなんのりきうにおし籠奉りはく
りくをかいせいのせついきにうつし奉るしゆそ
ものいはすたうろ目をもつてすしかのみならず同
き四年五月一院第二の御子高倉の宮のしゆかく
を打かこんで九重のこうちんをおとろかさしむ爰
に帝子ひふんのかいをのかれんがために三井寺へ
入御の時義仲せんじつりやうしをたまはつてさん
らくをくわたてんとほつするところにおんでき
ちまたにみちてよさんみちをうしなふきんけいの
」三〇オ

源氏なをさんこうせずいわんやゑんけいにおゐて
をやさればおんじやうはふんげんせはきに依て南
都へおもむかしめ給ふきざみ源三位よりまさ入道
父子宇治はしにしてめいをかるんじぎをおもん
じて一せんのこうをはけますといへともたせいの

せめをまぬかれすけいかいをこがんのこけにうつ
みせいめいを長河の波にながしおわんぬりやうし
のおもむききもにめんじどうるいのかなしみ
たましゐをうしなふ是によつて東国北国の源氏等
さんらくをくわたてんとす其中によしなか其しゆ
くいをたつせんがためにいんじ年の秋はたを
あげ剣をとつてしんしうを出し日越後の国の住人　」三〇ウ

城の四郎長持数万の軍兵をそつしてはつかうせし
むるあひだ義仲よこ田河原にはせむかつて合戦す
義仲わづかに三千のつはものをもつてかのすまんの
軍兵をやふりおわんぬ然を風聞ひろきに及で
重てへいぢの大将十万の軍士をそつしてほくりく
にはつかうすゑつしうかしうのうしうとなみ黒坂
しおあたかしのはら以下のじやうくわくにしてす
かとのかつせんにをよぶはかりことをいはくの
中にめくらして勝ことをしせきのもとにえたり
うてはかならずふくしせむれはかならずくだるたと
へば秋の風のばせうをやふるにことならすふゆの
しものくんようをからすに相おなじこれよしなか　」三一オ

がぶりやくにあらずひとへに神明ぶつだのたすけ
なり平氏すでにはいほくのうへはさんらくをくわ
たてんとす今ゑいがくのふもとをへてまさにらく
やうのちまたにいるべきなり此時にいたつて
ひそかにぎたいありそのゆへいかんとなれはそも
〳〵てんたい三千しゆと源氏に同心か平家に
与力かもしかのあくとをたすけらるべくんはしゆ
とにむかつてかつせんすべし若かつせんに及
はゝゑいかくのめつはうくびすをめくらすへから
すかなしきかな平家しんきんをなやまし奉り仏法
をほろほすあひだあくきやくをしづめんがために
きへいをおこす所にたちまちに三千のしゆとに　」　三一ウ

むかつてふりよの合戦にをよはん事をいたまし
きかないわう山わうにはゝかり奉てかうていにち

りうせしめはてうていくはんたいのしんとしてふ
りやくかきんのそしりをのこさん事をしんたいに
まどつてかくのことくあんないをけいする所なり
こいねがはくは三千のしゆと神の為仏のため君の
ために源氏に同心して平家をほろほしこうくわ
によくせんこんたんのいたりにたへすよしなか
きやうくはうつしんてまうす
　　じゆゑい二年六月十日
返上　　ゑくわう院のりつしの御城へとそ書たる
　　山門へんてう　　」三二オ

あんのことく山門には此じやうをひけんしてあるひ
は源氏に同心せんといふしゆとも有あるひは平家
に与力せんと云大衆もあり思々心々なり老僧共の
せんぎしけるは我等はもつはらきんりんしやう王
天長地久といのり奉り国家せいひつのせいきを仕
る平家はたう代の御くわいせき山門におゐてき
きやうをいたさるれば今に至るまて彼はんしやう
をきせいすされともあくきやく法にもれてはん
しんこれをそむいたり近年よりは国々へうつ手を
つかはすといへとも平家かへつていぞくのために
ほろほされうんめいすてにつきなんとすげんじは
ところ〳〵の軍に打かつてうんめいたちまちに　」三二ウ

ひらけなんとすなんそたう山ひとりしゆくうんつ
きぬる平家の方人してうんめいひらけぬる源氏を
そむかんや我等けふよりして平家ちぐの儀をひる
がへし源氏合力の心ざしにぢうすべきよし一み同
心にせんきしてかのへんてうをそ送りける木曾
又家の子郎等をめしあつめてかくめいに此へん
てうをひらかせらるそのじやうにいわく去ぬる十
日のてうじやう同き十六日たうらいひゑつの所に
数日のうつねん一時にけさんすをよそ平家のあく
きやくるいねんに及ててうていのさうどうやむ
時なし事じんこうにありいしつするにあたはす
それゑい山は帝都東北のじんしとして国家せい　」三三オ

ひつのせいきをいたすしかりといへとも一天久く
かのようけきにおかされ四かいとこしなへにして
其あんせんをえずけんみつのほうりなきがごとし
おうごのしんいしは〳〵すたる爰に貴下たま〳〵
るいたい武備の家にに生れてたうじさいわひに
せいせんの仁たりあらかしめきほうをめくらして
たちまちに義兵をおこす万死のめいを忘て一戦の
こうをたんしそのらういまだ両年を過さるに
其名すでに七道にほどこす国家のためるいかの為
ぶこうをかんじぶりやくをかんずわか山のしゆと
かつ〴〵もつてせうゑつすかくのごとくならは山
上のせいきむなしからさる事をよろこびかいたい　」三三ウ

のゑごおこたりなきことを知ぬじじ他寺じやう
住の仏法本社末社さいてんの神明今けうほうの
ふたゝびさかへん事をよろこびそうきやうのふる
きにふくせんことをさだめてすいきし給らん
しゆとらが心中たゞけんさつをたれよ然はすな
わちみやう〳〵は十二神上かたしけなくもいわう
ぜんせいの使者としけうぞくついたうのゆうし
に相くわはりけんには三千のしゆとしはらくしゆ
かくさんぎやうのきんせつをやめてあくりよぢば
つのくはんぐんをたすけしめんしくはん十ぜうの
ぼんふうはかんりよ和朝の外にはらひゆか三みつ
の法雨はしそくをげうねんのむかしに帰さんしゆ　」三四オ

とのせんぎかくのごとしつら〳〵是をさつせよ

じゆゑい二年七月二日　　大衆等

とそ書たりける

れんじよのくはん書

平家是をしらすかくて源氏の一ぢんすでに近付く
よし聞えしかば平氏の一るいこはいかゝせんとそさ
はかれける南都三井寺はうつふんをふくめる折節
なれはかたらふともよもなひかし山門はたうけに
おゐてふちうを存せずたうけ又山門におゐてあた
をむすはねは日吉の社へれんしよのくはんしよを

籠奉て三千のしゆとをかたらはんとて一門十一人
れんしよのくはんじよをかいてひよしの社へこそ　」三四ウ
送られけれ其くはん書にいはく敬白
　　日吉の社をもつて氏神とじゆんじゑん
　　りやく寺をもつてうぢ寺とかうして一
　　かうてんたいの仏法をあふくべき事
右たう家一ぞくのともがらことにきせいするむね有
ししゆいかんとなれはそれゑい山はくはんむ天皇
の御宇てんけう大しにつたう帰朝の後てんたい
のぶつほうを此ところにひろめしやなのたいかい
をそのうちにつたへたまひしよりこのかたふ
かくふつほうはんじやうのれいちとしてもつはら
ちんご国家のだうちやうにそなふ爰に今伊豆の国
の流人前の右兵衛の佐源の頼朝身のとがをくいす　」三五オ
かへつててうけんをあさけるしかのみならすがん
ばうにくみし同心をいたす源氏等行家義仲以下
たうをむすんて数ありきんけいゑんけいすこくを
そうりやうしとぎとこ万物をわうりやうせしむ
これによつてかつうはるいたいくんこうのあとを
おいかつうはたうじ弓馬のけいにまかぜてすみ
やかにそくとをついたうしけうたうをがうふくす
べきよしいやしくもちよくめいをふくんでしきり
にせいはつをくわたつこゝにぎよりんくわくよく
のぢんくわんぐんりをえずせいばうでんけきのい
けきるい勝に乗にゝたりもし神明ふつだのかび
にあらずんばいづれの日かほんげきのけうらんを　」三五ウ
しつめんこれもつて一かうてんたいのぶつほうに
きしふたいに日吉のしんおんをたのまんまくのみ
いかにいわんやしんらかなうそを思へは忝もほん
くはんのよゑいと云つべしいよ〳〵そうてうすべし
いよ〳〵くきやうすへしじこん以後山門によろこび
あらは一門のよろこびとししやけにいきとをり
あらは平家のいきどおりとしてぜんにつけあくに

つけともによろこひをなしおなじくうれへをいだ
かんをの〳〵しそんにつたへてながくしつだせじ
とうじは春日のやしろこうぶく寺をもつてうぢ社
うち寺とそんそうして久くほつさう大ぜうのしう
にきゑす平氏はひよしの社ゑんりへく寺をもつて」三六オ

うち社うち寺とききやうしてあらたにゑんしつ
とんごのけうにちぐせんかれはむかしのゆいせき
也家の為にゑいかうをおもふ是は今のせいきなり
きみのためについばつをこふあほきねがはくは
山王七社わうしけんぞくとうざいまんざんごほう
せいしゆ十二上くわんにつくはうくわつくわうい
わうせんせい十二神将をの〳〵む二のたんぜいを
てうしてゆい一のけんおうをたれ給へ然はすなはち
じやほうげき臣のぞくてを君門につかねばうぎや
くざんがいのともがらかうべをけいとにつたへん
我等が応誠仏神あにすてめや依てたう家の公卿等
いくどうおんにらいをなしてきせいかくのごとし」三六ウ

従三位行中宮の権資兼越前守平朝臣通盛
従三位行兼右近衛の中将平朝臣資盛
正三位行左近衛の権の中将兼伊与守平朝臣惟盛
正三位行左近衛の中将兼播磨守平朝臣重衡
正三位行右衛門督兼近江遠江守平朝臣清宗
参議正三位皇太后宮の権大夫兼修理の大夫加賀越
中守平朝臣経盛
従二位行中納言兼左兵衛頭征夷大将軍平朝臣知盛
従二位行権中納言兼肥前守平朝臣教盛
正二位行権大納言兼出羽陸奥守按察使平朝臣頼盛
正二位行権大納言兼左衛門督平朝臣時忠
従一位前の内大臣平朝臣宗盛」三七オ

寿永二年七月五日敬白とぞかかれたる
座主是をあはれみ給ひてさうなふもひろうせられ
ず十せんじの御殿に籠て三日かちして其後衆徒
にひろうせらるはじめはありともみえざりし一首
のうたくはんじよの上まきにあり

たいらかに花さくやどもとしふれば
　にしへかたぶく月とこそみれ
山王だいしあはれみをたれ給ひ三千のしゆと力を
あはせよとなりされともとしころ日比のふるまひ
しんりよにもたがひじんばうにもそむきにければ
いのれともかなはすかたらへともなひかざりけり
大衆まことに事の体をあはれみけれ共すてに　」三七ウ
源氏に同心のへんてうを送るに今又うろ〳〵敷
その儀をあらたむるにあたはすとてこれをきよ
ようする衆徒もなし
　主上の都落
同き七月十四日肥後の守さだよしちんぜいのむ
ほんたいらげてきくち原田まつらたう以下三千余
騎をめしくしてしやうらくすちんせいはわづか
にたいらけとも東国北国の軍いかにもしつまらず
同き廿一日の夜はんばかりに京中六波羅へんおひ
たゝし候くさうどうす馬にくらおきはるびしめもの
とも東西南北へはこびかくすありさまたゞいまかた
きのうち入たるやうなり明て後聞えしはみの源氏　」三八オ
さどの衛門の尉しけさだといふ者あり去ぬる保元
の合戦の時ちんぜいの八郎為朝かいくさにまけて
落人になりしをからめて出したりしけんじやう
にもとは兵衛のぜうたりしか右衛門のぜうに成ぬ
よつて一門にあたまれて平家につゐてへつらひ
けるか其夜の夜はんはかりに六波羅にはせ参つて
申けるは木曾すでに北国より五万余騎てせめ上り
ひゑい山ひがし坂本にみち〳〵て候たての六郎
親忠手書に大夫ばうかくめい六千余騎天たい山に
きをいのぼりそうぢ院をじやうくわくとすさ候へ
は三千のしゆとみな同心して只今都へせめ入よし
申たりけれは平家の人々大きにさわいて方々へ　」三八ウ
うつ手をむけられけり大将軍には新中納言知盛の
卿本三位の中将重衡の卿つかうそのせい三千余騎

みやこを立てまつ山しなにしゆくせらる越前の三位通盛能登の守教経二千余騎て宇治はしをかためらる左馬の頭行盛さつまのかみたゞのり一千余騎てよど路を守護せられけり源氏の方には十郎蔵人行家数千騎でうちはしを渡てみやこへいるとも聞えけり陸奥の新判官よしやすか子矢田の判官代義清すせん騎て大江山をへてしやうらくすとも申あへりつの国河内の源氏等うんかのごとくに同して都へみたれ入よし聞えしかは平家の人々此上はたゞ一所にていかにも成給へとて方々へむけられ」三九オ

たるうつ手ともみやこへよひかへされけり帝都名りの地にわとりないてやすき事なしおさまれる世たにもかくのごとしいわんやみたれたる世におゐてをや吉野の山のおくのおくへも入なばやとは思はれけれ共諸国七道悉そむきぬいつれのうらかおたしかるべき三かいむあんゆによくわたくとて如来のきんげん一乗のめうもんなれはなしかはすこしもたかふべき同き七月廿四日のさ夜ふけがたに前の内大臣宗盛公けんれい門院のわたらせ給ふ六波羅いけ殿へ参つて申されけるは此世の中の有様さりともとこそ存候つるに今はかうにこそ候らめたゞみやこの内ていかにもならんと」三九ウ

人々は申あはれ候へどもまのあたりうき目を見まいらせんもくちおしう候へは院をも内をもとり奉て西国のかたへ御幸をも行幸をもなしまいらせて見ばやとこそおもひなつて候へと申されけれは女院いまはたゞともかふもそこのはからひにてこそあらんすらめとて御衣の御たもとにあまる御なみだせきあへさせ給はす大臣殿もなをしの袖しほるはかりにみえられけり院をも内をも取奉つて都の外へ落行べしと云ことを法皇きこしめされてやありけん其夜按察大納言資方の卿の子息右馬の頭資時はかりを御供にてひそかに御所を出させ給ひてくらまのへんへ御幸成人是をしらざりけり」四〇オ

平家の侍きち内左衛門の尉すゑやすと云者有さか
〳〵しきをのこにて院にもめしつかはれけるが其
夜しも法住寺殿に御とのゐして候ひけるにつねの
御所のかたよに物さはがしうさゝめきあひて女房
たちしのひねになきなとし給へは何事やらんと
聞程に法皇のにはかにみえさせ給はぬはいづかた
への御かうやらんと云こゑに聞なしつゝあな浅
ましやとてやがて六波羅へはせ参り大臣殿に此由
申ければひがことでそ有らんとのたまひながら
きゝもあへすいそぎほうぢうしとのへはせ参つて
見まいらせ給へはまことに法皇みえさせたまはす御
前にさふらはせ給ふねうばうたち二位殿たんご殿　」四〇ウ

以下一人もはたらき給はすみなあきれたるさま也
さる程に法皇都の内にもわたらせたまはすと申
ほどこそありけれ京中のさうどうなのめならすい
わんや平家の人々のあわてさはかれける有様家々
にかたきうち入たりともかぎりあれは是には過し
とぞみえし日比は平家院をも内をもとりまいらせ
てさいかいの方へ御幸おも行かうをもなし奉らん
としたくせられたりしに法皇のうちすてさせ
給ひぬれはたのむ木の本に雨のたまらぬ心ちそせ
られけるさりとては行幸計也ともなしまいらせよ
とて同き廿五日の卯のこくばかりにすでにきやう
かうの御こしよせたりけれは主上は今年六年六歳未　」四一オ

いとけなふましますあひだ何ごころもなふめされ
けり国母けんれい門院御とうよにまいらせ給ふ内
侍所しんしほうけんわたし奉るいんやくときの
ふたけんじやうすずかなとも取ぐせよと平大納言
下知せられけれどもあまりにあわてさはゐで取落
す物そおほかりける日の御座の御けんなともとり
わすれさせ給ひけりやがて此時忠の卿くらのかみ
のぶもと讃岐の中将ときさね武士三人はかりそい
くはんにてぐぶせられける大臣殿をはじめて近衛
づかさみつなのすけかつちうをよろひきうせんを

たいしてくぶせらる七条をにしへしゆしやかを南へ行かうなるくちおしかりし御事也さる程に」四一ウ

かんてんすでにひらけて雲とうれいにたなひき明がたの月しろくさえけいめい又いそがはし爰にだにもかゝる事は見ず一とせ都うつりとてにわかにあわたゝしかりし事共はかゝるべかりしせんべう共今こそおもひしられけれ故入道相国の御むこ摂政殿も行幸にぐぶして御出なりけるが七条大宮にてびんつらゆふたるとう子の御くるまのまへをつつとはしりとをるを御らんすれば彼とう子の左のたもとに春の日と云文字ぞあらはれたる春の日と書てかすがとよめは法相おうごの春日大明神大しよくわんの御すゑをまもらせ給ひけりとたのもしうおほしめしけるところにくだんのとう子のこゑと」四二オ

おほしくて

いかにせんふぢのすゑばのかれゆくを

たゞはるの日にまかせてやみん

御供に候信藤左衛門の尉高直をちかふめしてつら〳〵事の体をあんするにぎやうかうはなれとも御幸はならす行末たのもしからす思食はいかにとおほせければ御うしかいに目をきつと見合たりやがてこゝろへて御くるまをやり返し大宮をのぼりに飛がごとくに仕る北山のへんちそく院へ入せ給ふ平家の侍越中の次郎兵衛盛次これをみまいらせて射とゝめまいらせんとしきりにすゝみけるが人にせいせられてとゝまりけり」四二ウ

惟盛の都落

小松の三位の中将惟盛の卿は日比より思ひまふけられし事なれどもさしあたつてはかなしかりけり此北の方と申は故中の御門の新大納言成親の卿の御むすめなり父にも母にもおくれ給ひてみなしごにてそまし〳〵けるたうがん露にほころびこうふんおもてにこびをなしりうはつ風にみた

るゝよろほひたくいすくなくそみえられける六代
御前とて十歳の若君やしや御前とて八さいのひめ
きみおはします三位の中将北の方にのたまひける
は日比申候ひしやうにこれもり一門にくせられて
西国のかたへ落行候なりいつくまでもくし奉る　」四三オ

べけれとも道にもかたき相後なれはこゝろやすふ
とをらん事ありかたしさ候へはとゝめおき奉る
そとよたとひ我うたれたりと聞給ふともさまなと
かへ給ふ事ゆめ〳〵あるへからす其ゆへはいか
ならん人にもみえて身をもたすけおさなき者とも
をもはくくみ給ふへし世のつねのならひなれは
なさけをかくる人もなどかなかるべきとやう〳〵
になくさめ給へ共北の方とかうの返事もし給はす
引かついてそなかれける三位の中将すでにうつた
たんとし給へは北のかた三位の袖にすかつて都
には父もなしはゝもなしすてられまいらせて後又
たれにかはみゆべきいかならん人にもみえよなと　」四三ウ

承るこそうたてけれせんせのちぎりありけれは人
こそあはれみ給ふとも又人ごとにしもやなさけを
かくべき日比はあさからぬさまにもてなし給へ
はわれもふかくたのみまいらせていつくまでもと
もなひ奉りおなじ野原のつゆともきえひとつそこ
のみくつともならんとこそ契りしにいつの
まにかはりぬる御心ぞやさればさ夜のねさめの
むつこともみないつはりになりにけりせめて我身
一つならばすてられ奉る身のうさをおもひ知ても
とゞまりなんあのおさなき者共をばたれにゆつり
いかにせよとかおほしめすうらめしふもとゝめお
き給物かなとかつうはうらみかつうはしたひ給へ　」四四オ

は三位の中将宣ひけるはまことに人は十三我は十五
よりみそめみえそめ奉つて火の中水のそこへも
ともにいりともにしつみかぎりあるわかれまでも
おくれさきたゝしとこそ申候しかともかく心
うきありさまにていくさのぢんへおもむきぬれは

くそくし奉て行衛もしらぬたひのそらにてうき目
を見せ奉らんもうたてかるへしそのうへ今度は
用意も候はすいつくのうらにもこゝろやすふ落つ
いたらはそれよりしてこそむかひに人をも奉らめ
とて思切てそたゝれける中門のらうに出てよろひ
取てき馬ひきよせてすでにのらんとしたまへは若
君びめきみはしり出父のよろひの袖くさすりに」　四四ウ

取付てこはされはいづちへとてわたらせ給ふそ我も
参らんわれもゆかんとめん〳〵にしたひなき給ふ
にうき世のきつなとおほえて三位の中将いとゝ
せんかたなげにぞみえられけるさる程に御おとゝ
新三位の中将資盛の卿左中将清経新少将有盛たん
ごの侍従たゞふさ備中の守もろもり兄弟五騎馬に
乗なから門の内へかけ入庭にひかへて行幸ははる
かにのびさせ給ひぬらんいかにや今までのちさん
とこゑ〳〵に申されけれは三位の中将馬に打乗て
出給ふかなを引返しゑんのきわへうちよせて弓
のはずにてみすをさつとかきあげあれ御らんぜ
よをの〳〵千万のかたきの中をこそわつてもと」　四五オ

をり候はめあのおさなき者共があまりにしたひ候
をとかうこしらへおかんと仕候ほどに存の外のち
さんと宣ひもあへずなかれければにわにひかへ
給ひたるきやうたいの人々もみなよろひの袖をそ
ぬらされける爰にさい藤五さい藤六とてあには
十九おとゝは十七になる侍あり三位の中将の御馬
の左右の水付にとりついていつくまでも御供仕
べきよし申せは三位の中将宣ひけるはおのれか
父さいとうへつたうさねもり北国へくだりし時
なんちがしきりに供せうといひしかとも存むね
が有そとてなんぢをとゝめおき北国へ下て終に
うち死したりけるはかゝるべかりける事をふるひ」四五ウ

ものてかねて存知したりけるにこそあの六代を
とゞめて行に心やすふふちすへき者もなきそたゞ

りをまげてとゝまれとのたまへは力及はすなみだ
をおさへてとゝまりぬ北の方年ころ日比これ程
なさけなかりつる人とこそかねては思はざりし
かとてふしまろびてそなかれける若君ひめ君女房
たちはみすの外まではしり出て人の聞をもはゞ
からずこゑをはかりにそおめきさけび給ひける
三位の中将心つよくもこしらへおきては出られ
けれ共さすが馬をすゝめもやり給はすたゞうしろ
へのみ引返す心ちしてひかへ〳〵そなかれける人
はいづれの日いつれの時かならず帰り来るへしと其　」四六オ

ごをさだめおくだにもさしあたつてはかなしきそ
かしいわんや此人々はけふをさいご今をかぎりの
わかれなれはさこそは名残おしかりけめおさなき
人々のなき給ひけるこゑ〴〵中将のみゝのそこに
とゝまつてさいかいのたびのそらまでもふく風立
波につけて聞様にこそ思はれけれ

せいしゆりんかう

平家みやこを落行時六波羅いけ殿小松殿西八条
以下一門の卿相うんかくの家々廿余ケ所次〳〵の
ともがらの宿所〳〵京白河四五万間のざい家一度に
火をかけてみなやきはらふあるひはせいしゆりん
かうの地なりほうけつむなしくいしすへを残し　」四六ウ

らんよたゞあとをとゞむあるひはこうひゆうゑん
のみきん也せうばうの嵐こゑかなしみゑきていの
つゆ色うれふさうきやうすいちやうのもといくわ
りんてうそのたちけいきよくのざゑんらんのすみ
かたひのけいゑいをむなしうしてへんしのくわい
しんと成はてぬいわんや郎従のほうひつにおゐて
をやいわんやさう人のおくしやにおゐてをやよ
ゑんのをよふ所ざい〳〵所々数十町也きやうご
たちまちにほろびてけいきよくさるへこそたいの露
じやう〳〵たりほうしんすでにおとろへてこらう
うせかんやうきうのけふりへいけいをかくしけん
もかくやとおほえてあはれなり日比はかんこくじ　」四七オ

こうのさがしきをかたくせしかともほくてきの為
にこれをやふられこう河けいいのふかきをたのん
しかともとういのためにこれをとられたりあに
はかりきやらい儀の都をせめ出されてなく〳〵むち
のさかいに身をよせんとは昨日は雲の上にして雨
をくだす神龍たりけふはいちくらのほとりにして
水をうしなふこぎよのごとしくわふく道を同しう
してじやうすいたなこゝろをかへす今目のまへに
ありたれか是をかなしまさらん保元のむかしは春
の花とさかへしが寿永の今は秋の紅葉と落はてぬ
去ぬる治承四年七月大はんのためにしやう
らくしたりける畠山のしやうじ重能おとゝ小山田」四七ウ

のへつたう有重宇都の宮の左衛門ともつなは子共
みな兵衛の佐にしたがひ付たりしによつて寿永
までめし籠られたりしが其時すでにきらるべかり
しを新中納言知盛の卿申されけるは御うんたにつ
きさせ給ひなば是等百人千人がくびをきらせ給ひ
たりとも世をとらせ給はん事かたかるべし古郷
にはさい子所従らいかになげきかなしみ候らん
もしふしぎにうんめいひらけて又みやこへ立帰ら
せ給はんときはありかたき御なさけでこそ候はん
ずれたゞりをまげて本国へ返しつかはさるべう
もや候らんと申されけれは大臣殿此儀しかるへし
とていとまたふこれらかうべを地につけなみだを」四八オ

ながいて申けるは去ぬる治承より今までかいなき
いのちをたすけられまいらせて候へはいつくまで
も御供に候て行幸の御行衛をみとゝけまいらせん
としきりに申けれとも大臣殿なんちらがたましゐ
はみな東国にそ有らんにぬけからはかり西国へ
めしくすべきやうなしいそぎくだれとのたまへは
是ら力及はすなみだをおさへてそ下ける是も二十
余年の主なれは別のなみたおさへかたし

忠教の都落

さつまのかみたゞのりはいつくよりか帰られけん

侍五騎わらは一人めしくして取てかへし五条の
三位しゆんせいのきやうの宿所におはして見給へ　」四八ウ
はもんこをとぢてひらかす忠教と名乗給へは落人
帰来りたりとて其内さはぎあへりさつまのかみ馬
よりおり身づからたからかにのたまひけるは別の
子細も候はす三位殿に申べき事あつてたゞのり
かへり参つて候門をはひらかれず共此きはまで立
よらせ給へとのたまへはしゆんぜいのきやうさる
事あり其人ならはくるしかるましいれ申せ
とて門をあけてたいめんなる事の体なにとなふ
あはれなりさつまのかみ宣ひけるは年来申承て
後はおろかならぬ御事におもひまいらせ候へとも
この二三年は京都のさわぎ国々のみたれしかし
ながらたう家の身のうへの事に候間そりやくを　」　四九オ
存せずといへともつねに参りよる事も候はす
きみすでに都を出させ給ひぬれば一門のうんめい
はやつき候ぬされば山野にかはねをさらさんより
外はごするかたも候はすせんじゆのあるべきよし
うけたまはりしかばしやうがいの面目に一首
なり共御おんをかうふらふとぞんじて候ひしに
やがて世のみたれ出来て其沙汰なく候条只一身の
なげきと存候世しつまり候ひなばちよくせんの御
さた候わんすらん是に候巻物の中にさりぬべき
歌候はゝ一しゆなりとも御おんをかうぶつてくさの
かげにてもうれしとぞんじ候はゝ遠き御まほりに
てこそ候はんずれとて日比よみおかれたる歌共の　」四九ウ
中にしうかとおほしきを百余首書あつめられたる
巻物を今はとてうつたゝれける時これをとてもた
れたりしかよろひの引合より取出てしゆんせいの
きやうに奉らる三位是をあけて見給てちよくせん
はぐしん承り候かゝるわすれ形見を給りおき候
ぬるうへはゆめ〳〵そりやくを存すまじう候御
うたかひあるべからず扨もたゞいまの御わたりこそ

なさけもすくれてふかうあはれもことにおもひしられてかんるいおさへがたふ候とのたまへばさつまのかみよろこふでいまはさいかいの波のそこにしづまはしつめ山野にかはねをさらさばさらせうき世におもひおく事候はすさらはいとま申　」　五〇オ

とて馬に打乗かぶとのおをしめ西をさいてそあゆませ給ふ三位うしろをはるかに見送りてたゝれたるにたゞのりのこゑとおほしくてせんど程遠くおもひをがんさんのゆふべの雲にはすとたからかにくちずさみ給へはしゆんぜいのきやういとゝ名残おしうおほえてなみだをおさへて入給ふ其後世しつまつてふんぢのころせんざいしうをそせんぜられけるたゞのりのありしさま云おきしことはいまさらおもひ出いてあはれなりけれはかの巻物の中にさりぬべき歌ともいくらもありけるあひだあまたいれたふ思はれけれともちよくかんの人なれば名字をもあらはさす古郷の花と云たいにて　」　五〇ウ

よまれたりけるうた一首そよみ人しらずとはいれられける

さゝなみやしがのみやこはあれにしを
むかしながらの山ざくらかな

其身てうてきとなりにしうへは子細に及はすと云なからうらめしかりし事共也

経政の都落

修理の大夫つね盛の子息皇后宮のすけ兼但馬の守つねまさはようせうの時より仁和寺の御むろの御所にとうぎやうにて候はれしかばかゝるそうけきの中にも其御なごりきつと思ひ出して侍五六騎めしぐしてにん和寺殿へはせ参り門前にて馬より　」　五一オ

おり人して申入られけるは一門のうんつきて今日すでに帝都をまかり出候うき世におもひ残す事とてはたゞ君の御なごりはかりなり十歳の時参はじめ候て十三でげんふくつかまつり候まではあひいたはる事の候はぬ外はあからさまにも御所

を立さる事も候はざりしにけふより後さいかい
千里の波路におもむいて又何れの日いづれの時
帰り参べしともおほえ候はぬこそくちおしう候へ
今一度御前へ参つて君をもみまいらせたふ候へとも
すてにかつちうをよろひきうせんをたいしあら
ぬさまなるよそほひにまかり成て候へははゞかり
存候とそ申されける御むろあはれにおほしめして　」五一ウ

たゞ其すがたをあらためすして参れとこそ仰けれ
経政其日はむらさき地のにしきのひたゝれにもよ
ぎにほひのよろひきて長ふくりんの太刀をはき廿
四さいたるきりうの矢おいしげどうの弓わきに
はさみかぶとをばぬいてたかひぼにかけ御前の御
つほにかしこまる御むろやがて御出あつてみす
高くあげさせこれへ〳〵とめされけれは大ゆかへ
こそまいられけれ供にくせられたる藤兵衛の尉有
教あか地のにしきのふくろに入たる御びはを持て
まいりたりつねまさこれをとりつゐで御前にさし
おき申されけるはせんねんくだしあつかり候し
せいざん持せて参つて候あまりに名残はおしう　」　五二オ

候へともさしもの名物を田舎のちりとなさん事くち
おしう候もしふしぎにうんめいひらけて又都へ立
かへる事候はゝ其時こそくだしあつかり候はめ
となく〳〵申されけれは御むろあはれに思食て
一首の御ゑいをあそはいてくだされけり

あかずして別るゝ君かなごりをは
後のかたみにつゝみてそおく

つねまさ御すゝり下されて

くれたけのかけひの水はかはれとも
なをすみあかぬ宮のうちかな

扨いとま申て出られけるにすはいのとうきやう
出世者ばうくはん侍僧に至るまでつねまさのたもと　」五二ウ

にすかり袖をひかへてなごりをおしみなみだを
なかさぬはなかりけり其中にも経政ようせうの時

にしておはせし大納言の法印きやうけいと申は
はむろの大納言くわうらいのきやうの子息なりあ
まりになごりをおしみてかつら河のはたまでうち
送り扨もあるべきならねばそれよりいとまこうて
なく〳〵わかれ給ふに法印かうそ思ひつゝけ給ふ

あはれなり老木わか木も山さくら
おくれさきたち花は残らし

つねまさの返事には

たひころも夜な〳〵袖をかたしきて
思へはわれはとをくゆきなん

」五三オ

扨まいて持せられたるあかはたさつとさしあけ
たれはあそこ爰にひかへて待たてまつる侍共あわ
やとてはせあつまり其せい百騎はかりむちをあけ
こまをはやめて程なく行幸におつつき奉る此つね
まさ十七の年宇佐のちよく使を承つてきうしうへ
下向せられけるに其時せいざんを給て宇佐へ参り
八幡大ほさつの御殿にむかひ奉りひきよくをひき
給ひしかばいつ聞なれたる事はなけれとも供
の宮人おしなへてりよくいのそでをそしほりける
聞しらぬやつこまでも村雨とはまかはしな目出た
かりし事ともなりかのせいさんと申御びはは
むかし仁明天皇の御宇かしやう三年三月に

」五三ウ

かもんのかみていびんとたうの時大たうのびわの
はかせれんせうふにあひ三きよくをつたへて帰朝
せしにけんじやうし、丸せいざん三めんのびわを
相伝してわたりけるが龍神やおしみ給ひけん波
風あらく立ければししまるをはかいていへしづめ
今二めんのびわをわたいて我朝の御門の御宝とす
むらかみのせいたいおうわのころほひ三五夜中の
新月しろくさへりやうふうさつ〳〵たりし夜なか
ばに帝せいりやうでんの月のゑんにしてげん
じやうをそあそばされける時にかげのごとく成物
御前に参してゆうにけたかきこゑにてしやうがを
めてたう仕る御門御ひわをさしおかせ給てそも〳〵

」五四オ

なんちはいかなるものがいつくより来るそと御
たづねあればこれはむかしていびんに三きよくを
つたへし大たうのびわのはかせれんせうふと申
もので候が三きよくの内ひきよくを一きよくのこ
せるつみに依てまたうにちんりん仕て候今御ひわ
のはち音たへに聞え侍るあひだ参入つかまつり候
ところなりねがはくは此きよくを君にさつけ奉り
ぶつくわほたいをせうすべきよし申て御前に
たてられたるせいさんをとりてんじゆをねちてひ
きよくを君にさつけ奉る三きよくの内しやうげん
せきしやう是なり扨かのけ人はかきけすやうにそ
うせにける其後はきみも臣もおそれさせ給ひて此

」五四ウ

御びわをあそはし引事もせさせ給はす御むろ
へまいらせられたりけるを経政のようせうの時御
さいあいのとうきやうたるによつてくだしあつ
かりたりけるとかやこうはしとうのこうはちめん
はひつじのかわゑには夏山の木間もりくる有明
の月をかゝれたるゆへにこそせいざんとは名付
られたれけんじやうにもおとらぬき代の重宝也

一門の都落

いけの大納言頼盛の卿もはたをあげいけ殿に火
かけて出られけるか鳥羽の南の門にひかへつゝ
わすれたる事ありとてあかしるしきりすてその
せい三百余騎みやこへとつてかゑされけり越中の

」五五オ

次郎兵衛盛次大臣殿の御前にはせ参つてあれ御
らん候へいけ殿の御とゝまり候によつておほくの
侍共のつきまいらせてまかりとゝまり候がきくわ
いにおほえ候大納言殿まではおそれ入て候へは侍
ともに矢一射かけ候はんと申ければ大臣殿
年来のぢうおんをわすれていまこのありさまを見
はてぬふたうじんをばさなくとも有なんとの給ふ
あひたちからをよばてとゞまりけりさて小松殿の
きんだちはいかにとの給へはいまだ御一所もみえ
させ給ひ候はすと申其時新中納言なみだをはら〳〵

と流いてみやこを出ていまだ一日たにも過さるに
いつしか人の心とものかわり行うたてさよまして」五五ウ
行末とてもさこそあらんずらめみやこのうちでい
かにもならんと申つる物をとて大臣殿の御方
をうらめしけにこそみ給ひけれいけとのとゝまり
給ふ事をいかにと云に鎌倉の兵衛の佐つねに頼
盛の卿になさけをかけて御方をはまつたくおろ
かにおもひまいらせ候はすたゞこいけ殿の渡らせ
給ふとこそぞんじ候へ八幡大ぼさつも御せうらん
候へと度々せいじやうをもつて申されけるうへ平
家ついたうのためにうつ手の使ののぼる度ことに
相かまへていけ殿のさふらひ共にむかつて弓ひく
ななんどなさけをかけられけれは一もんの平家は
うんつきてすでに都を落ぬ今はよりもり兵衛の佐」五六オ
にたすけられんするにこそと宣ひてみやこへ帰ら
れけるとぞ聞えし八条の女院の仁和寺のときは殿
にわたらせ給ふに参り籠られけり女院の御めのと
知明院の宰相殿と申女房にあいぐし給へるに
よつてなりしぜんの事候はゝよりもりかまへてた
すけさせ給へと申されけれともねうゐん今は世の
世にてもあらはこそとたのもしけもなふそおほせ
けるをよそは兵衛の佐殿はかりこそはうしんは存
せらるるともじよの源氏ともいかゞあらんすらんな
ましいに一門にははなれ給ひぬなみにもいそにも
つかぬ心ちそせられけるさる程に小松殿のきん
だち三位の中将惟盛の卿をはじめて兄弟六人その」五六ウ
せい千騎ばかり作道に打て出こまをはやめてよど
のむつ田河原にて行幸におつ付奉る大臣殿待うけ
うれしけにていかにや今までのちさんとのたまへ
は三位の中将おさなき者共があまりにしたひて候
をとかふこしらへおかんと仕候ほどに存の外に
ちさん仕候こそ申されける大臣殿なとやこゝろ
つよふ六代殿をばくし奉り給はぬそとのたまへは

三位の中将ゆくすへとてもたのもしうも候はすと
てとふにつらさのなみだをこそ流されけれ落行平
家はたれ〳〵ぞ前の内大臣宗盛公平大納言時忠平
中納言教盛新中納言知盛修理の大夫経盛右衛門の
督清宗本三位の中将重衡小松の三位の中将惟盛新　」五七オ

三位の中将資盛越前の三位通盛殿上人にはくら
のかみのぶもと讃岐の中将ときさね左中将きよ
つね同き少将有盛たんごの侍従たゞふさ皇后宮の
すけつねまさ左馬の頭行もりさつまの守たゞのり
能登の守のりつね武蔵の守知明備中の守もろもり
あわ路の守きよふさ尾張の守きよさだわかさの守
つねとし蔵人の大夫なりもり大夫あつもり僧には
二位の僧都せんしん法勝寺のしゆぎやうのうゑん
中納言のりつしちうくわいけうじゆぼうのあじや
りゆうゑん侍にはげんだゆうの判官すゑさだつの
判官もりすみきちないさゑもんすゑやす藤内兵衛
すへくにをさきとしてじゆりやう検非違使ゑふ　」五七ウ

しよし以上一門百六十三人むねとの侍三百余人
都合そのせい七千余騎これらは此二三ケ年が間
東国北国度々のいくさにうちもらされてわづかに
残る所なり山さきせきどの院に玉の御こしをかき
すへておとこ山をふしおがみ平大納言とき忠の卿
南無帰命ちやうらい八幡たいぼさつきみをはじめ
まいらせて我等をいま一度みやこへ返し入させ
給へといのられけるこそあはれなれをの〳〵うし
ろを見給へはかすめるそらの心ちしてけふりのみ
心ほそくたちのぼり平中納言教盛の卿

はかなしなぬしは雲ゐに別るれは
やどはけふりとたちのぼるかな　」五八オ

修理の大夫経盛

ふるさとをやけ野の原とかへりみて
末もけふりのなみぢをそ行

まことにこきやうをは一へんのゑんぢんにへたて
つゝせんと万里の雲路におもむきけん人々の心の

中おしはかられてかなしかりけり肥後の守さだよしはかわしりに源氏待と聞てけちらかさんとて五百余騎ではつかうしたりけるかひがことなれは帰りのほる程にうどの、へんにて行幸に参りあひさだよし馬より飛おり弓をわきにはさみ大臣殿御前にかしこまつて申けるはこはそもいつちへとておちさせ給ひ候やらん西国へくだらせ給ひたらば

」五八ウ

落人とてあそこ爰にて打ちらされうき名を流させ給はん事こそくちおしう候へたゞみやこのうちにていかにもならせ給はでと申ければ大臣殿さだよしはしらぬか木曾すでに北国より五万余騎でせめのぼりひゑい山東坂本にみち〳〵たんなり此夜はんばかりより法皇も渡らせ給はすをの〳〵が身はかりならばいかゞせん女院二位殿にまのあたりうき目を見せまいらせんもこゝろくるしければ行幸をなしまいらせ人々をも引ぐし奉て一まともと思ふそかしとのたまふさ候はゝさだよしはいとまを給はつて都の内にていかにもなり候はんとてめしくしたる五百余騎のせいをは小松殿のきん

」五九オ

だちに付奉り手せい三十騎はかりにてみやこへ引かへす京中に残りとゞまる平家のよたうをうたんとてさだよしが帰り入よし聞えしかばいけの大納言何条それは頼盛が身のうへてそ候らんとて大きにおそれさはかれけりさたよしは西八条のやけあとに大まくひかせ一夜しゆくしたりけれともかへり入給ふ平家のきんだち一人もおはせねばさすが心ほそふやおもひけん源氏のこまのひつめにかけじとて小松敷の御はかほらせ御こつにむかひ奉てなく〳〵申けるはあな浅まし御一門の御はて御らん候へ生有ものはかならずめつすたのしみつきてかなしみ来るといにしへより書おいたる事

」五九ウ

にて候へともまのあたりかゝるうき事は候はす君は加様の事をさとらせ給ひてかねてより仏神

三宝に御きせいあつて御世をはやうせさせまし
〳〵けるにこそ有がたふこそおほえ候へ其時さた
よしもさいごの御供仕るべう候つる物をかいなき
命いきて今かゝるうき目にあひ候死ごの時はかならず
一仏じやうどへむかへさせ給へとなく〳〵はるかに
かきくとき御こつをば高野山へ送あたりの土をは
賀茂河へ流させ世の有さまたのもしからすや思ひ
けん主とうしろあはせになつてとうこくへこそ
落行けれうつのみやの左衛門ともつなは去ぬる
治承のころよりめしこめられて都に候つるがさだ」六〇オ

よし申あつかつてなのめならすなさけありけれは
宇都の宮其おんを忘しとやさだよしを相くして東
国へくだりつゝはうしんしけるとそ聞えし

福原落

さる程に平家は小松の三位の中将惟盛の卿の外
大臣殿以下みなさい子を引くして下られけれとも
次様の人ともはさのみ引しろふに及ずこうくわい
そのごをしらさればうちすてゝそ落行けるいつ
帰りいつあふべしとも思へねばゆくもとゝまるも
名残をおしみてたがひに袖をぞぬらしけるさう
でんふたいのよしみとしころ日比のぢうおんいか
でかわするべきなれは老たるも若もたゞ後をのみ」六〇ウ

帰りみて前へはすゝみもやらさりけり遠きをわけ
けはしきをしのきて西のうみ八重のしほ路に日を
暮いそへのゆかの波の露入江の舟のかいのしづく
落るなみだに打そひてたもともさらにほしあへず
天も明ぬあるひはこまにむち打人もありあるひは
舟にさをさす者もあり思々心々にそ落行ける福原
の旧里につゐて大臣殿然るべき侍共老少数百人め
して宣ひけるはたう家はしやくぜんのよけい家に
つきせきあくのよわう身に及ぶかゆへに神明にも
はなされ奉り君にもすてられまいらせて帝都を出
りよはくにたゞよふ上は何のたのみか有べきなれ
共一じゆのかげにやどるもせんぜの契り浅からず」六一オ

いわんや一河の流をむすぶも他生のゑんなをふかしいかになんちら一たんしたがひつく門かくにあらするいそ相伝の家人なりあるひは近親のよしみたにことなるも有あるひは重代ほうおんのふかきも有家門はんじやうのいにしへはおんはに依てわたくしをかへりみき今なんそはうおんをほうぜざらんやかつうは十ぜんてい王三じゆのじんぎをたいして渡らせ給へはいかならん野の末山の奥までも行幸の御供仕らんとはおもはすやとのたまへは老少みななみだをながいて申けるははやしの鳥けだものもおんをほうしとくをむくう心は候なりいわんやじんりんの身としていかてか其ことはりを」六一ウ

存し仕らで候べき此廿余年の間さい子をはこくみ諸従をかへりみ候事しかしなから君の御おんにあらずと云事なし就中きうせん馬上にたつさはるならひふた心有をもつてはちとす然はすなはち日本の外しんらはくさいかうらいけいたん雲のはてうみのはてまでも行幸の御供仕ていかにも成候はんといく同音に申けれは人々みなたのもしけにぞみえられける福原の旧里にて一夜をこそあかされけれ折節秋の始の月は下の弓はり也しんかうくう夜しづかにしてたひねのとこの草まくら露もなみだもあらそひてたゞ物のみそかなしきいつ帰るべき道共おほえねは故入道相国の作おき給ひし所々をみ」六二オ

給ふに春は花見のおかの御所いづみ殿松かげ藤秋は月見のはまの御所馬場殿二かいのさしき殿ゆきみの御所かやの御所人々のたち〳〵五条の大納言くにつなの卿の承てざうしんせられし里内裏おしのかわら玉のいしたゝみ何れも〳〵三とせが程にあれはてゝきうたい道をふさきあきのくさ門をとぢかわらに松生かきにつたしげりたいかたふいてこけむせり松風のみやかよふらんすたれたえねやあらは也月かげのみそさし入ける明ぬれは福原の内裏に火を懸て主上をはじめ奉て人々みな御舟に

めす都を立し程こそなけれ共是も名残はおしかり
けり皇后宮のすけ経政かうぞ思ひつゝけられたり　」六二ウ

御幸するすゑもみやことおもへとも
なをなくさまぬなみのうへかな

あまのたくもの夕けふり尾上のしかのあかつきの
こゑなきさ〳〵による波の音袖にやどかる夜は
の月千草にすたくしつ〳〵のきり〴〵すすへて目
にみえみゝにふるゝ事一としてあはれをもよほし
心をいたましめすと云事なし昨日はとうくはんのふ
もとにくつばみをならべて十万余騎けふはさいか
いのなみにともつなをといて七千余人うら〳〵島
島過行はうんかいちん〳〵としてせいでんすでに
暮なんとすこたうにせきぶへだてゝ月かいしやう
にしかめりきよくほのなみをわけしほにひかれて　」六三オ

行舟ははんでんの雲にさかのぼり日数ふれは都
はすてに山川の程をへだてて雲ゐの余所にぞ成に
けるはる〳〵きぬと思ふにもたゞつきせぬものは
なみだなりなみのうへに白きとりのむれゐるを
みてはかれならんありはらのなにがしのすみた河
にて事こひけん名もむつまじき都鳥かなとあはれ
なり寿永二年七月廿五日に平家都を落はてぬ

平家物語巻第七終　」六三ウ

（遊紙）　」六四オ

（遊紙）　」六四ウ

（遊紙）　」一オ

（遊紙）　」一ウ

平家物語巻第八目録

山門御幸
名とら　あいおだまき
だざいふ落
せいゐ将軍のゐんぜん
ねこま
みづしまがつせん
せのおがさいこ
むろ山合戦
法住寺かつせん
かるの大臣

」二オ

（遊紙）　」二ウ

平家物語巻第八

山門御幸

じゆゑい二年七月廿四日の夜はんばかりに
法皇はあせちの大納言すけかたの卿の子息むまの
かみすけときはかりを御供にてひそかに御所を
出させ給ひてくらまへ御幸なる寺僧共是はなを都
ちかくてあしう候なんすと申ければさらはとて
さゝのみねやくわう坂なと申さかしきけんなん
をしのがせ給ひて山門へいらせおしますよ川の
けだつだにじやくぢやうばう御所になる大衆おこ
つてとうだうへこそ御かうはなるべけれと申けれ
ばとうだうの南だにゑんゆうばう御所に成かかり　」三オ

しかはしゆとも武士もゑんゆうばうを守護し
奉る摂政殿はみやこにわたらせ給へ共しのはせ

給ひけれは人しらすして吉野のおくへいらせ給ひ
ぬとそ申あひけるされば法皇はせんとうを出て
てんだいさんに主上はほつけつをさけてさいかい
へせつしやうとのはよしの、おくとかや女院みや
〳〵は八幡賀茂さがうつまさ西山ひがし山のかた
ほとりにつゐてにげかくれさせ給へり平家はおち
ぬれと源氏はいまだいりかはらずすでに此京は主
なき里とそなりにけるかいひやくよりこのかた
か、る事あるへし共おほえずしやうとく太子の
みらいきにもけふの事こそゆかしけれさる程に」

三ウ

法皇てんだいさんに渡らせ給ふと聞えしかははせ
まいらせ給ふ人々其比の入道殿とは前のくはんはく
松殿たう殿とは近衛殿太政大臣左右の大臣内大臣
大納言中納言宰相三位四位五位の殿上人すべて世
に人どかそへられくはんかかひにのそみをかけ
しよたいしよしよくをたいする程の人の一にんも
もる、はなかりけりゑんゆうばうにはあまりに
人おほくまいりつどひたうしやうたうか門外門内
ひまはさまもなふそみち〳〵たる山門はんじやう
もんせきの面目とこそみえたりけれやがておなじ
き廿八日法皇都へくはんぎよなる木曾五万余騎て
守護し奉る近江源氏山本のくはんしやよしたか」

四オ

しらはたさいてせんぢんにぐぶす此廿余年みえ
ざりつるしらはたのけふ始てみやこへいるめつらし
かりし事共なりさる程に十郎蔵人行家数千騎
て宇治はしをわたひて都へいるみちのくのしん
判官よしやすが子矢田の判官代よしきよす千騎で
大江山をへて上洛すつの国河内の源氏等同心して
おなじうみやこへみたれ入るされば京中にげんじ
のせいみち〳〵たりかでの小路の中納言つねふさ
の卿検非違使のべつたう左衛門のかみさねいゑ院
の殿上のすのこに候ひてよしなか行家をめす木曾
はあかぢのにしきのひた、れにからあやおとしの
よろひきていか物作りの太刀をはき廿四さいたる」

四ウ

いしうちの矢おいしげどうのゆみわきにはさみ
かぶとをばぬいて高ひぼにかけひさまづいてそ候
ける十郎蔵人行家はこんぢのにしきのひたゝれに
ひおとしのよろひきて金作の太方をはき廿四さい
たるくろほろの矢おいぬりごめとうの弓わきに
はさみ是も甲をはぬいて高ひほにかけ畏てそ候ひ
ける前の内大臣宗盛以下平家の一そくついたうの
ために西国へはつかうすべきよしおほせくださる
をの〳〵かしこまり承つてまかりいつ次をもつて
宿所もなきよしそうもんしたりければ木曾は大
ぜんの大夫成忠がしゆくしよ六条にしのとうゐん
を給はる十郎蔵人には法住寺殿の南殿と申かやの」五オ

御所をそくだされけける主上のくわいせきの平家に
とらはれさせ給ひてさいかいのなみの上にたゞよ
はせ給ふ御事を法皇なのめならす御なげきあつて
主上幷に三しゆのじんぎ事ゆへなふ都へ返し入
奉れと西国へ度々ゐんぜんをつかはされたりけれ

共平家これをもちひ奉らず高倉の院の王子はしゆ
しやうの外三所おはしき中にも二のみやをばまう
けのきみにし奉らんとて平家取奉つてさいこくへ
おちくだりぬ三四は都にまし〳〵けり八月五日
法皇此宮たちをむかへよせまいらせ給ひてまつ三
のみやの五歳にならせおはしましけるを法皇あれ
はいかにこれへと仰けれは法皇を見まいらせ給て」五ウ

大きにむつからせ給ふ間とふ〳〵とて御めのと
して出しまいらせ給ひけり其後四の宮の四歳に
ならせおはしましけるを法皇あれはいかにこれへ
とおほせけれはやがて法皇の御ひさのうへにまい
らせ給てなのめならす世にもなつかしげにてそ
おはしましける法皇御なみたをはら〳〵となかさせ
給ひてけにもすゝろならんものゝ此老法師を見て
いかてかこれほどまではなつかしけに思ふへき是
そまことのわか御まごにておはしましける故院の
おさなおひにすこしもたかはせ給はぬものかな

是程のわすれ形見を今まで御らんせぬ事よとて
御なみたせきあへさせ給はすじやうど寺の二位殿」六オ

其時はいまだたんご殿とて御前にさふらはせ給
けるが扨も御位は此宮にてこそわたらせ給ひさふら
はめなふと申させ給へは法皇子細にやとそ仰ける
内々御うらの有しにも四の宮位につかせ給ひては
百わうまでも日本国の御主たるべしとぞかんかへ
申ける御母儀は七条のしゆりの大夫のふたかの卿
の御むすめなり中宮の御かたにみやつかひ給へし
を主上つねはめされける程に王子あまた出来させ
給ひけり此のふたかのきやうは御むすめあまた
おはしましければいつれにても女御きさきにも
たてまいらせばやと思はれけるが人のいゑにしろ
いにわとりを千かふつれは其家にきさきかならす」六ウ

出来ぬると云事あれはとてにわとりのしろいを千
そろへてかはれたりけるゆへにや此御むすめうち
つゝき王子あまたうみまいらせ給けりのぶたかの
きやうも内々うれしうは思はれけれとも平家にも
はゝかり中宮にもおそれまいらせてもてなし
奉る事もなかりしを入道相国の北の方八条の
二位殿よし〳〵くるしかるまし我そたてまいらせ
てまうけの君にし奉らんとて御めのとあまたつけ
まいらせてそたてまいらせ給けり中にも四の宮
は二位殿の御せうと法勝寺のしゆぎやうのうゑん
法印のやうくんにてそまし〳〵ける法印平家に
ぐせられて西国へ落下られける時北のかたをも宮」七オ

をも京都にすておき申されたりけるか西国より人
を上せ女房みやぐしまいらせていそぎ下給ふべき
よし申されたりけれは北のかたなのめならすに
よろこびみやいざなひ参らせてにしの七条なる所
まで出られたりけるを女房のせうときのかみのり
みつ是は物のついてくるひ給ふか只今此みやの御
うんはひらかせたまはんするものとて取とゞめ奉

たりける次の日そ法皇より御むかひの御くるまは
参りたりける何事もしかるべき事とは申ながら
きのかみのりみつは四のみやの御ためにはさしも
奉公の人とそみえたりけるされともちうをも思食
よらさりけるにやむなしく年月を若りけるか」七ウ

もしやと二しゆのうたをよふできんちうに落書
をそしたりける

一こゑはおもひ出てなけほとゝきす
おいそのもりのよはのむかしを

籠のうちもなをうらやまし山からの
身のほどかくすゆふかほのやと

主上是をきこしめして是程の事を今まで思食よら
ざりけるこそ返〳〵もおろかなれとてやがててう
おんかうむり正三位にじよせられけるとそ聞えし

名とら

同き八月十日木曾は左馬のかみに成て越後の国を
たまはるそのうへ朝日の将軍と云ゐんせんをくた」八オ

さる十郎蔵人は備後の守になる木曾越後をきらへ
ば伊与をたふ十郎蔵人びんごをきらへばびぜんを
たふ其外源氏の十余人じゆりやう検非違使ゆきゑの
ぜう兵衛の尉にそなされける同き十六日前の内
大臣宗盛公以下平家の一ぞく百六十三人かくわん
しよくをとゝめて殿上の御ふたをけつらるゝ中に
平大納言時忠の卿子息くらのかみ信もと讃岐中将
ときさね是三人はけつられす其故は主上ならびに
三しゆのじんぎ事ゆへなふ都へ返し入奉るべき
よしのゐんぜんをとき忠の卿のもとへつかはされ
たりけるによつてなり同き十七日平家は筑前の国
みかさのこほりださいふにこそつき給へきくちの」八ウ

次郎高直はみやこより平家の御供に候けるか大津
山のせきひらひてまいらせんとて肥後の国に打
越をのれか城に引籠てめせども〳〵参らず其外
きうしうに二たうの者共みな参べきよし御りやう
じやうをは申ながらいまだ一人もまいらすたう

じはいわとの諸卿大くらのたねなうはかりそ候ひ
ける平家の人々はつれ〳〵のあまりにあんらく寺
に参つてよもすから歌よみれんがして宮つかへ
ありしに中にも本三位の中将しげひらの卿
　すみなれしふるき都のこひしさを
　　神もむかしにおもひしるらん
とよまれたりければ人々まことにあはれにおほえ」九オ

てみな袖をそぬらされける八月廿日みやこには
法皇のせんみやうにて四の宮かんゐんどのにして
位につかせ給ふしんし宝剣内侍所たいしまし
まさてせんそのれい是はじめとそ承る摂政はもと
のせつしやう近衛殿かはらせたまはすとうや蔵人
なしおきて人々みなたいしゆつせられけり三の宮
の御めのとなきかなしみこうくわいすれともかい
ぞなき帝王御位につかせ給ふ御事は天照太神の
御はからひにてあんなれはぼんぶのとかう申に及
はす天に二の日なし国にふたりのわうなしとは

申せとも平家のあくぎやうに依てこそ京田舎に二
人の御門はまし〳〵けれむかしもんどくてんわう」九ウ

は天安二年八月廿三日にかくれさせ給ひぬ御子
のみやたちあまたおはしけれは御位にのそみを
かけ内々御いのりともありけり一の御子これたか
の親王をば木原の王子とも申きわうしやのさい
りやうを御心にかけ四かいのあんきをたなこゝろ
のうちにてらし百わうのりらんは御心にかけ
給へりさればけんせいの名をもとらせおはしぬべ
き君なりとみえ給へり二の宮これひとのしんわう
は其比のしつへい忠仁公の御むすめそめ殿の后の
御はらなり一門の公卿れつしてもてなし奉り
給ひしかは是も又さしおきかたき御事也かれは
しうふんけいていのきりやう有是はばんきふさの」一〇オ

しんさうありかれもこれもいたはしくていつれも
おほしめしわつらはれき一の御子これたかの親王家

の御いのりにはかきのもとのきそう正しんせい
とて東寺の一の長者こうほうだいしの御弟子なり
二のみやこれひとのしんわう家の御いのりには
くわいそちうじん公の御持僧ひゑい山のゑりやう
くわしやうそ承られけるいつれもおとらぬ高僧た
ちなれはとみに事行かたふやあらんすらんとぞ
人々さゝやきあはれけるあんのごとく帝かくれさ
せ給しかばくきやうせんぎありそも〳〵しんらが
おもんはかりをもつてゑらんで位につき奉らん
事はようしやわたくし有にゝたり万人くちひる」　一〇ウ

をかへすべししらすけいばすまうのせつをとけ其
うんをしりしゆうによつてほうそをさつけ奉る
へしときでうおわんぬさる程に同き九月二日二
人のみやたち右近の馬場へぎやうげいありけり爰
にわうこうけいしやう玉のくつばみをならへ花の
たもとをよそほひ雲のごとくかさなりほしのことく
につらなり給しかは是きたいのせうじ天下の

さかんなるみもの日比こゝろをよせ奉るけつけい
うんかく両方に引わかれて手をにきり心をくたき
給へり御いのりの高僧たちもいづれかおろそかあ
らんやしんせい僧正は東寺にだんをたてゑりやう
くわしやうは大内のしんこんゐんにだんを立て」　一一オ

おこなはれけるかゑりやうくわしやうはうせたり
と云ひろうをなさばしんせいそうじやう少たゆむ
心やおはしけんとてゑりやうはうせたりといふひ
ろうをなしてかんたんをくたいていのられけり
すでに十ばんのけいばはしまるはじめ四はんは一
の御子これたかの親王家かたせ給ふ後六はんは二
のみやこれひとのしんわう家かたせ給ふやがてす
まうのせつあるべしとて一御子これたかしんわう
家よりは名とらの右兵衛のかみとてをよそ六十人
がちからあらはしたるゆゝしき人を出されたり二
の宮これひとしんわう家よりはよしをの少将とて
せいちいさくたえにしてかた手にもあふべきとも」一一ウ

みえぬ人御むさうの御つけ有とて申うけてそ出
られけるさる程に名とらよしをより合ひし〳〵
とつまとりしてのきにけりしばしあつて名とら
つつとよりよしをを取てさゝけ二ぢやうばかりそ
なげたりけるされどもよしをたゞなをつてたをれ
ずよしを又つつとよりゑい〳〵こゑをいだしてな
とらをとつてふせんとすなとらもともにこゑを
あげてよしををとつてふせんとすたかひにおとら
ぬ大力されともなとらは大のおとこかさにまはる
よしをあふなふみえけれは二のみやこれひとの
親王家の御母儀そめ殿のきさきより御いのりのし
のかたへ御使くしのはのごとくはしりかさなつて」一二オ

御方すてにまけいろに見ゆいかゝせんとおほせけ
れはゑりやうくわしやうは大いとくのほうをしゆ
せられかるがこはこゝろうき事なりととつこを
もつてかしらをつきやふりなつきをくたいてちを
出しけしにませごまにたき黒けふりを立て一もみ
もまれたりけれはよしをすまうにかちにけり二の
宮位につかせ給ふ御年九歳にならせおはします
清和の帝是なり後には水の尾の天皇とも申きそれ
よりしてそ山門にはいさゝかの事にもゑりやうな
つきをくたけばじてい位につきそんいちけんを
ふりしかばかんじやうなうじゆうし給ふとも云
つたへたり一の宮これたかの親王は御年十一さい」一二ウ

にてうき世をいとはせ給ひてひゑいさんの西のふ
もと小野といふ所にすませおはします小野の山里
をのづからといくる人もなかりしにゆきひらの
中納言まじろのたかを手にすゑてゆきふみわけ
てそまいられける

あひ

平家はつくしにて此由を伝聞てやすからぬ事かな
三の宮をも四の宮をもぐし奉て落下るべかりつる
物をと申あはれけれは平大納言時忠の卿さらん
には高倉のみやの御子のみやを御めのと讃岐の守

しげひでか御出家せさせ奉りくし奉て北国へおち
くだりしを木曾義仲しやうらくの時主にしまい」
らせんとてげんぞくせさせ奉りくし奉て都へ上り
たるをそ位にはつけたてまつらんすらんとそ宣ひ
ける人々いかてげんそくのみやをは位につけ奉る
べきと申されけれは時忠の卿さもさうすげんそく
国王のためしいこくにもそのれいもやあるらん我
朝にはまづ天武天皇いまだとうくうの御時大とも
の皇子におそはれさせ給ひてびんはつをそり吉
野のおくへにけこもらせ給ひたりけるが大ともの
皇子をほろほして終に位につき給ひき又かうけん
天皇と申せしも大ぼたいしんをおこし御かさりを
おろして御名をほうきにと申しかとも二度位に
つかせ給ひてせうとくてんわうと申しそかし」
まして木曾が主にしまいらせたるげんぞくのみや
なれは子細あらじとそのたまひける同き九月

一三オ

三日伊勢へ公卿のちよく使を立らるちよくしは
さんぎながのりとぞ聞えし大上天皇伊勢へ公卿の
ちよく使をたてらる事はしゆしやく白河鳥羽三
代のせうせきありといへとも是みな御出家以前也
御出家以後のれい是はじめとそ承る

おだまき

さる程に平家はつくしに都をさだめて内裏つく
らるへしと公卿せんぎありしかとも未みやこも
さだまらず主上はいわとのしよきやう大くらたね
なうが宿所にそおはしましける人々の家々には野中」一四オ

一三ウ

田中成けれはあさの衣はうゝね共とうちの里共
いつつべし内裏は山の中なれは彼木の丸殿もかく
やありけんと中々ゆうなる方も有けりやがて宇
佐の宮へ行幸なる大ぐうじきんみちがしゆく
所くわうきよになるしやとうはけつけいうんかく
のきよしよになるくわいらうには五位六位のくはん
人庭上には四国ちんせいのつはもの共かつちうきう

せんをたいしてうんかのごとくになみゐたりふり
にしあけのたまかきふたゝびかさるとそみえしかく
て七日参籠のあかつき大臣殿の御ためにむさうの
つけぞありける御宝殿の御とおしひらきゆゝしう
けたかけなる御こゑにて
世の中のうさには神もなきものを
何いのるらんこゝろつくしに
」一四ウ
大臣殿打おどろきむねうちさわぎあさましさに
さりともとおもふこゝろもむしの音も
よはりはてぬるあきのくれかな
と云古歌を心ぼそけにそくちずさみ給ひけるさて
ださいふへくわんかうなるさる程に九月も十日
あまりになりぬおぎのはむけの夕嵐ひとりまるね
のとこの上かたしく袖もしほれつゝふけ行秋の
あはれさはいつくもとは云ながらたびのそらこそ
忍びがたけれ九月十三夜は名をえたる月なれ共
其夜は都をおもひ出るなみたにや我からくもりて
」一五オ
さやかならす九重の雲のうへ久方の月に思を
のべしゆふべもいまのやうにおほえてさつまの
かみたゞのり
月をみし去年のこよひのともの宮
みやこに我をおもひ出らん
しゆりの大夫つねもり
こひしとよ去年のこよひの夜もすから
ちぎりし人のおもひ出られて
皇后宮のすけつねまさ
わけてこし野辺の露ともきえすして
おもはぬ里の月をみるかな
ふんごの国は刑部卿三位よりすけの卿の国成けり
」一五ウ
子息よりつなの朝臣をたいくはんにおかれたり
刑部卿三位京よりよりつなの本へ使者を立て平家
はすてに神明にもはなたれ奉り君にもすてられ参
らせて帝都を出なみの上にたゝよふ落人となれり
然をきうしうの者共がうけ取てもてあつかふらん

こそ然るべからねたう国におゐてはしたかふべ
からす一み同心して九国のうちをおい出し奉れ
やとのたまひつかはされたりけれはこれをたう国
の住人尾方の三郎これよしに下知すかのこれよし
はおそろしき者の末にてそありけるたとへばふん
ごの国のかた山里にむかし女ありきある人のひと
りむすめいまだおつともなかりけるもとへおとこ
」一六オ

よな〳〵かよふほどに年月もかさなれは身も
只ならすなりぬ母是をあやしめてなんちかもとへ
かよふ者はいかなるものそと、ひけれはくるをは
見送ともかへるをはしらずとそ云けるさらはおと
この朝帰せん時ゆかんかたをつなひてしるしを付
て見よとそをしへけるむすめは、のをしへにした
かつてあさかへりするおとこのきたりける水色の
かりきぬのくひかみにはりをさししづのおだまき
といふ物をつけてへて引かたをつなひで見るに
ふんごの国にとつてもひうがのさかいうばたけと
いふたけのすそ大きなる岩やのうちへそつなき入
たりおんないわやのくちにたゝすんでき、けれは
」一六ウ

大きなるこゑしてにゑひけり女御すがたを見まい
らせんとてわらはこそ是までたつね参てさふらへ
といひけれは我はこれ人のすかたにあらずなんぢ
我すがたを見てはきもたましゐも身にそふましき
そたゞとふかへれ我は今夜きすをかうむつてめい
すてに終るべき也なんぢかはらめるところの子は
なん子にて有べし弓矢打物とつてはきうしう二島
に肩をならふる者も有ましきそよくそたてよとそ
をしへけるおんなかさねてたとひいかなるすがた
にてもあらばあれ日比のよしみいかてか忘るべき
なれはたゞげんざんせんといひけれはさらはとて
岩屋のうちよりふしたけは五六しやくはかりそあ
」一七オ

とまくらへは十四五ぢやうもあるらんとおほゆる大
じやのどうようしてそはい出たりおんなきもた

ましゐも身にそはすめしぐしたる十余人の所従等
おめきさけんでにげさりぬかりきぬのくひかみに
さすとおもひしはりはすなはち大しやの丶どふゑ
にぞ立たりけるくだんの大じやはひうかの国に
いわはれ給ふ高知尾の明神の神体なりおんな帰て
ほどなくさんをしたりけれはまことになん子にてぞ
ありける母方のそぶそだて丶みんとてそたてける
がいまだ十歳にもみたさるにちから人にすくれて
せい大きふかほながかりけり七さいにてげんぶく
せさせは丶かたのそぶをたい大夫といふあひだ是　」一七ウ

をは名を大太とこそ付たりけれ夏もふゆも手あし
にあかがりひまなくわれけれはあかかり大太とぞ
人申ける彼これよしはあか丶り大太には五代の
そん也か丶るおそろしき者のすへにてありけれは
こくしのおほせをゐんせんとかうしてきうしう二
島にくわいふんをしけるあひだしかるべきもの
共はこれよしにみなしたがひつく

ださいふおち

さる程に平家はつくしに都をさだめ内裏つくらる
へしと公卿せんきありしかとも尾方の三郎これ
よしかむほんと聞て大きにおそれさはかれけり
新中納言とものりの卿のいけんに申されけるは　」一八オ

かのこれよしは小松殿の御家人なりいつれにても
きんだち御一所むかはせたまひてともかうもこし
らへて御らんせらるべうや候らんと申されけれは
此儀もつとも然へしとて小松殿の次なん新三位
の中将すけもり其せい五百余騎ふんごの国に打越
やう〳〵になためのたまへともこれよししたかひ
奉らずあまつさへきんだちをも只今これにて取籠
まいらすへう候へとも大事の中の小事なしと申
事あればとりこめまいらせす何ほどの事か候
べきたゞとふ〳〵ださいふへ帰らせ給て御一所
にていかにもならせ給へとておつ帰し奉る其後
これよしが次なん野しりの次郎これむらを使者

一八ウ

にて太さいふへ申けるは平家は重おんの君にて
おはしまし候へはかぶとをぬき弓のつるをはつい
てかう人に参へく候へとも一院のおほせにはすみ
やかに九国のうちをおい出したてまつれと候と申
送たりけれは平大納言時忠の卿ひほくくりのひた
たれにいとくずのはかま立ゑぼしてこれむらに
出むかつてのたまひけるはそれ我君はてんそん四
十九世のしやうとう神武天皇よりこのかた人王
八十一代にあたらせ給ふ然は天照太神正八幡宮も
わかきみをこそまほりまいらつさせ給らめ就中
故太政の大臣入道殿保元平治両度のけきらんを
しつめてきうしうのものともをはみな内様へこそ」一九オ

めされしかしかるにそのおんを忘て東国北国の
けうとら頼朝義仲らにかたらはれてしおうせたら
ば国をあつけんしやうをたはんと云をまことそと
こゝろへてそのはなふんごめが下知にしたがはん事
然るべからすとそ宣ひけるふんごのこくし刑部卿
三位よりすけのきやうはきはめてはなの大きに
おはしければ時忠の卿加様には宣ひける也これ
むらかへつて父に此由いひけれはこはいかに
むかしはむかし今はいま其儀ならはすみやかに九
国のうちをおい出したてまつれとてせいそろふる
と聞えしかば源大夫の判官すゑさだつの判官もり
すみきやうこうはうはいの為きくわいにおほえ候」一九ウ

よせてめしとり候はんとて其せい三千余騎にて筑
後の国高野のほんじやうにはつかうして一日一夜
せめたゝかふされともこれよしか方のせいうんか
のごとくにつゝきけれはちからをよはすしてひき
しりぞく平家は尾方の三郎これよしが三万余騎の
せいにてすでによすと聞えしかば取物も取あへす
太さいふをこそ落給へさしもたのもしかりつる
てんまん天神のえしめのあたりをこゝろほそくも
たちはなれかよちやうもなけれはさうくわほう
れんはたゞ名をのみ聞て主上ようよにめされけり

国母をはじめまいらせてやむ事なき女房たちは
はかまのそはを高くとり大臣殿以下のけいしやう　」二〇オ

うんかくはさしぬきのそはをたかくはさみ水きの
とを出てかちはたしにて我さきに〳〵といそぎは
こざきのつへこそ落給へおりふしくだる雨しやぢ
くのごとしふく風沙をあくとかや落るなみたふる
あめわきていづれもみえざりけり住吉はこさきか
しめむなかたふしおがみたゞしゆしやうきうとの
くはんかうとのみそいのられけるたるみ山うつら
はまなといふさがしきけんなんをしのかせ給ひて
べう〳〵たり平沙へそおもむかれけるいつならは
しの御事なれは御あしよりいつるちは沙をそめ
くれなゐのはかまは色をまししろきはかまはすそ
くぬなゐにそなりにけるされば彼げんじやう三ざう　」二〇ウ

の流沙そうれいのけんなんをしのかれけんくるし
みもこれにわいかてかまさるべきそれはぐほうの
ためなれはじたのりやくもやありけんこれはとう
せんのみちなれは来世のくるしみかつおもふこそ
かなしけれ原田の大夫たねなう二千余騎にて御供
に参り山がの兵藤次ひでとを数千騎にて平家の御
むかひに参よし聞えけりたねなうはひでとを以下
きうしうの者共にふ和なりければあしかりなん
とてみちより引かへす平家の人々あしやのつと云
所を過給ふにこれはみやこより我等が福原へか
よひし時朝夕見なれしさとの名なれぱとていづ
れの里よりもなつかしくいまさらあはれをそもよ　」二一オ

ほされけるしんら百さいかうらいせいたんくもの
はてうみのはてまでも落行はやとは思はれけれ
共波風むかふてかなはねは力及はす兵藤次ひでと
をにくせられて山かの城にそ籠られける山かへも
又かたきよすと聞えしかば取物もとりあへず小舟
共にのつてよもすからぶぜんの国やなぎがうらへ
そわたられける是に都をさだめて内裏つくらる

へしと公卿せんぎ有しかともふんけんなかりけれ
ばそれも叶はす又長門より源氏よすときこえし
かは取物もとりあへず主上をはじめ奉つて人々あ
まの小舟にめしてうみにそうかひ給ひける小松殿
の三なん左中将きよつねはもとより何事もふかふ
」二一ウ

思入給へる人にておはしければ月の夜こゝろ
をすましふなはたに立出やうでうねとりらう
ゑいしてあそはれけるがみやこをは源氏がために
せめ落されちんせいをはこれよしが為におい出
されあみにかゝれるうをのごとしいつくへ行は
のかるべきかは又ながらへはつべき身にもあらず
とてしづかにきやうよみねんふつしてうみにそ
しつみ給ひける年廿一なんによさしつどひてなき
かなしめ共かいそなき長門の国は新中納言知盛の
卿の国なりけり目代はきいのぎやうぶの大夫みち
すけといふ者なり平家あま人の小舟共にめしたる
よし承つてまさつみける大舟百余そうてんりやう
」二二オ

して奉る平家これにのりうつり四国の地へそわた
られける今度は阿波のみんぶ重能か沙汰として四
国の内をもよほしあつめて讃岐の八島にかたの
やうなるいたやの内裏や御所をそつくられける其
程はあやしのみんおくを皇ぎよとするにをよはね
は舟を御所とぞさだめける大臣殿以下の卿相うん
かくはあまのとまやに日をくらししつがふしどに
夜をあかすれうどうげきしゆをかい中にうかべ
なみの上のかうきうはしつかなる時なし月をひた
せるうしほのふかきうれへにしつみしもをおほ
へるあしのはのもろきいのちをあやふむすさきに
さはくちどりのこゑはあかつきうらみをよしそあ
」二二ウ

いにかゝる梶の音夜はにこゝろをいたましむはくろ
のゑんせうにむれゐるを見ては源氏はたをあくる
かとうたがはれ夜かんのさうかいになくを聞ては
かたき舟をこくかとおとろかるせいらんはたへを
おかしてはすいたいこうかんの色やう〳〵おとろ

へさうはまなこをうけつてはくわいとばうきやう
のなみだおさへかたしすいちやうこうけいにかわ
れる、にふの小屋のあしすたれくんろのけふりに
ことなるあまのもしほ火たくやのいやしきにつけ
ても女房たちつきせぬ物おもひにくれなゐのなみだ
せきあへ給はねばみどんのまゆすみもみたれつ、
その人ともみえたまはす　」二三オ

せいゐ将軍のゐんぜん

さる程に鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝ゐながらせい
ゐ将軍のゐんぜんをくださるゐんせんの御使はさ
ししやう中原のやすさだとそ聞えし十月四日くはん
とうへけちやくす兵衛の佐とのそも〳〵よりともぶ
ゆうのめいよちやうせるに依てゐなからせいゐ将
軍のゐんせんをかうふりわたくしにてはいかてか
うけとり奉べき若宮のはいでんにしてうけとり奉
へしとてわかみやへさんかうせらる八幡はつるか
おかにたゝせ給へりちけい岩清水にたかはすくわ
いらうありろう門あり作道十余町をみくだし
たりそも〳〵ゐんせんをばたれしてかうけとり奉る　」二三ウ

べきとぎでうありみうらのすけよしすみしてうけ
とり奉べしそのゆへは八ケ国に聞えたりし弓矢
とりみうら平太郎ためつきかはちようなり其うへ
父大すけも君の為にいのちをすてし兵なれは
彼義明がくわうせんのめいあんをてらさんがため
とそ聞えしゐんせんの御使やすさだは家の子二人
郎等十人ぐしだりけりみうらのすけも家の子二人
らうとう十人くしたりけり二人の家の子は和田の
三郎むねさねひきの藤四郎よしさだ也十人のらう
とうをは大名十人して一人つゝにはかにしたて
られたりみうらのすけかその日のしやうそくには
かちのひたゝれにくろいとおとしのよろひきて　」二四オ

こくしつの太刀をはき廿四さいたるきりうの矢お
いしげどうの弓わきにはさみ甲をはぬいてたか

ひぼにかけこしをかゝめてゐんせんをうけとり
奉るさししやうゐんせんうけとり給ふはたれ人そ
なのられよと云けれは兵衛の佐の佐の字におそれ
てやありけんみうらのすけとは名乗らすして本名
みうらのあら次郎よしすみとそ名乗たるゐんぜん
をばらんはこに入られたり兵衛の佐殿に奉る
やゝあつてらんはこをば返されけり重かりけれは
やすさだこれを見るにしやきん百両入られたり若
宮のはいでんにしてやすさだにさけをすゝめらる
高つきにさかなおかれたりさいゐんの次くはん　」二四ウ

親義けんはいす五位一人やくさうをつとむ馬三疋
ひかる一ひきにくらおいたり大宮の侍たりし
くとう一らうすけつね是を引次にふるきかややを
しつろふてやすさだを入られたりあつわたのきぬ
二りやう小袖十重長持に入てまうけたりびけん百
ひき次のきぬ二百ひきこんあいすり五百たんしろ
ぬの千だんをつめりはいはんゆたかにしてびれい
なりつきの日兵衛の佐のたちへむかふ内外に侍有
ともに十六間有とさふらひには家の子郎等共肩を
ならべひざをくんでなみゐたりうちさふらひには
一門の源氏上座してはつざには大名小名ゐなかれ
たり源氏のざ上にやすさだをすへらるやゝ有て　」二五オ

しんでんにむかふ上にはかうらいへりのたゝみを
しきひろびさしにはむらさきべりのたゝみをしい
てやすさたをすゑらるみす高くあげさせて兵衛の
佐殿出られたりほういに立ゑぼし也かほおほきふ
せいひきかりけりゆうはうゆうびにしてけんぎよ
ふんみやうなりまづ子細を一事のべたりそも〳〵
平家頼朝がいせいにおそれてすでに都を落ぬその
あとに木曾のくわんしや義仲十郎蔵人らうち入て
我かうみやうかほにくはんかいを思ふさまになり
あまつさへ国をきらひ申条是もつてきくわい也
又おくのひでひらがみちのくのかみになり佐竹の
四郎かひたちのかみになつてよりともが下知に　」二五ウ

したがはすいそぎついたうすべきよしのゐんぜん
を給べきよし申さるさししやう申けるはやす
さだもこれにてみやうぶをまいらすべう候へども
御使の身に候へはまかりのぼり候てやがてしたゝ
めてまいらせ候べしおとゝで候しの大夫しげさだ
も此儀を申候と申せば兵衛の佐わらつてたうし
頼朝が身としてをの〳〵のみやうぶ思ひもよらず
さりながらけにも申たればさこそ存せめとそ宣ひ
けるやすさたやがて今日しやうらくすべきよしを
申けふはかりはとうりうあるへしとてとゞめらる
次の日又兵衛の佐のたちへむかふひおとしのはら
まき一両しろふ作たる太刀一ふりしげどうの弓に
九さいたるの矢そへてたふ馬十三疋ひかる三ひき
にくらおいたり十二人の家の子郎とうに至るまで
ひたゝれ小袖大くち馬物のくに及へり馬だにも三
百ひきまでありけり鎌倉出のしゆくよりもはじめ
て近江の国かゝみのしゆくに至るまでしゆく〳〵

」二六オ

に十こくつゝのよねをおいたりけれはたくさん成
に依てせぎやうを引けるとそ聞えしやすさた都へ
上り院参して御つぼのうろにかしこまりくわん
とうの次第一々にそうもん申たりけれは法皇
大きにぎよかんありけり公卿殿上人もよりともが
ふるまひしんへうなりとそかんじあはれける

ねこま

兵衛の佐殿はかうこそゆゝしうおはせしにたうし
木曾の左馬のかみ義仲はみやこの守護して候ける
がにもにずわるかりけり色しろふみめはよいおと
こにてありけれとも立ゐふるまひのぶこつさもの
云たることばつゝきのかたくな成事かぎりなし
ことはりかな二歳より三十にあまるまでしなのゝ
国木曾と云山里に住なれておはしけれはなどかは
よかるべき其比ねこまの中納言光高の卿といふ人
有けり木曾にのたまひ合すへき事あつておはし
たりらうとう共ねこま殿の入せ給て候といひけれ

」二六ウ

は木曾大きにわらつてねこは人にたいめんするか
といふらうどう共是はねこまの中納言殿と申公卿　」二七オ

にてわたらせ給候ねこま殿とは御宿所の名と聞え
候と申けれは木曾さらはとてたいめんす木そなをも
ねこまとのとはえいはてねこ殿のまれ〳〵おわひ
たるにいひよそへとそいひける中納言いかてさる
事候べきとのたまへは木曾どこなるやとのまれ
〳〵おわひたにいひよそはせてはいかてあるべき
しかもけとき也いつれも新き物をはぶゑんといふ
そとこゝろへてふゑんのひらたけこゝに有とふ〳〵
といそかせけりねのゐの小弥太はいぜんす田舎
がうしの極て大きにくほかりけるにいゝうつだ
かふよそひ御さい三しゆしてひらたけのしるにて
まいらせたり木そがまへにもおなじていにてすへ　」二七ウ

たりけり木曾はしおつ取てしよくす中納言はあ
まりに合子のいぶせさにめさざりけれは木曾それ
は義仲かしやうじんがうしにて候きたなふな思ひ
給ふそとふ〳〵とすゝむるあひだ中納言めさても
さすがあしかりなんとや思はれけんはしとつて
めすよしてさしおかれたりけれは木曾大きにわ
らつてねこ殿はせうしきにてはしけりきこゆる
ねこおろししたまへりかひ給へ〳〵とそせめたり
ける中納言は加様の事にけうさめて宣ひあわす
べき事共一ことはも出されすいそぎ帰られけり
其後よしなか院参しけるにくわんかいしたる物の
ひたゝれにて出仕せん事あるへうもなしとて　」二八オ

にわかにほういとりしやうぞくかふりきは袖のか
かりさしぬきのりんに至るまでかたくな成事
かぎりなしよろひ取てき矢かきおひ弓おしはり甲
のおをしめて馬に打乗たるにはにもにずわろかり
けりされともくるまにこかみ乗ぬうしかいは八
島の大臣殿のうしかいなり名をば弥次郎丸とそ云
けるうしくるまもそなりけり世にしたかふならひ

なれはめしつかはれけるがあまりのめさましさに
すゑかうたるうしのはなのこわきに門を出るとて
一ずはへあてたらふになしかはよかるべきうしは
飛て出れは木曾はくるまの内にてあほのけにたを
れぬてうのはねをひろけたるやうに左右のそでを
ひろげ手をあがひておきん〳〵としけれともなし
かはおきらるべき木曾うしかいとはえいわでやれ
小うしこんでいやれ小うしこんでいといひけれは
くるまをやれといふそとこゝろへて五六町こそあ
からせたれ今井の四郎兼平むちあふみを合ておつ
付何とて御くるまをはかやうには仕そと云けれは
あまりに御うしのはながこわふしてとそのべたり
けるうしかい木曾に中なをりせんとや思ひけん
それに候手かたと申物にとりつかせ給へといひ
ければ木曾てかたにむずとつかみ付あつはれし
たくやこれはうしこんでいがはからひか大臣殿の
やうかとそとうたりけるうしかいは終にきられ
」二九オ

にけりさて院の御所へまいり門前にてくるまかけ
はつさせうしろよりおりんとしけれは京のもの
ざうしきにめしつかはれけるか御くるまには
めされ候時こそうしろよりはめされ候へおりさせ
給ふ時はまへよりこそおりさせ給ふべけれと申
けれは木曾いかんかくるまならんからにすとをり
をはすべきとてつゐに後よりそおりてける其外お
かしき事共おほかりけれ共おそれて是を申さす

水島かつせん

平家は讃岐の八島にありながらせんやう道八ケ国
なんかい道六ケ国都合十四か国をそしたかへける
木曾の左馬のかみこれをきゝやすからぬ事なり
」二九ウ

やがてうつてをさしつかはすうつての大将軍には
矢田の判官代義清侍大将にはしなのゝ国の住人
うん野の弥平四郎ゆきひろ都合其せい七千余騎
せんやう道へはせくだり備中の国水島がとに
舟をうかへて八しまへすでによせんとすおなしき

うるう十月一日水島かとに小舟一そう出来り
あまふねかつりふねかと見るほどにさはなくして
平家のかたより朝の使のふねなりけりこれを見て
源氏のふね五百余そうほしあげおいたるをおめき
さけんておろしけり平家は三万余騎千余そうて
しよせたり平家のかたの大手の大将軍は新中納言
知盛の卿からめでの大将軍は能登の守のりつね　」三〇オ

なり能登殿大おんじやうをあけてのたまひけるは
いかにつはものとも此二三ケ年かあひだ東国北国
のやつはらにいきなふりにせられつる事をば心
うしとはおもはすや味方のふねをくめやとて千よ
そうのふねのともへをならべくみあはせ中にもや
いのつなを入あゆみのいたを引ならべ〳〵わたひ
たれはふねのうへはへい〳〵たり源平両方時作り
矢あはせしてたがひにふねともおしあわせ〳〵
せめたゝかふとをきをば弓て射ちかきをは太刀て
切くまでにかけて取もありとらるゝもあり引くん
てうみへ入も有さしちがへて死するも有思々心々
にせうぶをす源氏の方の侍大将うん野の弥平四郎　」三〇ウ

うたれにけり是を見て大将軍矢田の判官代義清主
従七人小舟に乗てまつさきにすゝんてたゝかふ
程にいかゞしたりけん舟ふみしづめてみな死ぬ平家
はくらおき馬をふねのうちにたてられたりけれは
ふねさしよせ馬ともうみへおいおろし〳〵ふな
はたにひきつけ〳〵およかせて馬のあしをよぶ程
にもなりけれはひた〳〵と打乗てくがへおめいて
そかけたりける源氏のかたには大将軍矢田の判官
代よしきよもさふらひ大将うんのゝ弥平四郎ゆき
ひろもうたれにけれはさん〳〵にかけちらされ
残すくなになつてわれさきにとそ落行ける平家
は水島のいくさにかつてこそくわいけいのはち　」三一オ

をはきよめける

せのをがさいご

木曾の左馬のかみ是をきゝやすからぬ事なりとて
一万余騎てせんやう道へはせ下る平家の侍備中の
国の住人せのをの太郎かねやすは北国となみ山の
たゝかひに加賀の国の住人くらみつの次郎なり
すみが手にかかつていけどりにせられたりしを
なりすみが弟くらみつの三郎成氏にあつけられ
たりきこゆるかうのもの大力なりけれは木曾殿あ
たらおとこをうしなうべきかとてきられす人あひ
こゝろさまゆうになさけ有けれはくらみつもねん
ころにもてなしけりそしけいがここくにとらはれ　」三二ウ

りせうけいかかんてうへかへらざりしがごとし
とをくいこくに侍ける事はむかしの人のかなし
めりしところなりといへりおしかわのたまきか
ものはくもつて風雨をふせきなまくさきしゝらく
のつくり水もつてきかつにあつ夜はいぬる事なく
ひるはひめもすにつかへ木をきり草をからすと云
はがりにしたがひつゝいかにもしてかたきをうか
かひうつていま一度旧主を見奉らんとおもひける
かねやすがこゝろの程こそおそろしけれあるとき
せのをの太郎倉光の三郎にあふていひけるは去
五月よりかいなきいのちをたすけられまいらせ
候へはたれをたれとか思ひまいらせ候べきじこん　」三二オ

以後御軍候はゝまつさきかけて木曾殿にいのちを
まいらせ候へしかねやすが知行仕候ひし備中の
せのをは馬のくさかいよきところで候御へん申て
給はらせ給へといひけれはくらみつ此やうを木曾
殿に申木曾殿しんべうなる事申こさんなれさらは
なんちせのををあんないしやにしてまづくだつて
かつ〳〵馬のくさなんとをもかまへさせよとのた
まへはくらみつ三郎かしこまり承つて其せい三十
騎ばかりせのをの太郎をさきとしてひつちうへそ
くだりけるせのをがちやくし小太郎むねやすは
平家の御方に候けるが父が木曾殿よりゆるされて
下ると聞えしかは年来の郎等とももよほしあつめ　」三二ウ

其せい五十騎はかりでむかひにのぼる程に播磨のこうで行合てそれよりうちつれてそくだりける備前の国三いしのしゆくにとゞまりたりければせのをがしたしき者ともさけを持せて出来りよもすからよろこびのさかもりしけるにあつかりの武士倉光の三郎所従ともに三十余人しいふせておこしもたてずせの尾おや子して一々にみなさしころしてけり備前の国は十郎蔵人の国なりその代くわんのこうにありけるをもやがておしよせてうつてけり扨せのをの太郎びせんひつちうびんご三ケ国にひろうしけるはかねやすこそ木曾殿よりいとま給はつてまかり下たれ平家に心ざしおもひ」三三オ

まいらせん人々はかねやすをさきとして木曾殿のくだり給ふに矢一つ射かけ奉れとひろうしければ平家に心さし思ふともがらよろこぶ事かぎりなしびせんひつちうびんご三が国のつはものとも馬物の具しかるべき所従をは平家の御かたへまいらせて人も物具もなかりけりやすみゐたりける老者ともあるひはかきのひたゝれにつめひほしあるひはぬのゝ小袖にあつまおりしくさりばらまきつゝりきて山うつほたかゑひらに矢共少々さしつゝかきおひ〳〵せのをがもとへはせあつまる都合其せい二千余人せのをの太郎をさきとしてびせんの国ふくりう寺なわてさゝのせまりをじやうくわくに」三三ウ

かまへくち二ちやうふかさ二ちやうにほりをほりさかもぎ引高矢倉かき矢さきをそろへて今や〳〵と待かけたり備前の国に十郎蔵人のおかれたりし代くはんせのをにうたれて其下人ともかにげて京へのぼるほどに播磨と備前のさかひ舟坂といふ所にて木曾殿に参合此由申けれはやすからぬ事かな切てすつべかりつる物をとこうくわいせられけり今井の四郎申けるはさ候へはこそきやつかつらたましゐまなこさしたゞものとは見候はすしきりにきろふと申候つる物をたすけさせ給ひ

てと申せば木曾殿思ふに何程の事かあるべきおつ
かけてうてとそのたまひける今井の四郎まづ　」三四オ
下て見候はんとて三千余騎てはせむかふびぜんの
ふくりう寺なわてははたはり弓づえ一つえはかり
にてとをさは西国道の一里なり左右はふか田にて
馬のあしも及はねは三千余騎がこゝろはさきに
すゝめとも馬次第にそあゆませけるおしよせて見
けれはせのをの太郎やくらに立出大おんじやうを
あげて去ぬる五月より今までかいなきいのちを
たすけられまいらせて候をの〳〵の御はうしには
これをこそよういして候へとてくつきやうのつよ
弓せいひやうとも数百人すくりあつめ矢さきをそ
ろへてさしつめ引つめさん〳〵に射るくち一方の
所にて源氏のせいまとに成て射られけりおもてを　」三四ウ
むかふべきやうもなし今井の四郎をはじめとして
たてねのゐみやさきの三郎すはふぢさわなといふ
はやりおのつはもの共かぶとのしころをかたぶけて
射ころさるゝ人馬を取入引いれほりをうめおめき
さけんでせめたゝかふあるひは左右のふか田に
打入て馬の草わきむながひつくしふとはらにたつ
ところを事共せずむらめかいてよせあるひは谷
ふけをもいはすすぢかいさまにかけいり〳〵一日
たゝかひくらしけり夜に入てせの尾がもよほし
あつめたるかり武者ともみなせめおとされてたす
かるものはすくなふうたるゝものぞおほかりける
せのをの太郎さゝのせまりのじやうくわくをやぶ　」三五オ
られてひきしりそき備中の国いたくら河のはた
にかいだてかいて待かけたり今井の四郎やがて
おしよせせめけれは山うつほたかゑひらに矢たね
の有程こそふせきけれみな射つくしてけれはわれ
さきにとそ落行けるせのをの太郎主従三騎に
うちなされいたくら川のはたにつゐてみどろ山の
方へ落行程に北国でせのをいけどりにしたりし

くらみつの次郎なりすみ弟はうたれぬやすからぬ
事なりせのをにおゐては又いけとりに仕候はん
とてくんにぬけてたゞ一騎返てゆきあわひ一町
ばかりにおつついていかにせのを殿まさなふも
かたきにうしろをは見する物かな返せや〳〵と」　三五ウ

いはれていたくら河を西へわたすが河中にひかへ
て待懸たり倉光はせ来ておしならべむずとくんて
どうどおつたかひにおとらぬ大力なれは上になり
下になりころびあふほどに川きしにふちの有ける
にころび入たりけるがくらみつはぶすいれんなり
せのをはすくれたるすいれんなりけれは水のそこ
てくらみつを取ておさへよろひのくさすり引あげ
つかもこぶしもとをれ〳〵と三刀さいてくびを取
我馬は乗そんじたれはかたきくらみつが馬に
乗て落行ほどにせのをがちやくし小太郎むね
やす馬にはのらすかちにて郎等とつれて落ゆき
けるがいまだ廿二三のおとこなれともあまりに
」三六オ

ふとつて一町ともえはしらず物の具ぬきすて
あゆめ共かなはざりければ父は是を打すて十余
ちやうこそにげのびたれせのをらうとうにあふて
いひけるはかねやすは千万のかたきにむかつて
軍すれとも四方はれておほゆるが今度は小太郎を
すて行はにや一かうさきがくらふてみえぬそたと
ひかねやすいのちいきてふたゝび平家の御方へ参り
たり共とうれい共かかねやす今は六十にあまつ
たる者のいく程のいのちをおしうてたゞひとり有
子をすてにけのひけるやらんといわれん事こそ
はつかしけれと云らうとう申けるはさ候へはこそ
御一所ていかにもならせ給へと申つるはこゝ候　」　三六ウ

かへらせ給へといひけれはさらはとて取てかへす
小太郎はあしかつけにはれてふせりかねやすなん
ちかえおつつかねは一所でうち死にせうとて帰り
たるはいかにといへは小太郎なみだをはら〳〵と
流て此身こそぶきりやうの者で候へはじがいをも

仕候へきに我ゆへに御いのちをさへうしなひ
まいらせん事五きやくさいにや候はんつらん只
とう〳〵のびさせ給へと申せともおもひきつたる
うへはとてかれ是三人やすむところに今井の四郎
まつさきかけて其せい五十騎はかりおめいておつ
かけたりせの尾の太郎矢七つ八つ射残したるを
さしつめ引つめさん〳〵に射るししやうはしらす　」三七オ

やにわにかたき五六騎射落す其後うちものぬいて
まづ小太郎むねやすかくび打落しかたきのなかへ
わつて入さん〳〵にたゝかひかたきあまたうち
とつて終にうちしにしてけり郎等も主にちつとも
おとらす戦ひけるに大事の手あまたおいたゝかひ
つかれてじかいせんとしけるがいけどりにこそ
せられけれ中一日あつてしにけりこれら主従
三人がくびをば備中の国さきがもりにそかけたり
ける木曾殿これを見給ひてあつはれかうの者かな
是をこそ一人たうぜんのつはものともいふべけれあ
たらものともをたすけてみでとそ宣ひける
むろ山かつせん　」三七ウ

さる程に木曾は備中の国まんじゆのしやうにて
せいそろへして八島へすでによせんとす其間に都
のるすにおかれたるひぐちの次郎兼光使者を立て
木曾殿へ申けるは十郎蔵人殿こそ殿のましまさ
ぬまに院のきり人してやう〳〵にざんそうせられ
候なれ西国の軍をはしばらくさしおかせ給ていそぎ
のほらせ給へと申けれは木曾さらはとて夜を日
につゐてはせ上る十郎蔵人あしかりなんとや思ひ
けん木曾にちかわんと丹波路に懸て播磨の国へ
下る木曾はつの国をへてみやこへ入平家は又きそ
うたんとて大将軍には新中納言知盛の卿ほん三位
の中将しげひら侍大将には越中の次郎兵衛盛次
かづさの五郎兵衛忠光あく七兵衛かげきよ都合其
せい二万余騎千余そうの舟に乗はりまの地へおし　」三八オ

わたつてむろ山にぢんをとる十郎くらんど平家
といくさしてきそに中なをりせんとやおもひ
けん其せい一万余騎でむろ山へおしよせてときを
とつとぞ作ける平家はぢんを五つにはるまつ伊賀
の平内左衛門の尉家長二千余騎にて一ぢんをかた
む越中の次郎兵衛盛次三千よきにて二ちんをか
たむかつさの五郎兵衛忠光あく七兵衛かげきよ
二千余騎にて三ぢんをかたむほん三位の中将しげ
ひらのきやう三千余騎にて四ぢんをかため給ふ
新中納言知盛の卿一万よきにて五ぢんにひかへ　」三八ウ

給へり十郎蔵人行家其せい一千余騎おめいてかく
まづ一ぢんにひかへたる伊賀の平内左衛門家長
しばらくあひしろふやうにもてなひて中をあけてそ
とをしける二ちん越中の次郎兵衛盛次是もあけて
そとをしける三ちんかづさの五郎兵衛忠光あく七
兵衛かげきよともにあけてそとおしける四ぢん本
三位の中将同くあけて入られたりせんぢんよりご
ちんまで兼てやくそくしたりけれは源氏を中に
取籠て時をとつとぞ作りける十郎蔵人たはかられ
にけり四方はみなかたき也叶へし共みえざりけれ
は思切てそ戦ひける新中納言只おしならべてくめ
や〳〵と下知し給へ共さすが十郎くらんどに　」三九オ

くむ武蔵一騎もなかりけり新中納言のむねとたの
まれたりけるきの七左衛門八衛門きの九郎なと云
一人たうぜんの兵共そこにてみな十郎くらんどに
うつとられぬかくして十郎くらんと三十騎ばかり
にうちなされ四方はみなかたき也のかるべきとは
おほえね共一方うちやぶつてそとをりけるされ共
我方は手もおはす家の子郎等三十余騎たいりや
く手おうて播磨の国たかさごよりふねにのりおし
渡ていづみの国にそつきにけるそれより河内へ
打越て長野の城にひきこもる平家はむろ山水島二
ケ度の軍にかつてこそいよ〳〵せいはつきにけれ

法住寺合戦

」三九ウ

をよそ京中には源氏のせいみち〳〵てさい〳〵
所々入どりがうだうおほかりけり賀茂八幡の御
りやうともいはすあを田をかつてまくさにしだう
たうをこほつてたきゝにす人のくらをうちやふつ
てさいほうをわうりやうする事かぎりなし辻々に
しらはたうつたて〳〵もつてとをるものをうはひ
つゝいしやうをはきとる平家の都におはせし時は
六波羅殿とてたゝ大かたおそろしかりしばかり也
いしやうをはぎとるまではなかりしをいつしか
平家に源氏かへおとりしたりとぞ人申ける去程に
木曾の左馬のかみのもとへ法皇より御使あり狼藉
しづめよと仰くださる御使はいきのかみともちか

」四〇オ

が子にいきの判官ともやすと云ものなり天下に
すくれたるつゝみの上手で有けれは時の人つゝみ
判官とそ申ける木曾たいめんしてまづ御返事
をは申さてそも〳〵わとのをつゝみ判官といふは
よろづの人にうたれたうかはられたうかとそとふ
たりけるともやす返事に及はす院の御所に帰り
参て義仲はおこの者で候たゞいまてうてきになり候
なんずいそぎついたうせさせ給へと申けれは法皇
さらはしかるべき武士にはおほせで山の座主寺の
ちやうりに仰られて山門三井寺のあく僧ともを
めされけり其外弓取てよからんする物ともはみな
参るへしとふれられたり御所方へめされけるせい

」四〇ウ

と申はむかへつふといんぢ云かいなき辻くわん
じやばらこつしき法師ともなりけり木曾の左馬の
かみ院の御気色あしうなると聞えしかははじめは
木曾にしたかふたりける五き内のつはものどもみな
そむひて院方へ参るしなの源氏むら上三郎判官代
もとくに近江源氏山本のくはんしや義高是も木曾を
そむいて院かたへ参りけり今井の四郎申けるは
これこそ以外の御大事て候へさらはとて十ぜん

帝王にむかひまいらせていかてか御合戦候べき甲
をぬき弓をはついてかう人にまいらせ給へと申
せば木曾大きにいかつて我しなのを出し時よこ田
河原の軍よりはじめて北国にはとなみ山黒坂しほ　」四一オ

あ高しのはら西国には福立寺なわてさゝのせまり
いたくらか城をせめしかと未かたきにうしろを
見せずたとひ十せんていわうにてまします共かぶと
をぬきゆみをはついてかう人にはえこそ参るまじ
けれ其上此法皇はおそろしき人にておはするもの
をさうなふ参つてくびうつきられ申て何にかは
せんみやこの守護してあらんものが馬一疋つゝ
かうてのらさるべきかいくらもある田ともをから
せてまくさにせんをあなかち法皇のとがめ給ふ
べきやうや有ひやうらうまいもなけれはくはん
じやはらかかたほとりに付て時々入取せんはなに
かひかことならん大臣家や宮々の御所へまいらは　」四一ウ

こそ狼藉ならめこれはいかさまつゝみ判官かけう
かいとおほゆるそ其つゝみめにくし打やぶつてすて
よ今度は義仲がさいごの軍て有らんするそ頼朝
がかへりきかんところもありいくさようせよもの
ともとて打立けり北国のせいともみな落くだつて
わづかに七千余騎そありける我軍のきちれいな
ればとて七手に作るまづ今井の四郎兼平ひぐちの
次郎兼光二千余騎て今熊野のかたへからめ手に
さしつかはす残り六手はをの〳〵かゐたらん条里
小路より出て七条河原にてひとつになれとあいず
をさだめて法住寺殿へそむかひけるいくさは十一
月十九日の朝なり院の御所ほうぢう寺殿にも軍兵　」四二オ

二万余人参り籠たるよし聞えけり御所かたのかさ
しるしには松のはをそ付たりける木曾ほうちう寺
殿の西の門におしよせて見れはつゝみ判官とも
やすいくさの行事承てあか地のにしきのひた
たれによろひはわざときざりけりかふとばかりそ

きたりける甲には四てんを書ておしたりけり御所
の西のつゐかきのうへにのほつて立たりけるか
かたてにはほこをもちかたてにはこんがうれいを
持てうちふり〳〵時々はまふおりもありけり若き
公卿殿上人風情なしともやすにはてんぐついた
りとぞわらはれけるともやす大おんじやうをあげ
てむかしはせんじをむかへてよみけれはかれたる　」四二ウ

草木も花さきみなりあくきあく神もしたがひけり
末代ならんからんにいかんか十ぜん帝王にむかひ
まいらせてゆみをひくべきなんちかはなたん矢は
かへつて身にあたりぬかん太刀にては身を切へし
なとの丶しりけれは木曾さないはせそとてときを
どつとそ作りける去程にからめでにさしつかはし
たる今井の四郎兼平ひぐちの次郎兼光今熊野の方
より時のこゑをそ合せたるかふらの中に火を入て
法住寺殿の御所に射たてたりけれはおりふし風
はけしくみやうくわ天にあかつてほのをはこくう
にひまもなしいくさの行事ともやすは人より
さきに逃にけり行事が落るうへは二万余人の　」四三オ

くはんぐんとも我さきにとそおちゆきけるあまり
にあわてさわいておそふはしる者ははやふはしる
者にふみたをされあるひは長刀さかさまにつ
いて我あしつきつらぬく者もありあるひは弓のは
ずものにかつてえはつさてすて丶にくるものも
有れんけわうゐん今熊野法性寺大路河原坂所々で
合戦す七条がすへをば三井寺法師のかためけるが
一矢射でにげにけり八条かすへをは山僧のかため
けるかはぢあるものはうちしにしつれなきものは
落そゆく九条がすへをはつの国源氏のかためける
がしばしもたゝかはでおちにけり軍以前より落人
のあらんするをは用意してうちころせと御所より　」四三ウ

ひろうせられたりけれはさい地の者とも両方のや
ねいにたてをつきおそへのいしをとりあつめて待

かけたるところにつの国源氏の落けるをあわや
落人よとていしともひろいかけてさん〳〵にうつ
是は院方ぞあやまち仕なといへともさないはせそ
ゐんせんで有にたゞうちころせ〳〵とてうつ間
あるひは馬をすてゝはう〳〵逃もありあるひは打
ふせられておめきさけぶもありけり法皇は御こし
にめして他所へ御幸なる武士共さん〴〵に射奉る
ふんごの少将家長もくらん地のひたゝれにおり
ゑぼしてくぶせられたりけるが是は法皇の御幸そ
あやまち仕るなとのたまへはつはものは馬よりおり」四四オ

弓をふせてかしこまるなにものそと御たづねあり
けれはしなのゝ国の住人矢島の四郎ゆきつなと
名乗申やがて御こしに手をかけまいらせ五条の
内裏におし籠奉てきひしう守護し奉る主上はいけ
に舟をうかへてめされけりぶしともしきりに矢を
まいらせけれは七条の侍従信清きのかみのりみつ
御舟に候はれけるかこれは内のわたらせ給ふそ
あやまちつかまつるなとのたまへは兵ともみる馬
よりおり弓をふせてかしこまるかんゐん殿へ行
幸なし奉るぎやうがうのぎしきのあさましさ申
も中々おろかなりもんどのかみ親成うすあほの
かりきぬのしたにもよきのはらまきをきてしら」四四ウ

あしけなる馬に乗河原をのぼりに落て行今井の
四郎兼平おつかけしやくびのほねを射ていおとす
せい大けきよりなりか子成けりみやうぎやう道の
はかせかつちうをよろふ事しかるべからすとそ
人申ける木曾をそむいて院方へ参たるしなの源氏
むらかみの三郎判官代もうたれにけり是をはしめ
てゐんがたには近江の中将為清越前の守信行も
いころされてくびとられぬはうきのかみ光長子息
判官みつつね父子ともにうたれぬあぜちの大納言
すけかたのきやうのまご播磨の少将まさかたもよ
ろひにたてゑぼしていくさのぢんへ出られたり
けるかひぐちの次郎にいけどりにせられ給ひぬ」四五オ

てんたい座主明雲大僧正てらのちやうりゑんけい
法親王も御所に参り籠らせ給ひたりけるがくろ
けふりすでにおしかけたれは御馬にめしていそぎ
河原へ出させ給ふ武士ともさん〳〵に射奉る明雲
大僧正ゑんけい法親王も御馬よりいおとされて御
くひとられさせ給ひけりふんごのこくし刑部卿
三位よりすけのきやうも御所に参りこもられたり
けるか火はすてにおしかけたりいそぎ河原へ逃
出給ふぶしのしもべ共にいしやうみなはきとられ
まつはたかで立れたり十一月十九日の朝なれは
河原風さこそさむかりけめ三位のこしうとに越前
のほうけんしやういと云そうあり其中間ほうし　」四五ウ

軍見んとて河原へ出たりけるが三位のはたかでた
たれたるに見あふてあな浅ましとてはしりよる此
法師は白小袖二つにころもきたりけるかさらは小
袖をもぬいてきせ奉れかしさはなくしてころもを
ぬいてなけかけたりみしかき衣うつほにほうかう
でおびもせずうしろさこそみくるしかりけめ
ひやくゑなるほうしをともにぐしておはしけるか
さらはいそいてもあゆみ給はてあそこ爰に立とゞ
まりあれはたが家そ是はなにものか宿所そこゝは
いつくそと道すからとはれけれは見る人みな手を
たゝいてわらひあへり院方に候はれける源蔵人
仲兼そのせい五十騎はかりて法住寺殿の西の門を　」四六オ

かためてふせぐところに近江源氏山本のくはんしや
義高はせ来ていかにをの〳〵たれをかばはんとて
軍をし給ふそ御幸も行幸も他所へ成ぬとこそ
承れと申せは源蔵人さらはとて大せいの中へおめ
いてかけ入さん〳〵にたゝかひかけやふつてそと
をられける主従八騎にうちなさる八騎か内に河内
の草かたう加賀ばうと云ほうし武者有けりしら
あしけなる馬のきわめてくちのこはきにそ乗たり
けるこの馬かあまりにくちかこわうてのりたまる
へしともおほえ候はすと申けれはくらんどいて

さらはわか馬に乗かへよとてくりげなる馬のした
尾しろひにのりかへてねのゐの小矢田か二百騎　」四六ウ

はかりてさゝへたる河原坂のせいの中へおめい
てかけ入そこにて八騎が五騎うたれぬたゞ主従三
騎にそなりにける加賀ばうは我馬のひあひなり
とてしうの馬に乗かへたれ共そこにて終にうたれ
にけり源蔵人の家の子にしなのゝ次郎くらんど
なりよりと云ものありかたきにおしへたてられて
くらんとの行衛をしらすくりけなる馬のした尾
しろいがはしり出たるを見て下人をよひこゝなる
馬はげんくらんどの馬とこそみれ又うたれけるに
こそ死なば一所てしなんとこそちぎりしに所々
でうたれん事こそかなしけれどのせいの中へ
入とか見つる河原坂のせいの中へこそかけいらせ　」四七オ

給ひて候つるなれやがてあのせいの中より御馬
も出来候と申なかよりさらはなんちはとう〳〵

是より帰れとてさいごのありさま古郷へいひつか
はしたゞ一騎かたきの中へかけいり大おんじやう
をあけて名乗けるは是はあつみの親王より九代の
こういんじなのゝかみ仲重が次なんしなのゝ次郎
蔵人なかより生年廿七歳我とおもはん人々はより
合やげんざんせんとてたてさまよこさまくもで十
もんじにかけわりかけまはりたゝかひけるか
かたきあまたうつとつてつゐにうちしにしてけり
くらんとこれをは夢にも知ずあにの河内の守仲信
郎等一騎うちくして主従三騎南をさして落行し程　」四七ウ

に摂政殿の都をば軍におそれて宇治へ御出なり
けるに木幡山にておつつき奉る木曾かよたうかと
思食御くるまをとゝめて何者そと御たづねあれ
は仲兼仲信と名乗申こはいかに北国のけうとか
なとおほしめしたれはしんへうに参りたりちかふ候
て守護仕れと仰けれはかしこまつて承うぢのふけ
どのまで送参らせてやがて此人共はしよりやうな

れは河内の国つぼゐをさいてそ落られける明る廿日木曾の左馬のかみ六条河原に打立て昨日きる所の首共懸ならへてしるいたりけれは六百三十余人也其中に明雲大僧正寺のちやうりゑんけい法親王の御くびもかからせ給ひけり是を見る人なみだを」四八オ

ながさすと云事なし木曾其せい七十余騎馬のはなを東へむけ天もひゞき地もゆるぐ程に時をそ三ケ度作ける京中又さわぎあへり但是はよろこびの時とそ聞えし故せうなごん入道信西の子息宰相ながのり法皇の渡らせ給ふ五条の内裏に参つて是は君にそうすべき事か有そあけてとをせとのたまへ共武士ともゆるし奉らす力及はて有せうおくに立入にわかにかみそりおろし法師になり黒そめのころもはかまきて此上はなにかくるしかるべき入よとのたまへは其時ゆるし奉る御前へ参て今度うたれ給へるむねとの人々の事共つぶさにそうもんしけれは法皇御なみだをはら〳〵と流させ給て」四八ウ

明雲やゑんけい法親王はひこうの死にすべきものとは思食ざりつる物を今度はたゞ我いかにも成べかりつる御命にかはりけるにこそとて御なみだせきあへさせたまはす

かるの大臣

木曾家の子郎等めしあつめてひやうでうす院の御出家あれは法皇と申事をも主上のいまだ御げんふくもなきほどは御とうきやうにてわたらせ給ふ事をも知すして木曾云けるはそも〳〵義仲一天の君にむかひ奉て軍にはかちぬ主上にやならまし法皇にやならましゝゆしやうにならふと思へ共わらはにならんも然べからす法皇にならふと思へ共法師に」四九オ

ならんもおかしかるべしよし〳〵さらばくはんはくにならふと云けれは手書にくせられたる大夫ばうかくめい申けるはくはんはくは大しよくはんの御末藤氏こそならせ給へ殿は源氏てわたらせ給へは叶候ましと申木曾此上は力及はずとて院の御まや

のべつたうにおしなつて丹波の国をそ知行し
ける木曾は前のくわんはく松殿のひめ君を取奉て
やがて松殿のむこにおしなる同き十一月廿三日三
条の中納言朝方の卿を始として卿相うんかく四十
九人くはんしよくをとゞめておつこめ奉る平家の
時は四十三人をそとゝめたりしにこれは四十九
人なれは平家のあくきやうにてうくわせり去程に　」四九ウ

木曾が狼籍しづめんとて鎌倉の前の兵衛の佐頼朝
しやていかばのくはんじやのりより九郎くはんじや
義経に六万余騎を相そへてさし上せられけるが都
には軍出来てすでに法住寺殿をやきはらひ院内
とり奉て天下くらやみになつたるよし聞えしかば
さうなふのほつて軍すべき様もなし是よりくはん
とうへ子細を申さんとて尾張の国あつ田の大ぐう
じがもとにとうりうせらる此事うつたへんとて
ほくめんに候ける宮内の判官公朝藤内左衛門時成
おはりの国にはせくだり此由一々次第にうつたへ
けれは九郎御ざうし是は宮内判官のくわんとうへ
くだらるべきにて候也しさいしらぬ使は返して　」五〇オ

とはるゝ時ふしんの残るにとのたまへは公朝かま
くらへはせ下る軍におそれて下人共みな落うせた
れはちやくしの宮内ところきんもちが十五になる
をそぐしたりけるくはんとうに参つて此よし申
けれは兵衛の佐大きにおとろひてまづつゝみ判官
ともやすかふしぎの事申出して御所をもやかせ
高僧貴僧をもほろほし奉たるこそきくわいなれと
もやすにおゐてはすてにいちよくの者也めしつか
はせ給はゝかさねて御大事出来候なんすと都へ
はや馬をもつて申されけれはつゝみ判官ちんぜん
とて夜を日についてはせ下る兵衛の佐しやつに目
な見せそあひしらひなせそとのたまへ共日ことに　」五〇ウ

兵衛の佐のたちへむかふ終にたいめんなくして都へ
帰り上りける後には稲荷のへんなる所にいのち

はかり生て過しけるとそ聞えし木曾の左馬のかみ
平家の方へ使君を奉つてみやこへ御上候へひとつ
になつて東国せめんと申たれは大臣殿はよろこ
はれけれ共平大納言新中納言さこそ世末て候共義
仲にかたらはれて都へ帰入せ給はん事然べうも候
はす十ぜん帝王三じゆのしんぎをたいして渡らせ
給へは甲をぬき弓をはついてかう人に是へ参れと
仰候べしと申されけれは此様を御返事ありしか
共木曾もちゐ奉らず松殿の入殿殿木曾をめして
清盛公はさばかりのあく人たりしかともきたいの
大ぜんごんをせしかは世をもおたしう廿余年たも
ちたりし也さやうにあくぎやうはかりで世をた
もつ事はなき物をさせるゆへなくとゝめたる人々
のくはんともみな返すへきよし仰られけれはひた
すらのあらゑびすのやうなれともしたがひ奉つて
げくはんしたる人々のくはん共ゆるし奉る松殿の
御子もろいゑのとのゝ其時は未中納言の中将にて

」五一オ

ましくけるを木曾がはからひに大臣摂政になし
奉る折節大臣あかさりけれは徳大寺の左大将しつ
ていこうの其比内大臣でおはしけるをかり奉て内
大臣になし奉るいつしか人のくちなれはしんせつ
しやうもろ家の殿をばかるの大臣とそ申ける同き

」五一ウ

十二月十日法皇は五条の内裏を出させ給ひて大
ぜんの大夫成忠か宿所六条西のとうゐんへ御幸成
同き十三日歳末の御しゆほうありけり其つゐでに
叙位ぢもくおこなはれて木曾かはからひに人々の
くはん共思さまになしおきけり平家は西国に兵衛の
佐は東国に木曾は都にはりおこなふたとへば前
かん後かんの間にわうまうが世をうつとつて天下
三つに別れぎしよくごとかうせしがことしあふな
ながら年暮て寿永も三年になりにけり

平家物語巻第八終

」五二オ

（遊紙）　」五二ウ　八坂板平家物語　共十二冊（手書き）　」表紙裏

（遊紙）　」五三オ　（遊紙）　」　一オ

（遊紙）　」五三ウ　（遊紙）　」　一ウ

平家物語巻第九目録

こてうはい
いけずきの沙汰
宇治川
河原かつせん
木曾のさいご
ひぐちがきられ
六ケ度合戦
せいそろへ
らうば
一二のかけ
梶原が二度のかけ

」　二オ

坂おとし
もりとしがさいご
たゞのりのさいご　あつもりのさいこ
しげひらのいけとられ
ともあきらのさいこ
をちあし
小宰相の身なげ
」　二ウ

平家物語巻第九
小朝はい
じゆゑい三年正月一日ゐんの御所は大ぜんの
だいぶ成忠か宿所六条西のとうゐんなりければ
御所のていしかるべからすとてはいらいなしゐん
のはいらいなけれは内裏の小でうはいも行は
れす平家はさぬきの八島にてはるをむかへ年の
始なりけれとも元日元三のぎしきことよろしか
らすしゆしやうわたらせ給へともせちゑも行な
はれず四はうはいもなしはらかもそうせず吉野の
くずもまいらすひのためしも奉らす世みたれたり
しかとも都にてさすかかくはなかりし物をとの　」　三オ
給ひあへるそいとおしきせいやうのはるもきたり
うらふくかせもやはらかにいそべものとかになり
ゆけとも平家の人々はいつもこほりにとぢこめ
られたる心ちしてたゝかんくてうにことならす
とうがんせいがんのやなぎちそくをましへなん
しほくしのむめかいらくすでにことにしてはな
のあした月の夜しいかくはんけんまりこゆみ
あふぎあはせゑあわせくさつくしむしつくしかや
うにさま〳〵けうありし事ともを思出かたり
合てながき日をくらしかね給ふそあはれなる
いけずきのさた
同き正月十日きその左馬のかみよしなかを院の　」三ウ
御所へめされて平家ついたうのために西国へはつ
かうすへきよし仰くださるきそかしこまつて承り

同き十三日に門出してずてにうつたゝんとし
ける所にとう国よりさきの兵衛のすけよりとも
きそからうぜきしつめんとて数万ぎの軍兵をさし
上せられけるかみの、国伊勢の国につくと聞え
しかはきそ大きにおとろき門出はかりにて西国
げかうはととまりつゝ宇治せたのはしをひいて軍
兵ともをさしつかはすきそは其ころ三千よぎと
聞えしかはう〳〵へわかちつかはして折節せいこ
そなかりけれまつひぐちの次郎かねみつに五
百よきをさしそへてをぢの十郎蔵人行家河内
のくに長野のじやうにありと聞てせめさせんと
てつかはしぬ今井の四らうかねひらに七百よき
をあいそへてせたへおう手にこそむけられけれ
にしな高なし山田の二らう五百よきにてうぢへ
からめてにこそむかひけれしだの三郎せんしやう
よしのりほうとうの三らうよしひろ三百よきにて
よどをふせぎにむかひけりとうこくよりせめ上る

」四オ

大将軍にはかばの御ざうしのりより九らう御ざう
しよしつねむねとの大名三十よ人つかうそのせ
い六万よきとぞきこえけるそのころかまくら殿に
はいけずきするすみとてきこゆるめい馬あり中
にもいけずきはくろくりけなる馬のふとうたくま
しきか馬をも人おもよせたてずあたりをはらつて
くいければいけすきとは名付られたりたけは
八すんの馬にてそありけるかばの御ざうし九郎
御さうし此馬をしよまふありけれともかなはす
かぢ原源太かけすへ参つて此むまを申けれはかま
くら殿宣ひけるは是はよりともかしせんの時物の
具してのるべき馬にたのんてあれはかなふま
し是もおとらぬむまなれはとてするすみおそ給は
りける又ささき四郎高つな参つて此馬を申け
れはかまくら殿のたまひけるは人々の申されつ
るにも又かち原源太かけすゑか申つるにもたは
さん也たゝし御へんの父さゝきのけんさうひてよ

」四ウ

」五オ

しはこさまのかうの殿の御いとおしみあさからざ
りきされば保元平治両度の合戦にさきをかけたり
し人なりあひついて御へんの奉公しんへうに候今
度宇治かはをはこのむまにのつてわたさるべし
とていけずきをこそたふたりけれさゝきしやうか
いの面目これには過しとよろこびて御前をまかり
立て出けるかいかゞは思ひけん又立帰り今度高つな
うぢかわにてしんたりときこしめされ候はゝは
や人にさきをせられてけりとおほしめされ候へ
しいきたりときこしめされ候はゝせんぢんは定而
したるらん物をとおほしめされ候へしと申切て
出けれはあつはれくわふりやうの申やうかなと　」五ウ

そ宣ひけるさる程にをの〳〵かまくらを立てあし
がらをへて行もありはこねにかゝる人も有心々
にのぼる程ににするかの国うき島か原にかかつて
かぢ原げん太かけすへ高き所にうちあかりしばし
ひかへておほくの馬ともを見けるにき千万といふ
数をしらす思々のくらおかせ色々のしりかひかけ
させてあるひはのりくちにひかせあるひはもろく
ちにひかせひきとをし〳〵しける中にもかげす
ゑかするすみにまさる馬こそなかりけれとよろ
こふてしつかにあよませ行ところにはるかに
ひきさかつて佐々木いけすきにきんぶくりんの
くらをかせこふさのしりかひかけさせてとねりあ　」六オ

またにひかせつゝさしもにひろきうきしまかはら
を所もなげにをとらかさせしらあはかませちう
にかけつて出来るけいきあたりをはらつてそみえ
たりけるかぢはらいけすきか上りけるよやあそれ
はたか御馬そささき殿の御馬候ささきは三郎どの
か四郎殿か四郎殿の御むま候とてひきとをす
かぢはらこはいかにかけすゑか申つるにはたは
て佐々木にたふつる事こそいこんなれ我今度都
にのぼりきそとのの御うちに四天なうと聞えつる
今井ひぐちたてねの井にくむかしからすは西

国にくだり平家のかたにさしもおにかみのやう
にきこえたるゑつ中のせんじもりとし次郎　」六ウ

ひやうゑもりつきかつさのあく七兵衛かげきよに
くむかのと殿にくみ奉らんとこそおもひしに
佐々木に思ひかへられ奉つていくさして死なんと
はる〳〵と京へのほつてせんなしせんするところ
こゝにてささきとひつくんてさしちかへはぢ有
さふらひ二人しんてたゞいま大事をかゝへ給ふか
まくら殿にそんとらせ奉らんとつふやいてあひ
まつ所に佐々木やう〳〵ちか付たりかぢはらを
しならへてやくむべき又むかふさまにあてゝ
やをとさんとおもひけるかまづことはおそかけた
りけるいかに候ささき殿いけすき給つてとなふ
佐々木あつはれ此じんもいけすきをしよまう申　」七オ

物をとかねてこゝろへてけれはすこしもさはかず
につことわらひいけずきをは給はらぬそとよずい
ぶん人々の申されつるにもたはさんなれは高つな
なんどか申すともよもたまはらし申て又給は
らざらんはむねんなるべしよし〳〵かかる天下の
大事に主の御馬や物の具なんとぬすみたらんは
少もくるしかるましきつくわいの仰をは後日に
こそかうむらめと思ひてたたんとしつるあかつき
とねりおとこに心を合てぬすんてのぽるそかぢ
原殿といひけれはかぢはら此ことばにはらがゐ
てねつたひさらはかけすゑもぬすむへかりつる物
をとてどつとわらつてそのきにける　」七ウ

うぢがは

さる程に源氏六万余騎をおはりのあつたより大
手からめて二手にわけてそ上られけるまつ大手
の大将軍にはかばの御ざうしのりよりあいした
かふ人々にはたけ田の太郎のふよしかかみの次郎
とをみつその子の小二郎長きよ一条の二郎忠
よりいたかきの三郎かねのふゐさははの五郎

のぶみつへん見の兵衛ありよし安田の三郎よし
さださふらひ大将にはといの二郎さねひらちや
くしの弥太郎とをひらいなけの三郎はんかゑ
の四郎もりの五郎平山のむしや所すゑしげを
さきとしてつかうそのせい三万五千よき近江の　」八オ

国のちしの原にぢんを取からめての大将軍には
九郎御ざうし義経あひしたかふ人々にはたしろ
のくはんしやのふつな大うちの太郎これよし侍大
将には畠山のしやうし次郎しげたゝ同き長野の
三郎しげきよかわこえの太郎しげよりしそく小
太郎しけふさしぶやのしやうし重国其子の右馬の
せうしげすけ梶原源太佐々木の四郎熊谷の二郎
なをさねしそく小次郎なをいゑかすやの藤太いの
またの小平六のりつなをさきとしてつかう其せい
二万五千余騎伊勢の国をとをり伊賀の国をへつゝ
宇治はしのつめにそをしよせたりあんのごとくは
しをそひゐたりけるむかいのきしにはらんく　」八ウ

いうつてかいたてかき水のそこには大つなはへさ
かもきつなひて流しかけたりけれは岩なみおひた
たしうたきなりしせまくらしきりにみなきつてさ
かまく水もはやかりけりまた卯のこくの事なれ
ば河きりふかく立こめて馬のけも物の具のけもさ
たかにはみえざりけりころは正月廿日あまりの
事なれはひらのたかねしがの山むかしながら
のゆききへに谷々のこほりとけあひてみつかさ
はるかにまさりたりふねならてはたやすくわたす
へしともみえさりけりかかりける所かに九郎御
さうし義経人々の心をみんとや思はれけん川の
はたにうちのそんていかにや殿原水のひんをや待　」九オ

べき又よといもあらいへやまわるべきとの給ふ所
に武蔵の国の住人畠山のしやうし次郎しげたゝ
しやう年廿一になりけるかすすみ出て申ける
はこは御ちやうともおほえ候はぬものかな此かわ
の御さたは鎌倉殿の御まへにても候ひつる物をひ

ごろもなきうみ河かけふはじめて出来も候はゝこそゆらへて水のひんをも待せ給はめ此川は近江のみつうみのすゑなれはまつとも〳〵水ひましはしをは又たれかかけてまいらせ候べき去ぬる治承の合戦にあしかがの又太郎忠つなか十七さいにて爰を渡しけるはおにかみにてよも候はし今度はしげたゞせふみ仕候はんつけや武蔵の殿原とて」　九ウ

たんのたう五百余騎くつばみをひし〳〵とならぶるところにひやうとうゐんのうしとらたちばなの小島かさきむすふの明神の御前よりむしやこそ二き出来れかたき味方あれはいかにと見る所に一騎は梶原源太一きは佐々木四郎きこゆるいけずきするすみにのりつれてひつかけ〳〵出来り人目には何ともみえねともたかひにさきをあらそひけるかかぢはら佐々木にゆんだけばかりそすゝむたる佐々木かなはしとや思ひけんなふいかにかぢはら殿東国てはとね河西国ては此河をこそ日本一二の大川とは申せ中にも此川はうへもしたもはやふて馬のあしすくなし梶原殿の馬のはる」　一〇オ

ひのはるかにのひてさうそ川中にてくらのりかへしあやまちし給ふなしめ給へ〳〵といはれてかぢはらさもやあるらんと思ひたつなをはゆがみにうちおきゆつるをくはへ左右のあふみふみすかしはるひをとひて二しめ三しめひつしめ〳〵しけるまに佐々木一むちあてゝ川へさつとそうちいれたる梶原扨はたばかりけるよそのきならは一度てもたばからるましきそとておなしうつゝいてうち入たり河中まてはたかひしをとらすわたしけるか佐々木はいけすきと申す世一の馬にはのつたり川のあんないはしつたり馬のあしにかゝる大つなをは太刀をぬゐてふつ〳〵とうちきり〳〵」一〇ウ

さしもにはやきうぢがはなれども一もんじにさつとわたいて思ふ所にうちあけたり梶原もつゝいて

わたしけるか大つなに馬のりかけのためかたに
をしおとされはるかの下へそうちあげたる扨こそ
宇治かわのせんじん佐々木二ぢん梶原と日記に
はしるされたれ佐々木四郎高つなたかき所にうち
あかりむちにてよろいの水なてくだしあふみふん
ばりつつ立上り大をんしやうをあけて是はうたの
天わうより十一代の後いん近江の国の住人佐々木
の源三ひでよしか四なん四郎高つな今度宇治川
のせんぢんそやとそ名のつたるけしきまことに
あたりをはらつてそみえたりける畠山もつゝいて　」一一オ

渡しけるかむかひのきしより山田の次郎かよろひ
いていける矢に川中にてむまのひたいをのぶ
かにいさせて馬こらへずびやうぶをたをするやう
にかつばとまるびければ畠山かなはしとやおもひ
けんゆんつくにすかり川中にそおりたつたる
岩なみしきりかにかふとのてつさきにあたつて
おしあげ〳〵しけれとも事共せず水のそこをく
くつてむかひのきしにわたり付く畠山かうしろ
におもきものゝ取つきけれは何物やらんとふりむ
ひて見けるに大のおとこのおもよろいきたりける
かながれかかつてとりついたりはたけ山御へんは
たそこれは大くしの次郎しげつな候あまりにゑせ　」一一ウ

馬にのつて候へは川中にてをしおとされな
かれかかつてみたちにとりつきまいらせて候た
すけ給へといひけれは畠山かしこふあまちしつ
らふいつも御へんたちをは重忠こそたすけ申さん
ずれといふまゝにめてのかいなをさしいだし大
くしかよろいの上おびあけまきともにとりぐし
てちうにさしあけ二ふり三ふりうちふつてきしの
上へそなけ上たる大くしちうにて太刀をぬきまつ
かうにさしあて大おんじやうをあけて是は武蔵
の国の住人おゝくしの次郎たいらのしげつな今度
宇治川のかちわたりのせんちんそやとそ名のつた
るかたきも味方も一度にとつとそわらひける其後　」一二オ

畠山のりかへにのつて川中にて馬のひたいをい
させつる山田の次郎に目をかけて三じやく五すん
ありけるかうひらといふ太刀をぬき山田にうつ
てかゝる山田もぬき合てぞうちやうたる畠山は若
むしや山田はおひむしやなりければはたけ山に
きりたてられてうけ太刀にこそなりにけれい
かゝはしたりけん山田かうけはつす所をゆん手の
肩よりめてのわきへかけすきつてそおとしける
これをはじめとして二万五千余騎の兵どもみなう
ちいれてそわたしけるさしもにはやきうぢがは
なれとも馬人にせかれて水はかみそそたゝへ
たるさう人原はむまのした手にとりつき〳〵わ」一二ウ

たしけるかひざよりかみをぬらさぬ物もおほかり
けりしぶやの右馬のせうしげすけ梶原平次佐々木
五郎かすやの藤太いのまたの小平六熊谷おや子は
馬をのりはなちゆんづゑをついてはしのゆきげた
をそわたりけるむかひのきしより矢さきをそろへ
てさしつめ引つめ射けれどもこれら事共せず甲
のしころをかたぶけよろひの袖をまつかうにあ
てゝせめたゝかふ木そ殿のいゑの子なかせの判官
代重つなもそこにてうたれぬ宇治の手かためたる
五百余騎のつはものともさん〳〵にかけなされこ
わた山ふしみをさいてそおち行けるるせたをは
いなげの三郎重成かはからひにて田上のくごのせ」一三オ

をこそ渡しけれ今井の四郎かねひら七百余騎て
ふせぎたゝかうといへともたせいにぶせいかなは
ねばせたも程なくやふれにけりうぢせたやふれ
にけれはひきやくをもつてかまくらへかつせん
のしたいをこそ申されけれ鎌倉殿まづつかひに
佐々木はいかにと御たづねありけれはうぢがはの
せんぢん候とぞ申ける

河原合戦

木曾はうちせたやぶれぬと聞えしかはゐんの御所
六条殿に参法皇を取奉て西国に下り平家と一つ

に成て兵衛のすけうたんとて力者廿余人をすくつ
てゐんの御所六条殿へはせまいられけるかかたき　」一三ウ

すでに河原をもてまてみたれ入たるよし聞えしか
はとつて返し六条高くらなるところにひころ
見はじめたる女房のありけるか立依てさいごの名
残おそおしみけるこゝにゑちごの仲太光家とて今
参りの候ひけるかかたきすてにかわらおもてまて
みたれいつて候にさやうにうちとけさせ給ては
たじにをさせおはしまし候ひなんすはや〳〵うつ
たゝせ給へと申けれとも木そなをいてやり給は
ねはさ候はゝ光家にはいとまたひ候へまつさき
たちまいらせて死出の山にてこそ待まいらせ候は
めとてはら十文字にかきやふつてぞうせにける
木曾是は義仲をすゝむるじがいにこそとてやがて　」一四オ

もの丶ぐしてそうつ立れける上野の国の住人那波
の太郎ひろすみさきとして其勢二百余騎には過
さりけり川原おもてにうち出て見給へはけにも東
国の大勢うんかのごとくにみち〳〵たり中にも
あら手のむしやとおほしくて五十きはかりすすん
たりことにむしや二きすすんたり一きはてつし
かわらの五三郎ありなふ一きはしほのやの五郎
これひろなりてつし河原か申けるはこゝに
ひかへて後ぢんの勢をやまつべきと申ければ
しほのやか申けるは一ぢんやぶれぬれはざん
たうまつたからすといへり只かけよやとておめい
てかく木そ殿其せい二百余騎馬のはなをならへて　」一四ウ

大勢の中にかけいり西よりひがしへ一わたり
北よりみなみえ一わたりとつてはかへしわつて
はとをりさん〳〵にたゝかひ一はううちやふつて
出たれは五十きはかりになりにけりされは木そ
うたれんとせし事度々にをよぶかたきもこれをみ
てありかたき大将軍かなとそほめにける九郎御
さうし義経は宇治の手おひおとして上られける

かまづ御所のおほつかなけれはとてしう〳〵六き
院の御所六条殿へはせ参られける御所には大前
の大夫成忠ひんかしのついかきのうへにのぼり
わななく〳〵見わたせは武者五六きのけ甲に成て
射むけの袖をはるかせにふきなひかせくろけふり
をけ立てはせ参るを見つけてあはや又木曾か参り
候ぞと申たりければ法皇を始奉つてくきやう殿
上人つぼねの女房たちに至るまて今度そ世のうせ
はてなるべしとて手をにきり立ぬくわんもまし
まさずなりたゝよつてみていゝやこれは木そにて
は候はすかさしるしのかはつておほえ候いかさま
にも今日参る東国の源氏ともとおほへ候と申も
はてぬに九郎御ざうし義経御所のそうもんに
うつたつて大をんじやうをあけてかまくらの兵衛
のすけ頼朝か弟九郎くはんしやよしつねうぢの手
をいおとしてまいりたるよしを申させ給ふへう
もや候らんと申たりければなりたゝ此よしを
」一五ウ

」一五オ

聞ていそぎついかきよりとぶ程にあまりにあわ
てゝこしをつきそんしてけりされ共うれしさに
いたさをわすれはう〳〵御ぜんに参り此よしを
そうし申たりければ法皇なのめならず御かん
あつてさらばもんをひらひて入よとそ仰けるなり
たゝそうもんをひらいていれたりけり大将軍九郎
御ざうし義経その日のしやうそくにはあかちの
にしきのひたゝれにくれなゐすそごのよろひをき
くわがたうつたる五まいかぶとのおをしめ金作の
太刀をはき廿四さいたるそめばの矢をひしげとう
のゆみのとりうちのもとをだんじを一寸にか
かせ五ぶんにたたんて左巻にまいたるそ大将の
しるしとはみえし残り五人も物のくこそ色々なり
けれともつらたましいことから大将にはをとらす
法皇は中門のれいじよりゑいらんあつてゆゝしげ
なるものともがありさまかな一々になのらせよと
おほせけれはなりたゝうけたまはつて一々に名乗
」一六オ

せける一人は大将九郎よしつね一人は近江の国の
住人佐々木の源三ひてよしが四なん四郎高つな一
人は武蔵の国の住人畠山のしやうししげよしか子
次郎重たゝ一人は河越の太郎しげよりか子小太郎
しげふさ一人はさかみの国のぢうにんかぢはら平
三かけときが子源太かげすゑ一人はしぶやのしや
うししげ国か子右馬のせうしけすけ候とめん〳〵
」一六ウ

になのつてかしこまる其後法皇太将九郎よし
つねを大ゆかちかふめされて事のしさいを御
たづねありけるに畏て申けるはさん候かまくら
の兵衛のすけよりとも木曾からうぜき承つてのり
よりよしつねに六万余騎の軍兵をさしそへての
ほせ候のりよりはせたより参り候かいまだみえ候
はすよしつねはうちの手をいおとしてのぼり候へ
はきそは二百騎ばかりにて河原おもてにみえ候ひ
つるをいくさはつはものともにせさせよしつねは
まつ此御所しゆこのためにはせ参りて候いまは

さだめて木曾をはうつとり候ひぬらんと世に事も
なげに申されたりけれは法皇なのめならす御かん
」一七オ

あつてさらばなんぢやがて御所中をしゆごし奉れ
とぞ仰けるよしつねかしこまつてうけ給はりしう
〳〵六騎御所の惣門に打立て君をしゆこし奉る是
をはじめとして十騎廿騎五十騎百騎はせ参る程
にほとなふ一万余騎になつて御所の四門をかため
てしゆごし奉りけるにそ法皇もあんどの御心つ
きおほしめす其外くぎやう殿上人つほねの女房た
ちに至るまて力づいてこそ思はれけれ木そはなを
もゐんの御所六条殿にまいり法皇を取奉て西国へ
とは思はれけれとも御所にも東国の大せい参り籠
りたるよし聞えしかは又五十余騎とつて返し大
せいのかたにかけむかひこゝをさいごとそたゝ
」一七ウ

かはれける木曾殿なみたを流てかゝるへしとたに
しりたらは今井を勢田へはやらさらましをよう

せう竹馬のむかしより死なは一所てしなんとこそ
ちざりしにところ〳〵にてうたれん事こそ
かなしけれさるにてもいま一度今井か行衛をたつ
ねんとて河原をのぼりにかけてゆくかたきおつ
かくれはとつては返しおつかくれはとつてはかへ
し六条河原と三条川原のあひだにて七八度こそ
かへされけれ五十騎はかりありつるせいも三十騎
はかりになりかりけりわつかなる小勢にてうん
かのごとくなりしかたきをおつはらい賀茂川さつ
とうちわたりあわたくちへそ出られける木曾はこ

」一八オ

ぞしなのを出しには五万余騎と聞えしかけふ四の
みや川原をすくるにはしう〳〵七騎になりにけり
まして中うのたひのそらおもひやられてあはれ
なり七騎かうちの一騎はともへといへる女なり

木曾のさいご

木曾はともへやまぶきとて二人の女をめしつかは
れけりやまぶきはいたはりあつて都にとゝまりぬ
中にもともへは廿二三のをんななりまことにいろ
しろくかみながくかたちよかりけるかありかたき
あら馬のりの大力あくしよおとしの上手なりけれ
ば木曾いくさのあるたびことによきよろひきせよ
き馬にのせ大太刀つよゆみもたせて一はうの大将

」一八ウ

にさしむけられけるに一度もふかくはせざり
けりされはおほくの兵とも落うせうたれけれとも
ともへはいまだうたれす木曾は長坂をへて丹波ぢ
へとも聞ゆ又りうげこへにかかつて北国へおつ共
聞えけりされとも木曾は今井か行衛をたつねん
とて勢田のかたへと行程に大津のうちてのはま
にうち出て東へ馬をそあゆませけるいま井の四郎
兼平は七百余騎にて勢田へむかふたりけるがその
せいおちうせうたれ百騎ばかりになつてはたをば
まいてもたせしうのゆくゑのおぼつかなさにとつ
てかへし都をさいてのぼるほどにうちでのはま
にて木曾殿を見付あわひ一町ばかりよりたかひ

」一九オ

にさぞと見てんけれはりやうはうこまをはやめて
よりやうたり木曾馬うちならべ今井か手をとつて
義仲六てう河原にていかにもなるべかりつるを
なんぢかゆくゑのおほつかなさにおほくのかたき
にうしろを見せてこれまて来れるなりとの給へ
は今井なみだをはら〳〵となかひて兼平もせたにて
うちじに仕べう候ひつるを御行衛のぼおつかな
さにこれまて参りて候と申たりけれは木曾さては
契りはいまたくちせざりけりとてよろひの袖をそ
ぬらされけるよしなかかはたさしは六条河原にて
うたれぬ兵共さんりんにちつて此へんにもさだめて
ひかへたるらんなんぢかはたをあげてみよかしと　」一九ウ

のたまへは今井うけたまはつてまいてもたせたり
けるしらはたといてばつとさしあげたりければ京
より落たるせいどもなく勢田よりちつたる勢い共
なく今井かはたをみて五騎十騎つゝはせ参る程
にほどなふ五百余騎にぞなりにける木曾うれしき
ものかなこのせいあらばなどかさいごのいくさ一
軍せざるべきあれにしぐらふでみえたるはたが手
やらんかいの一てう殿の御手とこそ承り候へせ
いはいかほとあるやらん七千余騎とこそ承れ木曾
さてはかたきもたせいにてあんなれはあの大せい
のなかへかけ入てうち死せん事よとそよろこはれ
ける木曾どのゝその日のしやうそくにはあかぢ　」

二〇オ

のにしきのひたゝれにうすかねといふからあやお
どしのよろひをきくわがたうつたる五まい甲のを
をしめ金作の太刀をはき廿四さいたるいしうちの
矢のその日の軍にいすてゝせう〳〵のこつたり
けるをかしら高にをふまゝにぬりごめとうのゆみ
のまんなかもつて木曾のおにあしげとてきこゆる
馬のふとふたくましきにきんふくりんのくらをお
いて打のり大ぜいのかたにかけむかひあぶみふん
ばりつつたちあかり大をんじやうをあけてひころ
はをとにもきゝけん木曾のくはんじや今は目にも

見るらん左馬のかみけんいよのかみあさひの将軍
みなもとの義仲ぞかたきは一条の次郎とこそきけ」二〇ウ

よし仲うつとつてけんしやうかうむれやとそなの
られける一条の次郎此由をきいてたゝいま名乗は
大将木曾義仲そあますなもらすなうてやとておほ
せひかまんなかにとりこめてわれうつとらんとそ
すゝみける木曾殿そのせい五百余騎大勢の中に
わつて入たてさまよこさま四かく八方へかけては
やふりかけてはやふりはんじがほとさん〳〵に
たゝかふてうしろへつゝと出たれば百騎はかり
になりにけりそこをやぶつてしはらく人馬のいき
をやすめつゝ土井の次郎さねひらか二千騎ばかり
でさゝへたりける所をかけわつて出にけりされば
木曾うたれんとせし事度々にをよぶ其外あそこに」二一オ

は四五百騎爰には二三百騎百四五十騎百騎か中
をかけわり〳〵出たれはしう〳〵五騎にそなりに
ける五騎かうちまてもともへはいまだうたれざり
けりともへあつはれよからんかたきかなさいごの
いくさして見せたてまつらんとあひまつところに
武蔵の国の住人おん田の八郎為重とてをよそ三十
人か力もつたるかうのものありかれがらうどうに
むかつてまことや木曾前の御内にともへとて女
武者のあん成そたとひ心こそたけくとも思ふに何
程の事かあるべきおなしうはくんていけどらん
と思ふなり我くむと見はなんぢらすきをあらせす
おちあへとてかしこゝをかけまはり〳〵みける」二一ウ

にねりぬきにむめのたちゑぬふたるひたゝれに
もよぎにほひのよろいをきくわかたうつたるかふ
とのをゝしめあしじろの太刀をはき十八さいたる
そめばの矢をい二所藤のゆみもつて月けなる馬
のふとふたくましきにきんふくりんのくらをひ
てのつたりける武者を見つけおん田これやそなる
らんとさしうつふひて見ければかねくろにう

すけしやうおそしたりけるおん田さればこそと思
ひゆん手のかたをうち過るていにもてなしあひ
つけよつてむすとくむともへこれをきつと見てめ
手のかひなをさし出しをん田かよろひのむないた
たまかけほねにとりぐして中にさしあけ二ふり　」二二オ

三ふりうちふつてくらの前わにおしあてゝちと
もはたらかさすさしも聞えたりつるをん田かくび
しやねぢ切てすててけりらうとうはこれをみてお
ちやうに及はねはみなちり〳〵にこそなりにけれ
其後木曾ともへをめしていほくまてかたきうしろ
をみすべきなれは義仲は只今これにてうち死せん
と思ふなりなんちはこれよりいつかたへも落行
へしとのたまへはともへこはくちおしき事をも
の給ふ物かないつくまても御供仕るべきよしをそ
申ける木曾なんぢか心さしのほどはうれしけれ
どもゆみ矢とりのさい後の所にて女のしにたらん
はこう代のきこえあしかるべしたゝ是より何方へ　」二二ウ

もあしにまかせて落ゆき義仲か後世とふらふてゑ
させよそれそさいごの供したりとも思ふへしとの
給へはともへかさねて申けるはこぞしなのを出し
より以来大小事合戦にあふ事廿よ度かた時
はなれまいらする事もさふらはさりしに今御
さい後を見すてていつくをさして落行べきそや
とてよろひの袖をかほにおしあてゝなくより外の
事はなし木曾さるにてもとう〳〵とのたまへは
ともへちからをよはす粟津の国ぶん寺のみだうの
まへに物の具ぬぎおき太刀わきはさみひんかし
おさしておつるとそみえし行かたしらすそ
なりにける手づかの太郎はうち死す手づかの別　」二三オ

たうはいた手おほて勢たの方へそ落行ける今は
木曾と今井とばかりなり木曾殿今井にむかつ
て宣ひけるは日比は何とも思はざりつるうすかね
かけふはなとやらんおもう成ておほゆるそとの給へ
ば今井いまだ御馬もつかれ候はす御身もよはらせ

給はねは何事によつてか一りやうの御きせなかのおもふはならせ給ふべきいまは味方につゝく御せいも候はねは御心ほそきにてそ候らん兼平一騎をは余の武者千騎とおほしめされ候へしと申たりければ木曾大きにいかつて義仲六条河原にていかにもなるへかりしをこれまて落来てなんち一所にしなんいのちの何事によつてかおしうて」二三ウ

おくすべき其儀ならはうち死せんとて又懸出んとし給ひけるを今井いそぎ馬よりとんており木曾殿の御馬のみつつきに取付奉てゆみ矢とりは日比いかなる高名候へともさいごの所にてあしう候らへばなかきすにて候なり此日比日本国に聞えさせ給ひたる木曾殿をばそんぢやうその国のたれがしからうとうの手にかけてうちまいらせたりなんといはれん事こそくちをしけれあれにみえて候をば粟津の松原と申候あの松の中へいらせ給ひてしつかに御ねん仏候へて御じがい候べし兼平かゑひらに矢七つ八ついのこして候へはふせぎ矢におゐては仕らんする候とて御馬のはなを取」二四オ

てしきりにおしむけ〳〵しければ木曾力及給はすあはつの松をさしてそ落られけるころは正月廿一日入あひはかんの事なれはあはつのまつもかすみくれぬま田にうすこほりのとぢふさがりたるをしらすしてぬまへ馬をうち入あをれども〳〵うてとも〳〵はたらかず木曾はなをも今井か行衛のおほつかなさにうしろをかへり見給へは今井馬ひきよせうちのつて大勢のかたにかけむかひあぶみふんはりつつたちあかり大をんじやうおあけて是はしなのゝ国の住人木曾のごんの仲三かねとをか子木曾殿の御めのと子今井の四郎かねひらとて鎌倉殿まてもしろしめされたんなるそかね平」二四ウ

うつ取てけんしやうかうふれやとそ名乗けるかたきのかたには此よしを聞て只今なのるは今井の

四郎かねひらそあれいとれやいとれとてさしつめ
ひきつめさん〳〵にいけれ共よろひよけれはう
らかゝすすき間をいねは手もおいすいまゐもし
しやうはしらねとも八つの矢にてかたき八騎そい
おとしける爰にさかみの国の住人三うらのいし
田の次郎もろひさと名乗て木曾殿を目に懸奉り
やころにはせちかづき三人はりに十三そくの中
さしとつて打つがひよろひいてひやうと射る折節
ふりあほのき給へる内甲をしたたかにいさせて
いた手なりければかぶとのまつかうをくらの前

」二五オ

わにをしあてうつふしておはしける所をいし田
がらうとうあまたおちやうて木曾殿の御くびをは
給てけりさてくびを太刀の切さきにさしつらぬ
きたかくさしあけ大おんしやうをあげて此日比
日本国に聞えさせ給ひたる木曾殿をはさかみの
国の住人みうらのいし田の二郎もろひさかかう
こそうち奉たれやとそ名のりける今井此由を聞
て今はたれをかははんとていくさをもすべきいか
にとう国の人々かうの者のじがいするを見て手本
にせよやとて馬のうへにてよろひのうわおび切
てのけはら十もんじにかきやふつたりけれ共
なをも死なれさりければ太刀のきつさきをくちに

」二五ウ

ふくみ馬よりさかさまに落つらぬかつてそうせ
にける木曾殿は三十一今井の四郎三十三木曾と今
井かうたれてそ粟津の軍はやふれにける

ひぐちかきられ

さる程に今井かあにひくちの次郎兼光は木曾殿
のおち十郎蔵人行家河内の国長野のじやうに有
と聞てせめんとて五百余騎てむかふたりけるか
十郎蔵人長野をは落てきの国名草にくだつてを
はしけるをひぐちつゝいてせめけるかみやこにも
いくさ有と聞てそれよりとつてかへしてのぼる程
に今井が下人のおとこどもひくち殿に此由申さん
とて河内をさしてくだりけるによどの大わたり

」二六オ

のへんにて行あふたりひくちの次郎扨いかにや
といひけれはさん候都には軍出来て君はゆふべあ
はつの松原にてうたれさせおはしまし候ひぬ今井
殿は御じがいと申すひぐちの次郎うちうなづき
なみだをはら〳〵と流て今はかうこさんなれ是きゝ
給へや人々君に御心さし思ひあはれむする人々
は兼光を大将として都にのぼりうちじにし給ふ
へし又いのちおしからんするともがらはこれより
何方へも落行べしかねみつはうちじにして
めいどにて君の御げんざんに入今井おも見候はん
といひければあるひは馬にものかうあるひはかふ
とのおゝしむるなといふて五騎十騎つゝ落ゆく程
」二六ウ

に東寺よつつかのへんにてはひぐちが勢わづかに
廿余騎にそなりにけるひくちの次郎けふすでに都
へ入と聞えしかはたうもかうけも東寺四つつかに
はせむかふ爰にひぐちかせいの中にち野の太郎
光ひろといふものあり大勢のかたにかけむかひ
あぶみふんはりつつたちあかり大おんしやうをあ
けてこれにかひの一条殿の手の人やましますと
のゝしつたりければかたき味方とつとわらつて
こはいかに一条殿の手にてなきはいくさはせられ
ぬ事かといひけれはみつひろさにはあらすこれ
はしなのゝ国すわのかみのみやにすまい仕るち
野の大夫光家か子にち野の太郎光ひろと申
」二七オ

者にて候なり又おとゝにて候ちのゝ七郎はかい
の一条殿の御内に候なり光よしが子とも二人す
わのかみのみやに残りとゝまつて候かわかうたれ
さるよしを聞て我がちゝはよふてや死にたるらん
あしうてやうたれたるらんとてなけかん事かふ
びんさにおなしうは七郎かまへにてうちじに
してかたらせんとおもふ為にこそあれまことは
かたきをはきらふましとて矢たはねとひてをし
くつろけさしつめ引つめさん〳〵にいけるに
矢にわにかたき三騎いおとし其後矢だねつきぬ

れはうち物のさやをはついてさん〳〵に切てま
はりけるかかたき二騎切ておとしかれ是五騎うち　」二七ウ
とつて六人にあたるかたきにをしならべひつくん
でおちさしちかへてそ死にけるかたきもこれを
見ておしまぬものこそなかりけれさる程にひぐち
の次郎兼光をは日比こたまたうのなかへむこに
取てそもてなしけるこたまたういひけるはゆみ矢
とりのひろき中へ入といふはかゝらん時一間との
いきおもやすめ又はいのちたすからん為にこそ
あれいさやひぐちかいのちをたすけんとてひぐち
がもとへし者を立て日比は今井ひくちと聞えさせ
給ひしかとも何かくるしかるべきかうにんになり
給へ我等がくんかうのしやうに申かへていの
ちたすけ奉らんといひ送つたりけれはひくちの　」二八オ
次郎ひごろはさしものつはものなれ共うんやつき
けんゆみをはつしかぶとをぬひてかう人にこそ
なりにけれ大将軍へ此由を申範頼義経ゐんへ
そうし申されたりければすでにたすけらるべ
かりしをかたはらの公卿殿上人つぼねの女房たち
の申あはれけるはあなあさまし木曾かこぞのふ
ゆほうぢう寺殿へよせて御所に火をかけおほく
の人々をほろほしたりし時は今井ひくちと名乗
つるこゑのみこそせしかさればそれらをたすけら
れんはくちおしかるへしいそぎ切らせ給はてと
くち〳〵に申あはれけるあひだ法皇ちからをよは
せ給はす又きらるべきにぞさだまりけるおなしき　」二八ウ
廿二日しんせつしやうをかひゑきせられてもとの
せつしやうこのゑ殿くはんちやくし給ふわつかに
六十日のうちにかへられさせ給へは未見はてぬ
ゆめのことしむかしあは田のくわんばくとのは御
よろこひ申の後七か日たにこそありけんなれ是
は六十日と申せともそのあひだにせちゑも有
ちもくも行はれきされば思出なきにはあらずと

そ人申ける同き廿四日木曾かかうへ大ちをわた
さるよたう五人とそ聞えしゐのうへの九郎長せの
判官代高なしのくはんじやねの井の小弥太今井の
四郎かねひらとそ聞えしひくちの次郎かねみつ
木曾かかうべの供せうと申すあひたあいずりの

」二九オ

ひたゝれにおりゑぼしきて木曾がかうべの供して
大ちをわたされけり明る廿五日五条西のしゆしや
かに引出し終にかうへをはねられけり今井ひ
くちたてねの井とて木曾か四天わうの其一なり是
らをたすけられんにはをやうこのうれへあるべし
とことに沙汰あつて切れけるとそきこえしつてに
きくこらうの国おとろへてしよこうはちのごとく
にをこつし時はいこうさきたつてかんやうきう
へ入といへともこううか来らん事をおそれてさ
いはびじんをもおかさす金銀しゆきよくをもかす
めすいたつらにかんこくのせきをまぼつてぜん
〳〵にかたきをほろほしつゐに天下をぢする事

」二九ウ

を゛給へりかんのかうそこれなりされば今の義仲
もらいてうにさきたつてみやこへ入といふとも
つつしんて頼朝かけちをだにもまたましかははい
こうかはかりことには世にしおとらじ物をぞ
人申けるさる程に平家は讃岐の八島におはし
けるか都には木曾うたれたりと聞えしかは大勢
引ぐしてつの国なにはかたへおしわたりふく原の
きうとにきよちうして東はいく田のもりを大手
のきどぐちとさだめ西は一のたにをじやうくわ
くにかまふ其あひふくはらひやうこいたやどす
まにこもれるせいつかう十万余騎とそきこえし
これは去年のふゆ備中の水しま播磨のむろ山

」三〇オ

二か度の合戦にうちかつて山やうたう八か国なん
かいたう六か国つかう十四か国をしたかへてめさ
るゝ所の軍兵共也かの一のたにと申すはくちはせ
ばくておくひろし北は山南はなきさきし高して
びやうぶをそはたてたるにことならす北の山の

ふもとよりうみのとをあさに至るまて大木をきつてさかもぎにひき大せきをたたんてしからみせりうみのとをあさには大ふねとも数千そうそはたてかたふけてかひたてとすじやうくわくの四方にはくらおき馬ともとゑはたゑにひつたてたりたかやくらをかひて上にもしたにも四国ちんせいの兵ども所もなくみち〳〵たりつねはたいこをうつて」三〇ウ

らんじやうす一ちやうのゆみのいきほひははん
月むねの前にかかり三じやくのけんのひかりは
秋のしもこしの間によこたえたり高き所にはあか
はたいく千万といふ数もしらすうつたてたりけれ
ばはるかせにもまれて天にひるかへるありさま
はみやうくわのもへのぼるにことならずかたきも
これをみておくしぬへうそおほえたる

六か度合戦

さる程に平家一のたにへわたり給ひて後わ四国
の者ともしたかひ奉らす中にもあわ讃岐のざい
ちやうら一かう平家をそむいて源氏に心をそか
よわしけかるかれらか申けるはわれら此日比平家」三一オ

にちうをいたしたれは今さら源氏へ参りたり共
よももちひ給はしいさや平家に一矢いてそれを
おもてにしてまいらんとて門脇の平中納言の
りもり越前の三位みちもりのとのかみのりつねふ
し三人備前の国しもつ井といふ所におはしける
おかれらせうせん廿余そうにとりのり肥前の国
にをしわたり下つ井のうらにをしよせてとき
をとつとそつくりける能登殿此由を見給ひて昨日
今日まて平家の馬のくさかりてまいらせたるもの
どもかけんしに心かわりしてけりにくし其儀なら
はあますなもらすなうてやとて矢たばねとひてを
しくつろけさしつめひきつめさん〳〵にい給ひ」三一ウ

ければこれら人目はかりの矢一つ射てのかんと
こそ思ひしに能登殿に手いたうせめられてかな

はしとや思ひけん又ふねにとりのり四国をさして
わたりける折節大風大波むかふてたちけれはあ
はぢの国におしうつりふくらのみなとにつき
にけり又此ところに源氏二人ありとそ聞えし一人
はあはちのくはんしや為ひさ一人は賀茂のくはん者
よしつぎとてこれらはこ六条の判官ためよしか子
なりあはさぬきのもの共かれら二人を大将として
ふくらのみなとにじやうくわくかまへてたてこも
るのと殿此よしを聞給ひてせうせん五十よそうに
とりのりあわちの国におしわたりふくらのみな」三二オ

とにおしよせてさん〳〵にせめられけれはあはち
のくはんじやうたれにけりかものくわんしやは
いた手おふていけどりにこそせられけれこれを
はじめとしてあは讃岐の者とも百三十余人かくび
切懸うつ手のきやうみやうをしまいて一のたに
へそまいらせられける又あはちの国の住人天野の
六郎たゝかけ是も源氏に心さしありけれはせう

せん五そうにひやうらうまいつみ物の具入河しり
をさしてそわたりけるかのと殿ふくはらにて此由
を聞給ひて小舟十そうはかりをしうかべておわ
れけるが西の宮のおきにてよせあはせ天野の六郎
かふねをなかに取籠てさん〳〵にせめられけれは」三二ウ

あまのゝ六郎かなはしとや思ひけんいつみの国
にをしわたりふけいた川にそつきにける又きの
国の住人そのべの兵衛忠安これもけんしに心ざし
ありけれは家子らうとう六十よ人を引ぐしていつ
みの国にうちこえあま野の六郎と一になつて
ふけゐ田川にじやうくわくかまへてたてこも
る能登殿此よしをきゝ給ひていつみの国にをし
わたりふけ井田川におしよせてさん〳〵にせめら
れければあまのゝ六郎そのへの兵衛かなはしと
や思けん矢をもておばさう人原にふせかせ我身
は夜に入て京へのぼり源氏と一にそなりにける
のととのあまのゝ六郎そのべの兵衛をはゐもら」三三オ

されたりけれはふせぐところの者とも二百余人か
くひきりかけ一のたにへそ参られける又伊よの国
の住人河野の四郎みちのふ五百余騎にてむほんを
こすと聞えしかはのと殿これをせめんとて讃岐の
国におしわたりいよの国にこえ給ふ河野この
よしを聞て其せい五百余騎いよの国をたつてあき
の国にをしわたりはゝかたのおちぬ田の次郎
とひとつに成てぬ田のじやうにたてこもるの
と殿つゝいておわれけるか其日は備後のくにみの
島につき給ふ次の日あきの国にうちこえぬ田
のじやうにおしよせさん〳〵にせめられけれは
ぬたの次郎かなはしとや思けんゆみをはつし甲　」三三ウ

をぬいてかう人にこそなりにけれ河野五十余騎
にうちなされぬ田なは手にかかつて落けるか能登
殿のめのと子平八兵衛為さだ二百余騎ておつかけ
たり河野とつてかへしてたゝかふほどにしうじう
七騎にうちなされたすけふねにのらんとてほそ

みちにかかつて落ける所をへい八兵衛が子息讃岐
の七郎よしのりくつきやうのゆみのじやうずて
ありければおつかゝり七騎を五騎いおとす河の
の四郎しうじう二騎にそなりにける河野か身に
かへて思けるらうとうあべの七郎に讃岐の七郎
よしのりおしならべひつくんでどうとおち取てを
さへてくびをかかんとする所に河の取てかへし　」三四オ

らうとうか上なるさぬきの七郎がくびかき切て
ふか田へなけ入大おんじやうをあけて伊よの国の
住人河のゝ四郎みちのふしやう年廿一いくさ
をはかくのごとくこそすれ我と思はん者共は依て
とゝめよやとてらうとうを肩にひつかけそこを
なんなくにけのひて小ふねにのりいよの国へおし
渡るのと殿河のをはうちもらされたりけれはぬ田
の次郎かかう人たるをめしぐして一のたにへそ
まいられける九国の住人うすきの次郎これ高尾か
たの三郎これよし河のゝ四郎みちのふ三人一つ

に成てつかう其勢二千余騎こ舟ともにとりのり
備前の国まてせめ上り今木がじやうにたて籠る　」三四ウ

能登殿福原にてこれをきゝ其勢三千余騎て備前の
国にはせくだり今木かじやうをそせめられける
じやうのうちの兵ともきどをひらひて切て出さん
〳〵にこそたゝかひけれ能登殿ふくはらへ申され
けるはこのやつ原はこはい御かたきにて候あひだ
かさねて勢を給るべう候と申されけれは数千騎
の軍兵をさしむけらるじやうのうちの兵とも手の
きわたゝかひぶんとり高名して我らはこ勢也今度
は落てかさねて大勢てよせんとてうすきの次郎これ
高尾かたの三郎これよしちんぜいをさいてそおち
行ける河野の四郎はこふねにのつて伊よの国
へおし渡るのと殿今はせむべきかたきなしとて福　」三五オ

はらへかへられけれはおゝい殿をはじめ奉て一門
の人々のとの殿度々の高名を一とうにかんじ給
ひけりさる程に平家の人々はふくはらにおはし
けるかみやこも程ちかければたかひにふみを
かよはしてなくさみあへりなかにも二位のそうづ
せんしんはかぢ井のみやの年来の御じゆくにて
おはしけれはかせのたよりに度々申されけりかぢ
井の宮よりの御返事にたびのそらの有様おほしめし
やるこそ心くるしけれ都も末をたしからすなとあ
そばされておくには一しゆのうたそ有ける

人しれすそなたをおもふこゝろをは
かたふく月にたくへてそやる　」三五ウ

僧都これをかほにおしあてゝかなしみのなみたせ
きあへず小松の三位中将これもりのきやうはとし
へたゝり日かさなるまゝにみやこにとゝめおき
給ひし北のかたおさなき人々の事のみなげき
かなしみ給ひけりあき人のたよりにをのつから文
なとのかよふにも北の方の御ありさまこゝろくる
しう聞給てさらはむかへたてまつて一所にていか

にもならばやと思はれけれともいつとなきなみのうへ舟のうちのすまゐなれば人のためいたはしくなど忍びつゝあかしくら給ふにこそせめての心さしのほどもあらはれけれ同き正月廿九日範頼義経ゐんざんして平家ついたうのために西国

」三六オ

へはつかうすへきよしそうもんせられければほんてうには神代よりつたはれる三の御たからあり内侍所神璽宝剣これなりあいかまへてことゆへなくみやこへ返し入奉るべきよし仰下さるをの〳〵かしこまり承りてまかりいづ同き二月四日ふくはらには故入道相国の忌日とて平家の一もんひとつところにさしつどひかたのごとくの仏事おこなはれけりあさゆふのいくさたちにすき行月日はしらねともこぞはことしにめくり来てうかりし春にもなりにけり世の世ならましかばきりうたうばのくわたてぐぶつせそうのいとなみもあるへけれともいまは何事の沙汰にもをよはす

」三六ウ

たゝなんによのきんたちさしつどひなくよりほかの事そなき同き五日ふくはらにはしよゐぢもくおこなはれて大げき中原のもろなうが子すはうのすけもろすみ大ないきになさるひやうぶのせうまさあきら五位の蔵人になされて蔵人のせうとそいわれけるそのとき大臣との門脇の平中納言のりもりのきやうのもとへ使者をたてゝ今度能登殿の所々の高名によつてくんこうのしやうにのりもりのきやう正二位の大納言にあがり給ふべきよしの給ひつかはされたりければのりもりのきやう

けふまてもあれはあるかの我身かは
ゆめのうちにもゆめを見るかな

」三七オ

とてつゐにあかり給はすむかしまさかとが東八ケ国をうちしたかへてしもおさの国さうまのこほりに都をたて我身を平しんわうとかうして百くわんをなしたりしにはこよみのはかせになかりける是はそれにはにべからす主上みやこを出させ給ふ

とは申せどもしんしほうけんないしところ
三しゆのじんぎをたいしてはんぜうのくらいに
そこわり給へばしよゐぢもくおこなはるゝ事も
ひがことならすとそ人申ける

せいそろへ

平氏すでにふくはらまでせめのほつて都へ帰り入
よし聞えしかは都に残とゝまり給へる平家のゆ　」三七ウ

かりの人々いさみよろこぶ事なのめならすさる程
に源氏は二月四日にいくさ有べしとふれられ
たりけれ共二月四日はこ入道相国の忌日と聞え
て仏事さまたげんもつみふかかるべしとてよせ
ざりけり五日は西ふさがり六日はだうこ日七日の
卯のこくに一のたにいくたのもり東西のきどぐち
にて源平矢あはせとそさだめけるさりながら四日
は吉日なれはとて大手からめ手の大将軍軍兵六万
余騎二手にわけて都をたつまづ大手の大将軍に
はかばの御ざうしのりよりあいしたかふ人々には
たけ田の太郎のぶよしかがみの次郎とをみつ子息
の小次郎ながきよ一条の次郎忠頼いたかきの三郎　」三八オ

かねのふゐざわの五郎のふみつへん見の兵衛有
よし山名の次郎のりよし同三郎よしゆきさふらひ
大将には梶原平三かげ時ちやくし源太かげすゑし
なん平次かげ高三郎かげ家川越の太郎しげより
しそく小太郎しげふさいなげの三郎しげなりはん
がへの四郎しげとも同き五郎ゆきしげ小山の小
四郎ともまさながぬまの五郎むねまさゆうきの
七郎とを光讃岐の四郎大夫ひろつな小野寺の
ぜんじ太郎みちつなしやうの三郎忠家同き四郎
高家河原太郎高直おなじ二郎もりなうてつし
河原の五三郎ありなうしをのやの五郎これひろ
中村の太郎時つな其子の小四郎ありつなしい　」　三八ウ

名の小四郎ありたねゑまの小四郎義時曾我の太郎
すけのぶ江戸の四郎のふすけくげの次郎しげ光

小代の八郎ひろつな玉の井の四郎しげつな藤田
の三郎大夫ゆきやす是らをさきとしてつかう其
せい五万余騎四日とら卯のこくにみやこをたつて
その日のさるとりのこくにつの国こや野にぢん
をそとつたりけるからめ手の大将軍には九郎
御ざうし義経おなじうともなふ人々には田代の
くはんじやのふつな大内の太郎これよしやす田の
三郎よしさだむらかみの次郎判官代やす国侍大将
にはといの次郎さねひらちやくしの弥太郎
とをひら畠山のしやうじ次郎しげたゞ同き長野　」三九オ

の三郎しげきよわだの小太郎義盛同き次郎よし
しげ同き三郎むねさねみうらのすけよしずみ子息
平六よしむら佐々木の三郎もりつな同き四郎
たかつな同き五郎よしきよくげのごんのかみなを
みつ天野の十郎なをつね小川の次郎すけよし左原
の十郎よしつら金子の十郎いゑたゞ同き与一
ちかのりおかべの六弥太たゞずみいのまたの小平

六のりつな熊谷の二郎なをざねしそく小二郎
なをいゑ平山の武者所すへしげおざはの二郎ひ
ろゆき大かわつの太郎よしゆきはらの三郎きよ
ますわたりやなきの弥五郎きよたゞたゝらの五
郎ときはる其子の四郎みつはるひぢやの三郎　」　三九ウ

高すけ同き五郎高光成田の五郎かげしげへつふ
の小太郎きよしげ御ざうしの手らうどうにはおふ
しうのさとう三郎つきのぶ同き四郎たゞのふかた
おかの太郎ちかつね源八ひろつなゑたの源三く
まひ太郎伊勢の三郎義盛武蔵ばうべんけいこれ
らをさきとしてつかうそのせい一万余騎同日の
おなじ時に京をたつて丹波ぢにかかり二日ぢを
一日にうつて丹波と播磨のさかひなるみくさ山
のひがしの山ぐち小野原にぢんをそとつたりける
平家のかたには此由を聞てさらばまつ是をふせげ
やとて大将軍には小松の新三位の中将すけもり新
少将あり盛たんごの侍従たゞふさひつちうのかみ　」四〇オ

もろもり侍大将には越中のせんしもりとし
次郎兵衛もりつきかづさの五郎兵衛たゞみつ
平内兵衛きよいゑをさきとしてつかうそのせい
三千余騎みくさ山のにしの山ぐちにおしよせて
ぢんをとり源平三りの山をへたてゝさゝへたりか
かりけるところにその日の夜に入て九郎御
ざうし義経さふらひ大将土肥の次郎をめして平家
は三千余騎にて西の山くちをかためたんなるそ今
夜ようちにやすべき又あすのいくさにてやある
べきとの給ふところに伊豆の国の住人田代のくはん
じやのぶつなすゝみ出て申されけるはかたきは三
千余騎みかたは一万余騎御せいもはるかにまさり」四〇ウ

たりひるいくさにて候はゝ平家の大せいかさなり
候ひなんずさ候はゝ味方の御大事なるべし今夜よ
うちよかんぬとおほえ候いかに土肥殿いしうも申
させ給ひたる田代殿かなさねひらもかううそ申
たふ候ひつれはや〳〵うつ立せ給へとて二日ぢを
一日にうつて馬も人もせめつかれたりけれとも又
馬のはるびをかため甲のおをしめてそうつたゝれ
けるそも〳〵此田代のくはんじやと申は伊豆のさき
のこくし中納言ためつなのあつそんの子なり伊豆
の国の住人かのゝすけもちみつがむすめにあひぐ
してまふけられたりしを母かたのおうぢにあつけ
られてそ弓矢取にはしたてられたるそのせんぞを」四一オ

たつゐるに後三条の院の第三の王子すけひとの
しんわうに五代の末なりそくしやうもよかりける
うへゆみ矢をとつてもゆゝしかりけりされはいし
はしの合戦のときも一はううちやふつてはかね
をあらはされし人そかし然るを今度鎌倉殿九郎か
行衛を見つき給へとて御ざうしにそへられ
たる兵共くらさはくらしいかゞせんと申所に九郎
御ざうし義経又といの次郎をめしてれいの大たい
まつはいかにとのたまへばさる事候とて小野
原のざいけに火をそかけたりける是をはじめとし

て野にも山にも草にも木にも火をつけたりけれは
ひるにはすこしもたかはずして三りの山をぞこえ　」四一ウ

行ける平家は夜うちにせんする事をはゆめ
にもしらずして馬ねふりはゆゝしき大事そ今
夜よくねてあすのいくさをせよやとてあるひはゑ
ひらをとひてまくらとしあるひはかふとをふせて
まくらとし前後もしらすそふしたりけるその夜の
子のこくはかりに源氏一万余騎上の山よりときを
どつとつくつてはつと落す平家は思ひもかけぬ時
のこゑにおとろきて馬よくらよ太刀よ刀よとひし
めきけるが馬にあてられじとて中をあけてそと
をしける源氏は落行かたきを爰にをつかけかし
こにかけつめさん〳〵にせめければ矢ばに平家
の兵共五百余人そうたれにける去程に平家の方の　」四二オ

大しやうくん新三位殿や新少将殿やたんごの侍従
殿は播磨の高さごのうらより小舟にのつて讃岐の
八島へそわれられける備中のかうのとのばかり
一のたにへ帰り給ひておほいとのに此よし申され
たりけれはおほい殿あきの右馬のぜうをもつて一
門の人々のもとへ九郎義経こそ三草の手せめや
ふつて候なれめん〳〵むかはるべう候とのたまひつ
かはされたりけれともをの〳〵じし申されけり
おほいとの又能登殿のもとへ使者をたて今度山の
手やぶれて候にめん〳〵むかはるへう候と申
候へどもをの〳〵じせられ候今度も又能登どのむ
かはるべう候と宣ひつかはされたりけれは能登殿　」四二ウ

の御返事にはいくさのならひ我身ひとりの大事
とおもひきつたるだにあはひあしければかたきに
うしろを見するならひありましてさやうに馬の
あしきゝのよからんかたへはむかはんあしからん
かたへはむかはしなんと候ひては軍にかつ事は候
ましたゞいく度もこはからんする方はへのりつね
をさしむけられ候へ一方うちやぶつてげんざん

にいらふする候とそのたまひける使かへつて此由
申たりけれはおほい殿なのめならすよろこび給ひ
てさらはうつ手共をむけよやとて新中納言とも盛
のきやうほん三位の中将しげひらのきやう二人大
将軍にてつかう其せい五万余騎大手いく田のもり　」四三オ

へぞむかはれけるさつまのかみたゞのりたじまの
かみつねまさわかさのかみつねとし三人大将くん
にてつかうそのせい四万余騎一のたにの西のきど
へそむかはれける越前の三位みちもり能登のかみ
のりつね二人大将軍にてつかうそのせい一万余騎
一のたにの後ひよどりこえのたうげへからめ手に
こそむかはれけれ越前の三位みち盛は能登殿のか
り屋かたへ北のかたをむかへてこしかた行末の
事ともをかたりあわせてたかひになくさみあはれ
けるところに能登殿三位のかたへ使者をたてゝ
こゝはこはき所とてのりつねをさしむけられて候
かまことにこはかるべし上の山よりかたきかはつと　」四三ウ

おとひたらばゆみをもちたりとも矢をはげまふけ
ではかなふまし矢をはけ候ともひきまふけてはか
なふましさやうにうちとけさせ給ひてはいぬじに
せさせおはしまし候なんすはや〳〵うつたゝせ
給へと宣ひつかはされたりけれは三位扨はとて北
の方をはふねへ送奉りやがて物ぐしてぞうつたゝ
れける同き五日の夜に入て源氏こや野を立てやう
〳〵いく田のもりにせめ近々すゝめの松原みかけ
のもりこや野のへんを見わたせば源氏てゝにとを
火をたくふけ行まゝに是をみればはれたるそら
のほしのことし平家もむかひ火たけやとてかたの
ごとくのかゞりをそたいたりけるあけ行まゝに
是を見れは河べのほたるにことならす
　　らうば
同き六日のあかつき九郎御ざうし義経一万余騎
のせいを二手にこそわかたれけれまづ土肥の次郎
さね平に七千余騎をさしそへて播磨路のなみうち　」四四オ

きはより一のたにの西のきどぐちへこそさしむけ
られけれ我身は三千余騎のせいにて一のたにの後
ひよどりこへ落さんとてからめ手にまはられける
が人々の心をみんとや思はれけんそも此山のあん
内いかゞ有べきとのたまへは兵ともこれはきこゆる
あく所にてあんなる物をいかゝせんときする所に
武蔵の国の住人平山の武者所すへしげすゝみ出て　」四四ウ

申けるは此山のあんないをはすへしげこそよく
しつて候へと申御ざうし御へんはとうごく武蔵
の国にてうまれそたちたる人なりけふはしめて
むかふ西国の山のあんない者まことしからすと
のたまへば平山かさねて申けるはこは御てうとも
おほえ候はぬものかな吉野立田のはなもみちをは
見ね共歌人がしりたるかたきのこもりたるじやう
のうしろの山のあんないをはごうの者かしり候
と申ければ御ざうしこればうじやくぶしんなり
とてぞわらはれける同国の住人べつふの小太郎
きよしげしやう年十八さいになりけるかすゝみ出
て申けるはおやの入道のをしへ候ひしは山越の　」
四五オ

かりをもせよ又かたきにもおそはれよしんざんに
まよひたらんず時はらう馬にたつなむすんで打
かけまつさきにおつ立てゆけかならずみちへ出る
とこそをしへ候ひしかと申たりけれは御さうし
是又やさしうも申たる物かなゆきは野原をうつ
めどもおひたる馬そみちはしるといふ事ありとて
しらあしけなるらうばにかゞみくらおゐてしろ
くつわはげたつなむすんでうちかけ大せいかまつ
さきにおつたてゝいまだしらぬしんさんへこそ
わけ入給へころはきさらぎはじめの事なれはみね
のしらゆきむらきえて花かとみゆるところもあり
たにのうぐひすをとつれてかすみにまよふ所も　」
四五ウ

ありのぼればはくうんかう〳〵としてそびへくだ
ればせい山がゞとしてきし高し松のゆきだに

きえやらでこけのほそみちかすかなりあらしにた
ぐふおり〳〵はばいくわとも又いつつべし東西に
むちをあけこまをはやめて行ほどに山路に日
くれぬれはみな山中におりゐてちんをぞとつたり
けるかかりける所に武蔵ばうべんけいそのへん
なる所よりらうおふ一人たづね出して参りたり
御ざうしあれはいかにとの給へは是は此山の年
ころのれうしで候と申す御ざうしさては此山
のあん内をはよくしつたるらんこれより平家のこ
もりたる一のたにのうしろひよどりこへのたうげ」四六オ

を落さばやとおもふはいかゞあるべきとのたまへは
それおもひもよらぬ御事候三十ぢやうのたに
十五ちやうのいわさきなんと申すはひとへに
びやうぶをそいたてたるがことし其外おとしあな
どもほつてひしをたてあひ待まいらせ候なれは
かちにてだにもゆゝしき御大事まして御馬にて
はおもひもよらぬ御事候御さうし此山にしゝ

はあるかししはいくらも候世間あたゝかになり
候へば草のふかみにふさんとて播磨のししは丹波
へこえ世の中さむくなり候へはゆきのあさりに
はまんとて丹波のししははりまのいなみ野へ出
候とそ申ける御さうしすは〳〵よかんめるはしゝ」四六ウ

のかよはん所馬のかよはざるべきやうやあるさら
ばなんぢやがてあんない者せよとのたまへば是は
年老ていかにも叶候まし御ざうし子はあるか
一人もつて候さらはそれにあんないせさせよと
の給へば承つてくまわう丸とてしやう年十六さい
になりけるわらはを奉る御さうしなのめならす
よろこび給ひてやがてもとり取あけよきよろひ
きせよき馬にのせてあん内者にこそめしぐせられ
けれ其後御さうし鎌倉殿に御中たかはせ給ひて
おうしうひらいつみにてうたれさせ給ひし時まで
も御供申てうち死にしたりしわしのをの四郎
義久とは是なりけり父をはわしのをのしやうじ」四七オ

たけひさとぞ申ける武蔵の国の住人熊谷の次郎
なをさね山の手のせいの中に候けるが六日の夜
に入てちやくしの小次郎なをいへをよふでいひ
けるはあすはきこゆるあく所を落さんずれはうち
こみのいくさにてたれさきといふ事もあるまし
いさや今夜よもすから播磨路のなみうちきはに
うつて出一のたにのにしのきどくちへまつさきに
おしよせんとおもふはいかゞあるべきといひけれは
小次郎此儀もつともゆゝしう候ひなんすたれも
かうこそ申たう候へさらばやがてうつ立せ給へ
とそ申ける熊谷まことや平山もこの手に有そかし
うちこみの軍をばこのまぬ者なれはうつ立ぬらん　」四七ウ

ゆきて見よとて郎等をつかはしてみせけるにあん
のごとく平山も物ぐして打立けるが今度一のたに
へよせたらんには人をばしるべからすすへしげに
おゐてはひつとひきも引ましき物を〳〵とひとり
ことしてそ出立ける下人が馬にものかふとてにつ
くひ馬のながくらひかなとてうちけれは平山かう
なせそ鎌倉殿の御まへをまかり出るとき今度すへ
しげ西国にまかりむかふて候はゝうち死に仕るべき
よし申切て出たるなりさればその馬の名残もこ
よひはかりそといふを聞てらうとうはしり帰り
此よしかくとかたりければ熊谷さればこそとてそ
出立ける熊谷かその夜のしやうそくにはかちの　」四八オ

ひたゝれに黒かわおとしのよろひをきくれなゐの母
衣かけてごん太くりげときこゆるめい馬にこそ乗
たりけれちやくしの小次郎なをいへはおもだか
を一しほすつたるひたゝれにひおとしのよろひを
きせいらうとなつけたるしらつきげにこそのつ
たりけれはたさしはきちんのひたゝれにこさくら
をきに返したるよろひをきかわらけなる馬に
そのつたりけるしう〳〵三騎打つれて落さんする
あく所をは弓手になし馬手につゐて終夜うち程に
としころ人もかよはぬ田井のはたといふふる道に

かかつて播磨路のなみうちきはへぞうちいてたる
土肥の次郎さねひらか七千余騎にてしほやのはま」四八ウ

といふ所にひかへて夜のあくるを待けるところを
まきれてうちとをり西のきどくちへまつさきに
こそうちよせたれあまりに夜ふかふよせたれは後
につゞくせいもなく前にたゝかふかたきもなし
たま〳〵事とふ物とてはなきさによするなみの
をとすさきのちどりのこゑばかり

熊谷平山が一二のかけ

熊谷いかに小次郎よかうの者はわれ一人とおもふ
へからず此へんにもさきかけばやと思ふ者のいく
らもひかへて夜の明るを待らんそいざなのらん
とてかいたてのきはに馬のはなつかする程におし
よせあぶみふんばりつつたちあがり大おんじやう」四九オ

をあけて是は武蔵の国の住人熊谷の次郎なをさね
ちやくしの小二郎なをいへ今度一のたにのせん
ぢんそやとそ名乗たるじやうのうちには此よしを
きひてかたきに矢だねを射つくさせよ馬のあし
つからかさせよとてあひしらふものこそなかり
けれくまがへ今は平山もちかつきぬらん物をなふ
れ小次郎といひもあへずうしろをかへり見けれは
武者こそ二騎出きたれ平山殿かととへはすへしげ
とこたふかうの給ふはくまかへとのかなをさねよ
いつよりぞよひよりなりとそこたへけるひらやま
かたりけるはすへしげもとふによすべかりつる
を成田五郎にたばかられて今までちゝしてさう」四九ウ

つるなり成田がみちすがらいふやうそいかに平山
殿あまりにさきかけはやりなし給ひそ軍のさき
をかくるといふは味方のせいをうしろにちかつけ
て我高名をも人のふかくをもたがひに見々えたれ
ばこそせんにてはあれふか入してうたれてなんの
せんそといふあひだすゑしげげにもとおもひ小坂
のありつるにうちあけて馬をくだりかしらにひつ

たてごぢんのせいをあひ待ところに成田もともに
いそがはしげにてうちあげたりいかさまにも是は
すへしげにうちならんで軍のやうをいひあわせん
ずるかとおもひたれはさはなくてすへしげか方を
すげなげに見なしてうちすぎんとする間あつはれ」五〇オ

此君はすへしげをたはかつてさきかけふとするよ
と思ひとこを以てわ君はすへしげをはたはかるそ
といひすて三四たんさきたつたる成田を五たんば
かりひきよけてもみにもふでよせつれは今は成田
五郎十四五町ぞさがりたるらんうしろかげを
だによにしみたらじものをとかたつて熊谷平山
かれこれ五騎になつてそひかへたる熊谷以前に
名乗つれとも又平山かあるにとおもひあぶみふん
ばりつつたちあかり大おんじやうをあけて是はい
前に名乗つる武蔵の国の住人熊谷の次郎なをざね
ちやくしの小次郎なをいへ今度一のたにのせん
ぢんそやとそなのつたるじやうの中には此よしを」五〇ウ

聞ていざよひよりなのる熊谷おや子ひつさけて
こんとてすゝむつはものにはたれ〳〵そ越中の
せんしもりとし次郎兵衛もりつきかづさの五郎
兵衛たゝみつ後藤内さだつなまなべの四郎をさき
としてむねとの兵廿三騎きとをひらかせて切て出
さん〳〵にこそたゝかひけれ平山か其夜のしやう
そくにはしげ目ゆいのひたゝれにあかゞわおとし
のよろひをきうすくれなゐのほろかけてちばのすけ
の手よりえたりしめかすげにこそのつたりけれ
はたさしは二引両のひたゝれにあらいかわのよろ
ひをきさびつきげにこそのつたりけれ平山さらは
なのらんとてあぶみふんばりつつたちあかりだい」五一オ

おんじやうをあけてこれは去ぬる保元平治両度の
かつせんに高名しきはめたる武蔵の国の住人ひら
山の武者所すへしげありとはしらすやと名乗てお
めいてかく熊谷かくれは平山つゞき平山かくれは
くまがへつゝき我おとらじとこそせめたりけれ

城の内にはこのよしを見てこは熊谷ばかりかと
思ひたれは又ひら山となのるあひた手ごはしとや
思ひけんじやうのうちへはつとひきしりそきかた
きをとさまになしてそふせぎけるくまかへおや
子は太刀のきつさきをまつかうにあてゝいよ〳〵前
へはすゝめ共後はひつとあしもひかざりけり熊谷
は馬を射させており立てそたゝかひけるちやくし　」五一ウ

の小次郎なをいへはしやう年十六さいと名乗て
せめよせ〳〵しけるがめ手の小かいなを射させ馬
よりおり父とならふてそ立たりける熊谷いかに
小次郎よ手おふたるかさん候矢ぬひてたべといひ
けれはふかくじんかないましばしこらへよかぶと
のしころをつねにうちふれてへん射さすなよろひ
つきをつねにせよすきま射さすなとそをしへける
熊谷ひころ小次郎をはあらき風にもあてじとこそ
おもひしにいつしかけふいくさばのならひとて
たゞしねやしねとそいさめける其後熊谷よろひに
たつたる矢どもかなくりすてのりかへにのつて
城の内をにらまへ去年のふゆ鎌倉をたちしより　」五二オ

いのちをば兵衛のすけ殿に奉りかばねをは一の
たににさらさふと思ひ切たるなをざねそ備中の水島
播磨のむろ山二ケ度の合戦に高名しきはめたると
のゝしるなり越中のせんじもりとし次郎兵衛
もりつきかづさのあく七兵衛かげきよはなきか能
登殿はおはせぬか高名おもふかくをも人によつて
そする人ことにあふてかうみやうをはえせし物を
熊谷にくめやなをさねに落あへやとのゝしりけれ
ばゑつ中の次郎兵衛もりつき此よしを聞てこん
むらごのひたゝれにひおとしのよろひをきくわ
がた打たる五まい甲のおをしめいか物作の太刀を
はき廿四さいたる大中黒の矢おひぬりごめどうの　」五二ウ

弓持てれんぜんあしげなる馬にきんぶくりんの
くらおいてのつたりけるか熊谷父子に目をかけ

てあゆませよる熊谷おやこも中をわられじと
あひもすかさす立ならんでもりつきを待かけたり
もりつぎこれをみて叶じとやおもひけん城の内へ
引て入熊谷いかにあれは越中の次郎兵衛とこそ
見れまさなふもかたきにうしろを見する物かな
かへせや〳〵といひけれはいゝやさもさうすとて
ひいているかづさの五郎兵衛たゞみつあく七兵衛
かけきよ熊谷にくまん平山に落あはんとのゝしり
けるをゑつちうの次郎兵衛君の御大事これに
かきらしあれほどのふてものにあふてくんで　」五三オ

うたれてなんのせんそといふあひだ五郎兵衛も
あく七兵衛もくまさりけりじやうの内には高矢倉
より矢前をそろへて雨のふるやうに射出しけれ共
熊谷平山矢にもあたらすかけまはる平家のつはもの
ともの乗たる馬はかう事はまれなりのる事は
しげかりけり舟に久しく立おいたればみなす
くんでよろくるやう也熊谷ひら山かのつたる馬は
かひにかうたり大の馬にて一むちあてば馬も人も
みなけたをされぬべき間熊谷にくめや平山にくめ
やくめとのゝしりけれ共さすがくむ武者一騎もな
かりけり平山ははたさしをうたせ大きにいかつて
じやうのうちへかけ入やがてそのかたきのくび取　」五三ウ

てそ出にけるそのあひだに熊谷も馬のいきをやす
め城の内へかけ入ぶんどりしてこそ出にけれ熊谷
さきによせつれともきどをひらかざりけれはかけ
いらす平山のちによせたれともきどをひらいたり
けれはかけ入けりさてこそ熊谷平山が一二のかけ
をはあらそひけれ是をはじめとして成田五郎かけ
しげ三十騎ばかりで出来り土肥の次郎さねひら七
千余騎で色々のはたをあげおめきさけんでよせに
けりかくて一のたにのにしの手の軍は火いつる
ほとにそみえたりける

梶原が二度のかけ

さる程にいく田のもりをは源氏五万余騎でそかた　」五四オ

めたりける其中に武蔵の国の住人河原太郎たかなう河原次郎もりなうとてきやうたいあり六日の夜に入て河原太郎おとゝの四郎をよふでいひけるは大名は我と手をおろさゞれともらうとうの高名をもつてめいよとすされば我等がやうに身ふせうなるものはわれと手をおろさではかなふまし卯のこくの矢あわせとはさだめられたりしかとも待があまりにひさしければたかなうは一人じやうの中へかけいり一矢いんとおもふなりさらんには千万が一もいきてかへらん事有がたしなんちはふるさとへ帰てさいしともに此よしかくとかたれかしといひけれはもりなうなみだをはら〳〵と」五四ウ

ながひてこはくちおしき事をもの給ふものかなたゞきやうたい候ものがあにをかつせんのにわに見すて一人ふるさとへくたつたらばいく程のゑいくわをかたもち候べきたゝ一所でうちじにせんとぞ申ける河原太郎さらはとて数の形見を下人のおとこにふるさとへをくり只おとゝい馬にはのらすかち立になつてゆんづえをつきいく田のもりのさかもぎをのぼりこへ城の中へそ入たりけるいまだうしのこくばかりの事なれはじやうの中には火かすかにみえてしづまりかへつてをともせず河原太郎大おんじやうをあけてこれは武蔵の国の住人河原太郎きさいちのたかなうおなじき次郎」五五オ

もりなう大手いく田のもりのせんぢんそやとそ名乗たるしやうのうちには此よしを聞てあつはれ東国のつはものともほとたけうやさしかりける事あらしこの大せいの中へたんだ二人打入たらば何ほどの事をかしいたすべきたんだおゐてあひせよとてうたんといふもの一人もなし河原きやうたいはくつきやうの弓の上手成ければ矢たばねといてをしくつろげさしつめひきつめさん〳〵に射ける矢に兵おほく射ころさるじやうのうちにはこれを見ていや〳〵是らこそあひしにくけれあま

すなもらすなうつとれ〳〵といふ程こそありけれ
平家の兵ともうんかのごとくにこそみたれ出けれ　」五五ウ

其中に備中の国の住人まなべの四郎まなべの五郎
とてきやうだいありあにの四郎をは一の谷にお
かれたりおと、の五郎はいく田のもりに候ひけ
るがすくれたる弓の上手ではあり三人ばりに十三
ぞくの中さし取てうちつがひよつひいてひやう
どはなつ河原太郎がよろひのむないたうしろへ
つつといぬかれて弓つえにすがりすくむところに
おと、の次郎はしりよりあにをかたに引かけて
さかもぎを上りこへんとしける所をまなべか二の
矢に河原次郎よろひのくさすりのはつれをした、
かに射させきやうだいまくらをならへてとふと
ふすまなへからうどう落あふて河原きやうだいか　」五六オ

くびをとつて大将軍のげんさんに入たりけれは新
中納言とももりのきやうあつはれかうの者かな一
人たうぜんとは是らをこそいふへけれあつたら物
いけて見でとそおしまれける其後河原か下人とも
源氏のせいの中にはしりちつて河原殿こそ城
の内へかけいらせ給ひてきやうだいながらうたれ
させおはしまして候へとこゑ〳〵によばはつたり
けれは梶原此よしをきひてぢたい是はしのたうの
とのばらのふかくでこそ河原きやうたいをはうた
せたれ今は時よくなりぬよせよやとてあしがる共
にさかもぎとりのけさせ手せい五百余騎ときをつ
くりければ味方の五万余騎つゞひてときをつくる　」五六ウ

城の中の五万余騎もおなじう時のこゑをぞあわ
せたる両方十万余騎が時のこゑには天もひゞき大
地もゆるぐばかりなりたかひのときのこゑもしづ
まりしかば梶原かじなん平次かげたか父には
かくともいはすしてじやうのうちへおめいてかけ
入かぢはら使者をたて、ごぢんのせいのつゞかざ
らんにさきかけたらんする者にはくんこう有

ましきよし大しやうくんよりの御てうであるそといはせければ平次しばらくひかへて

武士のとりつたへたるあづさゆみ
ひいてはかへす物ならばこそ

と申させ給へといひすてゝおめいてかくかぢはら」五七オ

是をみて平次うたすなかげたかうたすなすゝめやらうとうつゞけや兵とて手せい五百余騎じやうのうちへそかけ入けるじやうのうちにはこれを見て梶原は東国にきこえたるものぞあますなもらすなうつとれとて大せいがまんなかにとりこめたりされとも梶原事ともせず西より東へ一わたり北より南へ一わたりわつてはとをりわつてはとをりさん〳〵にたゝかひ一方打やふつて出たれは五百余騎のつはもの共あるひはうたれあるひは手おふて五十騎はかりにそなりにける梶原あたりをきつと見てこはいかに源太がみえぬはといひければらうどうの申けるはさ候へはこそ源太殿は北の山きは」五七ウ

かけいらせ給ひてかたき八騎が中に取こめられさせ給ひて候ひつるが今は定而うたれてそまし〳〵候らんといひけれは梶原聞てなみだをはら〳〵と流いてかげとき軍して世にあらんと思ふも子共を思ふゆへなり源太うたせてかげとき世にありても何にかはせんさるにてもいま一度源太か行衛をたつねんとて又かけいらんとしけるか大せいうんかのごとくにみたれあひてたやすくかけ入べきやうもなかりけれは梶原大せいの方にかけむかひあぶみふんばりつつたちあかり大おんじやうをあげてこれはむかし八幡殿の後三年のたゝかひのとき出羽の国せんほくかなざわの城をせめ給ひし」五八オ

とき十六歳にてさきをかけ弓手のまなこをかぶとのはちつけのいたに射付られその矢をぬかでおりかけたうの矢を射てかうのざにつきたりしかまくらのごん五郎かげまさに五代のばつようさがみの国の住人梶原平三かげときありとはしらすやと

の、しつたりけれはかたきも名にやおそれけん
はつとあけてそとをしける大将軍新中納言とも
もりのきやう大おんじやうをあげてうつとれ〳〵
と下知せられけれは大せい又みたれあふてまん中
にとりこめたり梶原かたきの中をかけわり〳〵
源太か行衛をたつぬるにあんのことく源太は北
の山ぎはにかけ入て馬をも射させかち立になり」　五八ウ

かふとをもうち落され大わらはになつてらうどう
二人左右にたて二ちやうばかりそびへたるきしを
うしろにあてかたき八騎が中にとりこめけれ
太刀をぬいていのちもをしますおもてもふらす爰
をさいごとそたゝかひける梶原是をみて源太は未
うたれさりけりとうれしう思ひいかに源太よかげ
ときこゝにありたとひ死ぬるともかたきにうしろ
を見すなとちゝにことばをかけられ源太いよ〳〵
かなばへてまつしぐらにこそたゝかひけれかぢ
はらこゑをあけ源太うたすなかげすへうたすなす
すめやらうとうつゞけや兵とてじなん平次かげ高
三郎かけいゑおやこ四人して八騎のかたきを三人」　五九オ

うつとり五人に手おふせ弓矢とりはかくるも引も
おりにこそよれいさうれ源太とてかけぐしてこそ
出たりけれかぢはらが二度のかけとは是也これ
をはじめとしてたんいのまたちゝぶ河越三うら鎌
倉むら山よこ山こだまたうの兵とも名乗かへ〳〵
いれかへ〳〵せめたゝかふ源平たかひに時つくる
こゑうみをひゞかし山をうごかす馬のはせちかふ
をとはいかづちのことし射ちかふる矢は雨のふる
やうなり太刀なぎなたのひらめくかけはいなづまに
ことならすとをきをはゆみで射ちかきをは太刀で
きるくまでにかけてとるもありとらるゝもあり
あるひはひつくんでさしちがへしぬるものもあり」　五九ウ

あるひは取ておさへくびをとるもありとらるゝも
ありあるひはいた手おふたるをかたにひつかけ

かたはらへひきしりぞく者もありうす手
おふてこゝをさいごとたゝかふ者もありけり源平
両家のつはものともいづれひま有共みえさりけり

坂おとし

かかりしかとも一の谷いく田のもり東西のきど
ぐちばかりのたゝかひではかなふへしともみえざ
りけるに九郎御ざうし義経そのせい三千余騎七
日の卯のこくに一の谷のうしろひよどり越のたう
げにうちあげじやうくわくはるかにみくだいて
すでにおとさんとそし給ひけるかかりける所に」六〇オ

せいにやおそれたりけんおうじか二めか一平家の
ぢんへそ落たりける平家のかたにはこれを見て里
ちかからんしゝだにもこの大せいにおそれて山ふ
かふこそ入べきに山よりししの落たる事こそ
あやしけれこれはいかさまからめ手のせいのまは
るにこそとてさわぎのゝしる事なのめならす爰
に伊与の国の住人武知の武者所きよのり何物にて
もあれかたきのかたより来らんする物をのかすべ
きやうなしとて弓おしはり矢かきおひ馬ひきよせ
打乗てまづまつさきにはしりけるおゝしかのまん
なか射てぞとゞめけるそこしもあく所なりけれは
たつなをひらくにをよはす弓のもとをやこしたり」六〇ウ

けんめ手のくつばみ射けづつて次なるししもとゞ
めけりめがをは射でそとをしける心ならすかり
したりししめせやとのばらといひければ越中
のせんじもりとし此よしを聞てせんなひ殿原の
只今のししの射やうかな矢だうなにとそせいし
ける御ざうしはこゝを落さんとし給ひけるがまづ
はかりことにかげなる馬一ひきしらあしげなる馬
一ひき二疋にたつなむすんで打かけ大せいがまつ
さきにおひ落されたりければかげなる馬はいかゞ
したりけんあしうとんでこしをつきそんじてけり
しらあしけなる馬はゑつちうのせんじもりとし
がやかたのまへにさをいもなく落ついて身ぶるひ」六一オ

してこそ立たりけれ平家の方にはこのよしをみて
さきにししのおちたるだにもあやしきに又ぬしも
なきくらおき馬の二ひきまでおちたる事こそふし
ぎなれこれはいかさまからめ手のせいのちかつく
にこそとて大きにさはきあへり御さうし此よし
を見給ひて馬は主々がのつてこゝろへておとさばよ
からんするそくは義経おとすそ手本にせよやとて
たつなかひくり大せいがまつさきにこそ落され
けれ三千余騎の兵共此よしを見てつゞいておとし
けるが小いしまじりのすなご成けれは流れおとし
に四ぢやうばかりざら〳〵ざつとおとひてすこし
だんなるところにゆらへたりそれより下を見くだ　」六一ウ

せば大ばんじやくにこけむしてつるべおとしに十
四五ぢやうぞ下つたる又うしろをかへり見れは
きしたかふしてたやすくかけあかるべしともみえ
さりけりつはものとも是はきこゆるあく所にてあん
なるものをかたきにあふてこそ死にたけれあく所
に落てはしにたからすこはいかゞせんときする所に
こゝにさがみの国の住人三うらのさはらの十郎
よしつらとてしやう年十八歳になりけるがあぶみ
ふんはりつつたちあかつて申けるは我等が三うら
のかたにてかりせしときはうさき一疋見つけ小鳥
一つおつ立てだにあさゆふかやうのところをこそ
はせありきしが思へはこれは三うらのかたのばゝ　」六二オ

よとてたつなかひくり大せいがまつさきにこそ
おとしけれ三千余騎みなつゞいておとしけるが
せんぢんにおとす兵のかふとのはちはごぢんに
落す兵のあふみのはなにからり〳〵とそあたり
ける射むけの袖を引ちかへ弓のはずをとりちかへ
あまりのいぶせさに目をふさぎゑひ〳〵こゑを
しのびにして馬に力をこそ付たりけれ大方人の
しわざとはみえす只きじんのしよゐとそみえたり
ける落しもはてすしらはた三十流ばかりはつとさ
しあげ時をとつと作る三千余騎がこゑなりしか共

山ひここたへて十万余騎とそ聞えける大将軍九郎
御ざうし義経火を出せとのたまふ程こそありけれ」六二ウ

しなの源氏むらかみの次郎判官代やすくにたてを
わりたいまつにして越中のせんじもりとしが
やかたに火をそかけたりけるこれをはじめてや
かたかりやに火をつけてみなやき上ぬ折節風はけ
しうふいてくろけふりやかた〳〵におしかけたり
平家はかならずかたきが射おとしきりおとさざり
けれともけふりにむせび馬よりおちてふみころ
さるもしやたすかるとまへのうみへそはせ入ける
みきはにはたすけふねともおほかりけれは思々
心々にのつてゆかばよからんするをふね一そうに
物のぐしたるものともが四五百人千人ばかりこみ
のらんになしかはよがるべきなきさより三町」六三オ

ばかりおし出て大せん三そうしづみけり此後は然
べき人をはのするともざう人をはのすべからずと
てしかるべき人の乗らんとする時は手をさづけ力
を合て引のせけりざう人の乗らんとする時には太
力なぎなたにてふなはたをぞなかせけるかかりしか
とももしやのするとふなはたにとりつきつかみ
つくあひだあるひはうで切おとされあるひはゆび
なき落されあけに成てなみうちぎはにたをれ
ふしおめきさけぶ事なのめならす

もりとしがさいご

能登殿は度々の軍に一度もふかくしたまはぬ人
の今度山の手やぶられて面目なくや思はれけんう」六三ウ

ずみといふ馬に乗て落られける播磨のたかさご
より小舟にのつて讃岐の八島へそわたられける去
程に一の谷の西の手もやふれにけり越前の三位
みちもりの卿はしらあしげなる馬にしろぶくりん
のくらおいてのり給ひけるが内かぶとを射させ心
しつかにじがいせんとてひがしへむけてあゆませ
給ふ所に近江の国の住人佐々木のきむらの三郎

なりつなしうじう七騎でおつかけ奉るみちもりの
きやう取て返しかたき三騎切ておとし四騎に
あたる時こむらの三郎にくんでうたれ給ぬその時
まで侍一人つき奉つたりけれ共さいごのときおち
あわず越中のせんじもりとしは山の手の侍大将　」六四オ

にてありけるがかけなる馬にきんぶくりんのくら
おいて打のり今は落とも叶まじうち死にせばやと
おもひこゝにひかへかしこにやすらひてかたきを
待所に武蔵の国の住人いのまたの小平六のりつな
よいかたきと目をかけむちあぶみを合てはせ来り
ゑつちうのせんじにおしならべゑしやくもなく
ひつくんでどうとおつゑつちうのせんじは人目に
は三十人がちからをあらはしけるが内々は六七十
人してあけおろしけるふねをたゞ一人してたや
すくをしあけおしおろす程の大力なりいのまたも
おしかのつのゝ一二の草かりをたやすくひきさき
なとして東八ケ国に聞えたるしたゝかものなり　」六四ウ

けれとも越中のせんじとつておさへてはたらか
さすいのまたあまりにつよくおさへられて物をい
わふとすれともこゑ出ず刀をぬかふとすれ共うで
すくんでかたなのつかにきられずいのまたおもふ
やうこれほどまでのりつなを手ごめにすべきもの
こそおほえね是はいかさま平家のかたに聞えたる
ゑつ中のせんじもりとしか能登殿にてもや有
らんと思ひいきのしたよりいひけるはそも〳〵かた
きのくびを取といふは我身も名乗て聞せかたき
にもなのらせてとりつれはこそ高名なれ知ぬくび
とつて何にかはし給ふべきたゞし以前に名乗
つるを聞給たるかといひけれはゑつちうのせんじ　」六五オ

けにもとやおもひけんこれはもとは一門たりしが
身ふせうなるによつてたうじさふらひと成たる
ゑつちうのせんじもりとしといふ者なりさて和
君はいかなるものそなのれきかふといへば武蔵の
国の住人いのまたの小平六のりつなとなのるゑつ

ちうのせんじ扨はわ君は小平六よなきゝおよび
たりさいごの十ねんせよくひとらんとてすこし
おしくつろけたりければいのまたかさねていひ
けるはいまは主の世におはせはこそかうみやう
してくんこうけんじやうにもあづかり給ふべけれ
たゞりをまげてのりつながいのちをたすけさせお
はしまし候へかし御一門なん十人もおはせよのり　」六五ウ

つなが今度のくんこうのしやうに申かへてたす
け奉らんといひけれは越中のせんじ大きに
いかつてきたなひ君がいひ事かなもりとし身こ
そふせうなれ平家の一もんなりいまさら源氏をた
のまんとも思はす源氏ももりとしにたのまれんと
はよも思はしとてすてにくびをかかんとすいの
またちからはおとりたれ共こゝろはかうなりけれ
ばすこしもさはがすなふまさなやかう人のくひ取
やうや候といはれてゑつ中のせんじさらばたす
けんとて取て引おこしまへははたけのやうにひあ
かつてかたかりけるがうしろはごみふかきぬま
田のくろにこし打かけ二人いきついてゐたりける　」六六オ

所に人見の四郎黒かわおとしのよろひをきつきげ
なる馬に乗たりけるが三十騎ばかりで出来りゑつ
中のせんじ人見の四郎をあやしげに見けれは
いのまたあれはすこしもくるしう候まじのりつな
かいとこに人見の四郎と申者にて候さだめてのり
つなをそたづね候らんとぞいひけるいのまた思
やうあつはれ今一度くまんずるものを人見ちかづ
かはさりともよも落あはぬ事あらしとあひまつ
ところに人見次第にちかづいてあわひ一たん
ばかりになりにけりゑつちうのせんじはじめは
両人のかたきを一目つゞ見けるが後にははせ来る
かたきをはたとにらまへていのまたを見ぬひまに　」六六ウ

いのまたちからあしをふんでつつたちあかりこ
ぶしをにきりおもひもかけぬ越中のせんじが

よろひのむないたをばくとついてうしろなるぬま
田へのけにつきたをす大のおとこのおもよろひき
たりけるがてふのはねをひろげたるがことくにて
おきん〳〵としける所をいのまた取ておさへこし
の刀をぬきくさすりを引あげてつかもこふしもと
をれ〳〵とつゞけさまに三刀さいてくひをとる
人見の四郎もきたりぬいのまたかゝるときはろん
する事もこそあれと思ひてくびをは太刀のきつ
さきにさしつらぬき高くさしあけ大おんじやうを
あけこの日比平家のかたにおにかみのやうに聞え　」六七オ

たるゑつちうのせんじもりとしをはむさしの
国のぢう人いのまたの小平六のりつながかうこそ
うつたれとそなのつたる
　　たゞのりのさいご
さつまのかみたゞのりは一の谷西の手の大将軍
にておはしけるがこんぢのにしきのひたゝれに
むらさきすそごのよろひをきくわがた打たる甲の
おをしめ金作の太刀をはき廿四さいたるきりうの
矢おひしげどうの弓持てつきげなる馬にきんぶく
りんのくらをおいて乗給へり其せい百騎ばかりか
中にうちかこまれいとさはがすひかへ〳〵落ら
れけるところに武蔵の国の住人おかべの六弥太　」　六七ウ

たゞすみよいかたきと目をかけ只一騎むちあぶみ
を合ておつかけ奉るまさなふもかたきにうしろを
みせさせ給ふものかなかへさせたまへとことばを
かけけれはこれは味方そあやまちすなとてうしろ
をかへり見給ひけるうちかぶとを見入たれはかね
くろなり六弥太たうじ味方にかね付たる武者は
なき物をこれはいかさま平家のきんたちにてそお
はすらんとておしならべむずとくむこれをみて百
騎ばかりの兵とも一騎も落あはす我さきにとぞ
にげたりけるさつまのかみはすくれたるはやわざ
の大力にておはしけれはにつくひやつがみかたと
いはゞいわせよかしとてとつて引よせ馬の上にて　」六八オ

二刀おちつく所で一刀三刀までこそさされたれ二
かたなはよろひのうへなれはとをらす一かたなは
うちかふとへつき入られたりけれともうす手なれ
はしなざりしを取ておさへくびをかかんとし給ふ
ところに六弥太がわらはおくれはせにはせ来り
打がたなをぬきさつまのかみのかたな持給へる右
のかいなをふつと打落すさつまのかみ今はかふと
や思はれけんそこのけさいごの十ねんせんとて左
の手にて六弥太がよろひの上おひむんすとつかう
で弓だけばかりそなげられける扨西にむかつて
くわうみやうへんじやう十方せかいねんぶつしゆ
じやうせつしゆふしやとゝなへもはてたまはぬに」六八ウ

六弥太後よりつつとよつてさつまのかみのくびを
うつあつはれ能大将軍をうち奉たるものかなとは
思ひけれ共名をはたれ共知さりしにゑひらにむす
び付られたりける文をといて見けれはりよしゆく
の花と云だいにてよまれたる歌一首そかゝれたる

行くれて木のしたかげをやとゝせは
花やこよひのあるじならまし

平のたゞのりとかゝれたりしに依てこそさつまの
かみとは知てけれ其後くひをば太刀のきつさきに
さしつらぬき高くさし上大おんじやうをあげて
この日比平家のかたに聞えさせ給ひたるさつまの
かうの殿をは武蔵の国の住人おかべの六弥太たゝ」六九オ

すみがかうこそうち奉たれとなのりたりれば
かたきもみかたもこれを聞てあつはれさつまの
かうのとのは歌道にもぶけいにもすくれてゆうに
やさしき大しやうくんにておはしつるものをとて
みなよろひの袖をそぬらしける

あひ

皇后くうのすけ兼たじまのかみつねまさは佐々木
の四郎たかつなにくんでうたれ給ひぬわかさの
かみつねとしは金子の十郎家忠にくんでうたれ
給ぬ門脇殿の末子蔵人の大夫成盛はあか地のにし

きのひたゝれにもよきにほひのよろひをきくろき
馬にいつかけ地のくらおいて乗給ひけるが只一騎」六九ウ
なきさを西へ落られけるところにひたちの国の
住人ひぢやの五郎高光よいかたきと目をかけむち
あぶみを合てはせきたりおしならへむずとくんで
どうどおつひちやも大ちから成盛もしたゝか人に
ておはしけれは上になり下になりころびあひける
がある小家のまへにふるゐのありけるにころび
入て二人の武者が下人も落つかす中にはたとつ
まつてそ候ひけるひちやの三郎おとゝをみうし
なふて五郎はいつくにか〳〵とよばはつたりけれ
は井の内にて爰にとこたふひぢやさしうつむいて
見けれはおとゝがよろひはふしなわめかたきのよ
ろひはもよきにほひにしきのひたゝれなれはなし」七〇オ
かはまかふべきおとゝがきたるかぶとのしころを
むすとつかふてゑいやつといふて引あげけれは成
盛もひちやがこしにいたきついてそあがられける
やがて成盛をばとつておさへてくびを取しやう年
十六にそなられける

あつもりのさいご

一の谷の西のきどぐちやぶれにしかば熊谷の次郎
なをざね平家のきんだちのたすけ舟にのらんとて
みぎはのかたへ落給ふ事もやおはすらんあはれ
能大将軍にくまばやとおもひけれはなぎさへ馬を
あゆませける所にねりぬきにつるぬふたるひたゝ
れにもよぎにほひのよろひをきくわがた打たる甲」七〇ウ
のおをしめ金つくりの太刀をはき十八さいたるき
りうの矢おひしげどうのゆみ持てれんぜんあしげ
なる馬にきんぶくりんのくらおいて乗給たる武
者たゞ一騎なみにさつと打入うみのおもて七八
たんばかりおよかせおきなるふねにめをかけて
おはしけるをみつけ熊谷あはれよき大将軍とこそ
見まいらせ候へまさなふもかたきにうしろを見

せさせ給ふものかなかへさせ給へ〳〵とあふぎを
あけてまねきければまねかれて取て返しなき
さにうちあからんとし給へるになみうちぎはて
おしならへむずとくんでどうとおつ熊谷とつてお
さへくびをかかんとしけれともあまりに物よはう」七一オ

おほえけれはうちかぶとをおしあをのけて見ける
にいまだ十六か七かとみえ給ひたるじやうらうの
やうがんまことにびれいなりけるがうすけしやう
してかねくろ也熊谷我子の小次郎が事を思出て
いとをしやこの人の父母いくさばへ出し立ていか
ばかりの事をか思ひ給らんにはやうたれたり
と聞給ひたらばさこそはなげかせたまはんすらめ
なをさねか小次郎とうちつれて軍をするだにも
おほつかなきぞかし今朝一のたにの西のきとぐち
にて小次郎かめ手の小かひなをのぶかに射させ
矢ぬいてたべといひつるをふかくじんかないまし
ばしこらへよとてぬかざりつるが其後は大せい」七一ウ

におしへたてられししやうを知でこゝろもとなく
かなしき事かきりなし人のおやの子をおもふ
ならひ此人の父母もなをざねが小次郎を思ふやう
にこそ思給ふらめたすけまいらせんと思ていか成
人にてましますそなのらせ給へたすけまいらせん
といひければかういふわとのは何者ぞまづ名乗と
いはれて是は武蔵の国の住人熊谷の次郎なをさね
となのるさてはなんちが為にはよいかたきそ存る
むねがあれば名乗まじなのらす共くびを取て人に
とへみしらふずるそとこそ宣ひけれ熊谷あまりに
此人のしづまりかうにおはするほとをかんじて
あはれ大将軍やこの人一人うち奉たれはとてまく」七二オ

べき軍にかつ事もあるまし又たすけ奉たれは
とてかつべき軍にまくる事も有ましせんする
ところたすけまいらせんと思ふてうしろをきつと
見ければ土肥の次郎三百騎ばかりでつゝいたり
さきは畠山五百騎ばかりでさゝへたり熊谷なみだ

をはら〳〵と流てたすけまいらせんと存候へどもみ
かたのつはものともうんかのことく候へはよものはし
まいらせ候はしおなじうはなをさねが手にかけ
奉て御ぼだいをこそとぶらひまいらせ候はんずれ
前世の事とおほしめされ候へしと申けれは此
人うちうなづき給てたゞとう〳〵くひをとれとぞ
宣ひけり熊野あまりにいとおしくて目もくれ心も　」七二ウ

きえはてゝいつくに刀をたつべしともおほえす
扨しもあるべき事ならねはこしのかたなをぬき
なく〳〵くびをそかいてけるあはれ弓矢取身程くち
をしかりける事はなしぶけいの家にむまれすは何
とてか只今かゝるうきめをは見るべきなさけなふも
うち奉物かなとかきくどきよろひの袖をかほにお
しあてゝさめ〳〵とそなきゐたるやゝ有てよろひ
ひたゝれを取てくひをつゝまんとしけるにしき
のふくろに入たりけるふゑをそこしにさゝれたる
あないとおし此あかつき城の内にてくわんげんし
給ひつるはこの人々にておはしけるかたうじ御方
に東国より上りたるせいなんまん騎かあるらんに　」七三オ

軍のぢんへふゑ持人はよもあらし上らうはゆう
にやさしかりけりとて此ふゑを大将軍のげんざん
に入たりけれは見る人なみたをながしそでをぬら
さぬはなかりけり後に聞はしゆりの大夫つね
もりの子息大夫あつもりとてしやうねん十七にそ
なられけるそれよりしてこそ熊谷がほつしんの
心はすゝみけれくだんのふゑはおほぢ忠盛ふゑの
上手にて鳥羽院より給られたりしがつねもりさう
てんせられけり然をあつもりきりやうたるに依て
もたれたりけるとかや名をはこゑだとそ申ける
きやうげんきぎよのことはりと云ながらつゐに
さんぶつぜうのいんと成こそあはれなれ　」七三ウ

しげひらのいけとられ

去程に大手いく田のもりにも武蔵さがみの兵とも

おめきさけんでせめたゝかふ平家の方の大将軍に
は新中納言知盛のきやう本三位の中将しげひらの
きやうつかう其せい五万余騎東へ馬のはなをむけ
てたゝかはれけるところむさしのこだまたうの中
より平家へ使者をたてゝ新中納言へ申けるは君
は一年武蔵のこくしにてわたらせ給へばその
よしみをもつて申候なり一の谷こそはやぶれ
て候へうしろをは御らんせられ候はぬやらんと
申たりけれはしん中納言をはじめてをの〳〵後を
かへり見給へばまことにも黒けふりみち〳〵たり是を
見て五万余騎のつはもの共みな国々のかり武者では
あり我さきにとそ落行ける本三位の中将しげ
ひらのきやうはかちにしろふきなるいとをもつて
いわにむらちどりぬふたるひたゝれにむらさきす
そごのよろひをき大い殿より給られたりけるどう
じかげと云きこゆる名馬に乗給ふめのとごの後藤
兵衛盛長をば日比我ひさうせられたる夜目なし
」七四オ

つきげにこそのせられけれ主従二騎うちつれて
なきさを西へ落られけるがたすけ舟ともおほかり
けれともかたきはうしろにちかつく乗べきひまも
なかりければ力及はすみなと川かるも河を打わた
りこまのはやしを弓手になしはすのいけをめてに
見ていたやどすまをもうち過て明石のかたへぞ落
られけるかゝりし所に武蔵の国の住人しやうの
四郎高家と名乗て主従五騎にておつかけ奉る三位
の中将の乗給ひたりけるどうじかげはくつきやう
の名馬ではありたやすくおつ付べしともみえさり
けれはしやうの四郎もしやとむちあぶみを合て
矢ごろにはせちかつき中ざし取てうちつがひ
よつ引てひやうど射る三位の中将の乗給ひたり
けるどうじかげがさうつをのぶかに射させてよ
はる程にめのとごの後藤兵衛盛長此よしを見て我
馬めされまいらせなんとや思ひけん引返しむち
をうつてひがしのかたへそ落行ける三位の中将
」七五オ

やうれもりながよ日比はさはちきらざりし物を
その馬まいらせよとのたまへ共そらきかずして
よろひにつけたりあるしるしどもかなぐりすて
たゞにけにこそにけたりけれ三位の中将今はかな
はじとや思はれけんうみへ打入られけれ共そこし
もとをあさにて左右なふしづむべきやうもなかり
けれは又なきさにうちあかり馬よりおり上おび
おし切高ひぼはづしすでにはらきらんとし給ひ
けるをしやうの四郎高家むちあふみをあわせて
はせ来りいそぎ馬より飛でおりなぎなたとりなをし
まさなふも御じがい候ものかなたすけまいらせん
する物をとて我馬にかきのせ奉りおびにてくらの　」七五ウ

まへわにしたゝかにしめつけ我身はのりがへに
のつて味方のせいの中へぞ入にけるさこそうん
つきたる平家といひなから本三位の中将しげひら
のきやうのいけどりにせられ給ふそあさましき
めのとごの後藤兵衛盛長はそこをなんなくにけの
ひて後には熊野の法師尾中のほつきやうをたのん
でゐさりけるがほつきやうしゝて後家のにこうそ
せうの為に都へ上りたりけるにもりながも供して
のぼつたりけれは三位の中将のめのとごにて上下
にはおほく見知られたりあなむざんのもりなかや
三位の中将のさしもふ便にし給ひつるに一所で
いかにもならずして思よらぬにこうの供したる　」七六オ

にくさよとてみなつまはしきをしけれはもりなが
もさすがはづかしうやおもひけんあふぎをかほに
かざしけるとそ聞えし

ともあきらのさいご

尾張のかみきよさだあわぢのかみきよふさ二人は
河越の小太郎しげふさが手にとり籠て終にうち
奉てけり新中納言知盛のきやうはききよれうのひ
たゝれにはじのにほひのよろひをき大臣殿より給
はられたりける井上黒といふきこゆる名馬に乗
給へり御子武蔵のかみともあきらはうきおり物の

ひたゝれにつまにほひのよろひをきゝかはらけ
なる馬に乗給ふめのとこのけんもつ太郎よりかた」七六ウ
はひしだすきのひたゝれにかたじろのよろひをき
しらあしげなる馬にそのつたりける主従三騎うち
つれたすけ舟にのらんとてみぎわのかたへほそ
道にかかつて落られけるところにこだまたうと
おほしくてうちわのはたさゝせたる武者十騎ばか
りでおつかけ奉るけんもつ太郎よりかたは聞る
弓の上手なりけれは取て返しまつさきにすすん
たるはたさしがしやくびのほねをひやうふつと射
て馬よりさかさまに射落す扨大将とおほしきもの
新中納言にくみ奉らんとてはせならぶる所に御子
むさしのかみともあきら父をうたせじと中にへだ
たりおしならべひつくんでどうと落かたきかくび」七七オ
かき切ておきあがらんとし給ふところをかたきが
わらはおち合て武蔵のかみのくびをとるけんもつ
太郎おちかさなつて武蔵のかみの御くびとつたり
つるわらはがくび取てけり其後けんもつ太郎うち
物ぬいてたゝかひけるがひざのふしをしたゝかに
射させて立れさりけれはゐながらかたき三騎うつ
とりおきもあがらでうち死すありがたかりし事
ともなりその間に新中納言とももりのきやうは
そこをつつとにけのびてくつきやうのいきながき
名馬にはのり給ひぬ波にさつと打入うみのおもて
廿余町およがせて大臣殿の御ふねへぞまいられ
けるふねには人おほく取乗て馬立べき所もなかり」七七ウ
けれはもとのなきさへおつかへさる阿波のみんぶ
重義此よしをみてたゞいまあの御馬かたきのものに
なり候ひなんず射ころし候はんとてかた手矢はけ
て出けれは新中納言よし〳〵それはなにの物にも
ならはなれ只今我をたすけたらんする物をいかて
かなさけなふ射ころすべき事有へからすとの給へ
ばちから及はて射さりけり此馬ぬしの名残をおし

むかとおほしくてしはしはふねをはなれすおきの
かたへおよきけるが次第にとをくなりけれはもと
のなきさへおよぎかへりあし立ほどにもなりし
かばなをふねのかたをかへり見てあしかきしつゝ
二三度までこそいなゝきけれ其後此馬をは河越の　」七八オ

小太郎しげふさ取て九郎御ざうしへ奉る義経院へ
まいらせられけりさてこそかわごへ黒とはめされ
けれ本も院の御馬なりしなのゝ国井上より参り
たりければ井上黒と名付て御むまやにたてられ
たりしが宗盛の卿内大臣にあかり給ひてよろこび
申のありしとき院より給られたりしを御弟
新中納言にあづけ申されけりしん中納言あまりに
ひさうして此馬のいのりのためにまい月朔日
ことにたいさんぶくんをぞまつられけるそのゆへ
にや馬のいのちもながく主をもたすけけるこそめ
でたけれしん中納言知盛のきやう大臣殿の御前に
まいりなみだを流て申されけるは武蔵のかみにも　」七八ウ

をくれ候ひぬけんもつ太郎をもうたせ候ぬいまは
こゝろぼそふこそまかり成て候へいかなれは子は
あつておやをうたせしとかたきにくむを見ながら
いかなるおやなれは子のうたるゝをたすけずし
て是まではのがれ参て候やらん人の上でだに候はゝ
いかばかりかもどかしう候べきに我身の上になり
候へばよふいのちはおしいものにて候けりと思ひ
しられてくちおしうこそ存候へ今のおほしめさ
れんする御心のうちこそはづかしけれとてよろひ
のそでをかほにおしあてさめ〳〵となかれけれは
大臣殿武蔵のうみの父のいのちにかはられける
こそ有がたけれこゝろもかうにして能大将軍にて　」七九オ

候ひつる物をとて御子衛門のかみのしやう年十六
になり給ひけかるが御そばにおはしける方を見やり
給ひて武蔵のかみはあの衛門のかみと同年なと
宣ひもあへすなみだぐみ給へはふねの内の人々心
あるも心なきもみなよろひの袖をそぬらされける

おちあし

小松殿の末子備中のかみもろもりは主従七人小ふねに取乗て落給ふところに新中納言知盛の卿の侍にせいゑもんきんながといふ者ありかたきにおつかけられなきさにはせ下りあれはひつちうのかうの殿の御舟とこそ見まいらせ候へ参り候はんと申けれはひつちうのかみあれはいかにきんなが」七九ウ

うたすなのせよやとて舟をみぎわへおしよせらるそこしもとをあさにてふねよらさりけれはせいゑもん馬のふとはらひたるほどに打入て見けれは其あひわづかに弓だけはかりあるらんとそみえし備中のかみかたきの近付にとうのれかしとの給へは大のおとこのおもよろひきたりけるがさしもなき小ふねへおもひのまゝにかはと飛乗らんになしかはよかるべきふねふみ返し一人もたすからす畠山が郎等本田の次郎主従十四五騎むちあぶみを合てはせきたりいそき馬よりとんでおりひつちうのかみを熊手にかけて引あげ奉り終にくびをぞかいてけるしやう年十四歳とそ聞えし」八〇オ

をよそ東西のきどぐち時をうつす程にもなりしかは平家数をつくしてうたれにけり矢倉の前さかもぎのもとには人馬のしゝむら山のごとし一の谷のおざゝはらみどんの色を引かへてうすくれなゐにぞなりにける一の谷いく田のもり北の山ぎは南のなきさにていられきられて死ぬるは知すくがにはたざほをゆいわたいてかけしるすくび三百余人なり軍やぶれにしかばしゆ上をはじめまいらせけんれいもんゐん二位殿以下の人々みな御ふねにめして出させ給ふ御こゝろのうちこそかなしけれしほにさそはれ風にしたがひきぢへおもむくふねも有あしへのおきにこぎいだひて波にゆらるゝ」八〇ウ

舟も有あるひはすまより明石のうらつたひとまりさだめぬかちまくらかたしく袖もしほれつゝおぼ

ろにかすむはるの月心をくたかぬ人そなきあるひ
はあわぢのせとをおしわたりゑしまがいそにとま
ればなみぢかすかにうちなきて島かくれ行しこゑ
にをのがともまよはせる小夜千鳥これも我身の
たぐひかな行前いまだいつくとも思ひさだめぬ
とおほしくて一の谷のおきにやすらふふねも有
かやうにしほにひかれ風にまかせてうら〳〵島々に
とまればたかひにししやうも知がたし平家国を
したかへる事も十四ケ国せいの付事も十万余騎
都へちかつく事もわづかに一日二日の道なれは　」八一オ

今度はさり共とたのもしう思はれつるに一の谷を
せめ落されて人々みな心ぼそふそなられける

小宰相の身なげ

今度一の谷にてうたれ給ふ宗との人々には越前の
三位みちもり弟蔵人の大夫なりもりさつまのかみ
たゞのり武蔵のかみともあきら備中のかみもろ
もり尾張のかみきよさだあわぢのかみきよふさ皇
后くうのすけつねまさおとゝわかさのかみつねと
し其おとゝ大夫あつもり以上十人とそ聞えし十の
くび都へいる幷に越中のせんじ盛としがかうべも
京へのぼる本三位の中将しげひらの卿はいけとり
にせられて都へのほり給ひけり母二位殿北のかた　」八一ウ

大納言のすけ殿の心の内おしはかられてあはれ也
二位殿あはれやあの三位の中将がいけどりにせ
られていかはかりの事をか思ふらんとてぞなか
れける大納言のすけ殿はさまかへんとし給ひける
を大臣殿も二位殿も君をはいかてかすてまいらつ
させ給ふべきとやう〳〵にせいし給へはいきて此
世におはするほどはとてさまをもかへ給はすふし
しつみてぞなかれける今度うたれ給ひし人々の北
の方たいりやくさまをそかへられける越前の三位
みちもりのきやうの侍にくんだたきぐちときかす
と申者有北の方の御ふねへ参て申けるは君に今朝
みなと河のすそにてかたき七騎が中に取籠られ　」八二オ

させ給てうたれさせおはしまし候ぬ其中に手をおろいてうちまいらせて候は近江の国の住人佐々木の木むらの三郎もりつなとこそ申候ひつれとき
かずも一所でうちじに仕へう候ひしを兼ての仰
にはみちもりいかになる共なんちはいのちをすつへからすいかにもしてながらへて御行衛を見つきまいらせよと仰おかれ候ひつるあひだかいなきいのちいきてつれなふ是まで参て候と申たりけれは北のかたとかくの返事をもし給はす引かついてそなかれける一でううたれ給ぬとは聞なからもし此事のひが事にてもやあらんすらん生て帰る事もやとてあからさまに出たる人を待心ちして二三日の間はしたまたれけるが四五日にもなりしかば
もしやのたのみもよはりはてゝこゝろぼそくそなられけるたゞ一人つき奉たりけるめのとの女房もおなじまくらにそふししつみけるかくと聞し七日のくれ程より十三日の夜まではおきもあがりたまはす明れば十四日八島へつかんとてのよい打過るまでふし給たりけるがふけ行まゝに舟の中
しつまりけれはめのとの女房にのたまひけるは今朝までは三位うたれぬときゝしかともまこと共思はで有つるに此くれほとよりけにさもあるらんとおもひさだめて有そとよ其故は人ごとにみなと川とかやにてうたれにしとはいへとも其後いきて　」八三オ

あふたりといふもの一人もなし三位明日打いでんとての夜あからさまなる所で行あふたりしかば
いつよりも心ぼそげにうちなげいてあすの軍には一でううたれなんずとおほゆるはとよ我いかにも成なん後人はいかにし給べきなといひしか共軍はいつもの事なれは一でうさるべからんとも思はさりける事のかなしさよそれをかぎりとだに
思はましかはなど後の世とちきちさりけんと思ふさへこそくやしけれ身もたゞならすなりたることをも日比はかくしていわさりしかとも心つよう思

はれじとて云出したりしかはなのめならすうれしげにてみちもりすでに三十になるまで子といふ」八三ウ

物のなかりつるにあはれ同はなん子にてあれかしうき世の忘形見にもおもひおくべきぞとよ扨いく月ほどに成やらん心ちはいかゞおはするぞいつとなき波の上舟の中のすまゐなれは身々となつて後もいかゞせんなといひしははかなかりけるかねことかなまことやらん女はさやうの時十に九はかならず死なるなれははちがましきめをみてむなしうならんも心うししつかに身々と成てのちおさなき者をもそだてゝなき人のかたみにも見ばやとは思へともおさなき者を見る度ことにはむかしの人のみこひしくておもひの数はまさるともなくさむ事はよもあらし終にはのかるまじき道なり」八四オ

もしふしぎにて此世を忍び過すとも心にまかせぬ世のならひは思はぬふしもあるそかしそれを草のかげにて見んも思へはこゝろうしまどろめば夢にみえさむればおもかげにたつそとよいきてゐてとにかくに人をこひしと思はんよりたゞ水のそこに入はやと思ひさだめてあるそとよそこにひとりとゞまつてなげかんずる事こそ心くるしけれ共それは生身なれはなげきながらもすごさんすらんわらはがしやうぞくの有をはいかならん僧にもとらせなき人のほたいをもわらはがごしやうをもとぶらひ給へ書おきたる文をば都へつたへてたへなとこま〳〵との給へはめのとの女房なみだ」八四ウ

をおさへて申けるはいとけなき子をもふりすて老たるおやをもとゝめおいてこれまでつきまいらせさふらひしをばいかばかりとか思食れさふらふ今度一の谷にてうたれさせ給ふ人々の北の方の御おもひともいづれかおろかにさふらふべきそれもたいりやく様をこそかへさせ給ひてさふらへたゝならぬ人の死したるはことにつみふかくさぶらふ

なるされはいかならん岩木のはさまにてもしつか
に身々とならせ給ておさなき人をもそたてまいら
せ御さまおもかへ仏の御名をもとなへてなき人の
御ほたいをもとぶらひまいらつさせ給ふべしかな
らす一道へとおほしめしさぶらふともしやうかはら　」八五オ

せ給ひなん後は六道四生のあひだにていづれの道
へかおもむかせ給はんすらん行合給はん事も
ふでうなれは御身をなげてもよしなき事なり其
うへ都の御事をはたれ見つきまいらせよとてさ
やうにはおほせさふらふやらんうらめしうも承る
ものかなとさめ〳〵とこそかきくどきけれ北の方
此事あしう聞えぬとや思はれけんこれは心に
かはりてもおしはかり給へし大かたの世のうら
めしさにも人の別のかなしきにも身をなげんなと
いふ事はつねのならひなりされ共さやうの事は
有がたきためしなりたとひ思立事ありと云とも
そこにしらせずしてはあるましきぞ今は夜も　」八五ウ

ふげぬいざやねんとのたまへはめのとの女房此四
五日はゆ水をだにはか〳〵しう御らんじ入たま
はぬ人のかへうに仰らるゝはまことに思立給へるに
こそとかなしくて大かたは都の御事もさる御
事にてさふらへともけにも思食たゝばちいろの
そこまでも引こそぐせさせ給はめおくれまいらせ
て後さらにかたときも存ふべしともおほえぬもの
をなと申て御かたはらにありながらすこしまど
ろみたりけるひまに北の方やはらおきなをりふな
はたへこそ出られけれまん〳〵たるかいしやうな
ればいつくを西とは知ねとも月の入さの山のはを
そなたのそらとや思はれけんしづかにねんふつし　」八六オ

給へばおきのしらすになくちどりともまよはせる
小夜ふけがた天のと渡るかぢのをとかすかにきこ
ゆるゑいやこゑおりからあはれやまさりけん忍び
こゑにねんふつ百へんばかりとなへ給て面無西方
ごくらくせかいけうしゆみだによらいほんぐはん

あやまたずじやうどへみちひき給つゝあかで別し
いもせのながらへかならず一はちすにむかへさせ
給へとなく〳〵はるかにかきくどきなむとゝなふる
こゑともにうみにそしつみ給ける一の谷より八
島へおしわたる夜はんはかりの事なれはふねの
うちしつまつて人是を知らざりけるにならびの舟
にかんどり一人ねさりけるがみまいらせてあな　」八六ウ

あさましあの御ふねより女房の只今うみへ入給ふ
ぞやとよばはりけれはめのとの女房うちおどろき
そばをさぐれ共おはせさりけるあひだふなはたへ
はい出てあれや〳〵とそあきれける人あまたおり
て取あげ奉らんとしけれともさらぬだに春のよの
ならひはかすむ物なるに四方のむら雲うかれきて
月はなをかすか也阿波のなるとのくせとしてみつ
しほ引しほはやけれはかづけ共〳〵月おぼろにて
みえさりけりやゝあつてとりあけ奉たりけれとも
はや此世になき人となり給ぬしろきはかまに
ねりぬきの二衣をき給へりかみもはかまもしほた
れて取あけたれともかいそなきめのとの女ばう手　」八七オ

に手をとりくみかほにかほをおしあてゝなとや是
ほどにおほしめし立ける事ならはちいろのそこ
までもひきはぐせさせたまはぬそさるにても物一
ことば仰られて聞せ給へともだへこがれけれとも
一ことはの返事にも及給はすわづかにかよひける
いきもはやたえはてぬ去程にはるの夜の月も雲
ゐにかたぶいてかすめるそらも明行は名残は
つきせず思へとも扨しもあるべき事ならねは
故三位殿のきせながの一両残たりけるに引まとひ
奉り終にうみへしつめ奉るめのとの女ばう今度は
おくれ奉らじとつゞいていらんとしけるを人々
とりとゞめられければちからをよはすせめての　」八七ウ

せんかたなさにや手づからかみをはさみ落し故三
位殿の御弟中納言のりつしちうくわいにそらせ奉

りなく〳〵かいをたもつて主の後世をそとぶらひける
むかしよりおとこにおくるゝたぐひ多といへとも
様をかふるはつねのならひ身をなぐるまではあり
がたきためし也ちうしんは二君に仕へずていぢよ
は二ふにまみえず共かやうの事をや申べき此北の
方と申はとうの刑部卿のりかたのむすめ上西門院
の女房宮中一のびしん小宰相のつぼねとそ申ける
此女房十六と申春のころしねう院法勝寺へ花見の
御幸の有し時道盛の卿其時は未中宮のすけにてぐ
ぶせられたりけるが此女ばうを只一目みてあはれ」八八オ

と思ひそめけるより其おもかげのみ身にひしと立
そひて忘るゝひまもなかりければ歌をよみ文をつ
くし給ひしかとも玉つさの数のみつもつて取入給
事もなしすでに三年になりしかはみちもりの
きやう今をかぎりのふみを書て小宰相殿のもとへ
つかはさる折節取つたへける女ばうにだにあわ
すして使むなしく帰りける道にて小宰相殿我里

より御所へまいられけるに行合たり使むなしう
帰り参らん事のほいなさよそばをつつとはしり
とをるやうにてに小宰相殿ののり給つるくるまのす
たれの中へみちもりのきやうのふみをぞなげ入
ける供の者共にとい給へは知まいらせすと申扨此」八八ウ

ふみをひらひて見給へはみち盛の卿のふみにてそ
有けるくるまにおくべき様もなし大路にすてんも
さすがにてはかまのこしにはさみつゝ御所へそ参
給けるさて宮仕給ける程に所しもこそおほけれ御
前にふみを落されたり人しもこそ多きに女院是を
御らんしていそぎ御衣の御たもとにひきかくさせ
給ひて御所中の女房たちをめし出させ給ひつゝ
めつらしき物をこそもとめたれこの主はたれなる
らんと仰けれは女房たちもろ〳〵の神仏にかけて
知まいらせすとのみそ申されける其中に小宰相殿
はかほ打あかめそばむいてつや〳〵物も申されす
女院重てさていかにや〳〵と仰せけれは小宰相殿あ」八九オ

のみちもりのとはかりそ申されけるねうゐんも道
盛のきやうの申とは内々しろしめされたりけれは
此ふみをひらひて御らんするにきろのけふりのに
ほひことになつかしく筆のたてどもよのつねなら
すあまりに人の心つよきも中々今はうれしくて
なとこま〳〵と書ておくには一首の歌そ有ける

わかこひはほそ谷川のまる木はし
ふみかへされてぬるゝ袖かな

ねう院是はあはぬをうらみたる文也あまりに人の
心つよきも中々あたと成物を中ごろ小野の小町
とて見めかたちうつくしくなさけの道有がたかりし
かば見る人きもたましゐをいたましめ聞人心を　」八九ウ

つくさずと云事なしされ共心つよき名をや取たり
けんはてには人の思のつもりてせき寺のへんにす
まゐしつゝやどにくもらぬ月ほしをなみだのとこ
にうかべ風をふせぐたよりもなく雨をもらさぬわ
さもなしのべの若なさへのねぜりをつみてこそ
つゆのいのちを過しけれ女院これはいかにも
返事あるべきそとて御すゝりめしよせて忝もみづ
から御返事あそはされけり

たゝたのめほそ谷川のまる木はし
ふみかへしてはおちさらめやは

むねの中の思はふしのけふりにあらはれ袖の上
のなみだはきよみがせきの波なれや見めは幸の花　」九〇オ

なれは三位此女房を給てたがひに心ざしあさから
ずされば西かいのたびのそらふねのうちのすまゐ
まで引ぐしてつゐに同じ道へぞおもむかれける
門脇の中納言はちやくし越前の三位の末子成盛に
もおくれ給ぬ今たのみ給つる子息とては能登の守
のりつね中納言りつしちうくわい計也故三位殿の
形見共此女房をこそ見給ひつるにそれさへかやう
になられけれはいとゝ心ぼそくそなられける

平家物語巻第九終　」九〇ウ

（遊紙）　」九一オ

（遊紙）　」九一ウ

翻刻の確認作業で吉永優真氏の教示を得た。御礼申し上げたい。